

夜明けを望むけものたち

メリケン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まだ、夜は明けない。

それでも、いつか。

書き終わるのに苦労しましたが、滅茶苦茶楽しかったです。

ザバ軸バットマンとBloodborneのクロスオーバーというマジキチ作品です。

多くは語りません。各章の注意事項をよく読んでから、本文をお楽しみください。

pixivでも同じものを投稿しております。

※3/24 第2章(前編)更新しました。

※注意！

・ザバ軸バットマンとBloodborneクロスオーバーとかいうマジキチ作品です。なるべく分かりやすいようにはしておりますが、両方、特にBloodborne分からないと内容が入ってこないと思います。

・本文の時間軸は映画のあとを想定しておりますので、その性質上映画のネタバレを多分に含みます。

・結局は二次創作だということを忘れないでください。本家様とは一切関係ございません。

・両作品のイメージを著しく損なう場合がございますので、苦手な方はお戻りください。

- ・登場キャラに偏りがございます。あらかじめご了承ください。
- ・好きなように書いてます。
- ・今回津波災害についての描写シーンがありますので、不快な方は読むことをお勧めしません。
- ・自害、殺人に関するワードが多く出ております。作者にそれらを推奨する意図は全くございません。
- ・全てフィクションの中の出来事であり、現実とは全く関係ありません。
- ・バットマンも狩人様も皆大好きです。
- ・第2章でジャスティスリーグが登場しますが、基本的な設定は映画準拠、その他オリジナル設定を混ぜ込んでいます。

感想お待ちしております（交信し）

目次

第1章：月の香りの狩人

血塗れ	1
逢着	6
つわものが夢のあと	14
白いリボンの少女	20
‘狩人’ という存在	29
赤い月	37
夜明けを望むけものたち	51
朝日と希望	65
あとがき（作者感想）と人物設定	71
続編予告	75
第2章（前編）：暗闇に融けるもの	
改革の兆し	78
暗闇を導く月光	85
暗闇へ誘う星明り	97
暗闇を切り裂く刃	108
暗闇を飲み込む狂気	122
暗闇を深める神秘	136

第1章：月の香りの狩人 血塗れ

「ああ、獣狩りの夜が始まる」

唯一の生き残りであった男はそう言い残し、自身の舌を噛み切つて死んだ。

常に厚い雲で覆われているゴツサムの街にしては珍しい、良く晴れた空に夕焼けが映えるような頃であった。



治安状況が最悪で最低なゴツサムの街において、残念ながら殺人、という犯罪はごくありふれたものだ。

だが昨夜起こった事件は、例を見ないほど凄惨で不可解なものであった。

偶然というべきか、事件の一部始終を映していた防犯カメラがあった。そのためバットマンことブルース・ウェインは、その映像を協力者であるゴツサム・シテイ警察のジエームズ・ゴードンから極秘に入手したのだ。過去に何度も協力してもらっているが、今回は明らかに機密情報の漏洩である。だが彼は事件の解決になるのならと、渋々とした様子であったがUSBを手渡してくれた。

現在ブルースは、バットケイブに据え付けた数多くのモニターを睨みつけているところだ。勿論モニターにはゴードンから拝借した映像が流れている。何度も何度も繰り返し、決して見逃すまいと目を充血させながら食い入るように見つめた。

「マスタ・ウェイン。そろそろお休みにならねえと、貴方様の両目が使い物にならなくなりますよ」

バットケイブに繋がるエレベーターが起動したと思ったら、ワゴンを押して下りてきた執事——アルフレッドがいた。ふとそれを見たブルースは、確かに自分の目と首と肩が非常に痛むことを自覚し、

映像を止めてアルフレッドに手招きした。

「そんなに動いて大丈夫か」

「その質問、もう8度目でございますよ。3ヶ月も経ったのですから、動かねば鈍ってしまいます。特にこの老体では、ですよ」

「そうか。——紅茶を、いただいても?」

「勿論。お茶請けにスコーンもどうぞ。彼女の焼きたてです」

彼女、というのは、アルフレッドと同じくブルースに仕える使用人ドリーのことである。細かな気遣いができ、お菓子を焼くのがとても上手だ。ブルースは僅かに微笑み、甘やかな湯気を漂わせる紅茶が注がれる様を黙って見ていた。

「進捗はいかがですか?」

「全くだ。犯人の手がかりすら掴めない。犯人と似たような背格好の人物なら掃いて捨てる程いるし、被害者…いや加害者か?ともかくチンピラ共は皆死んでいる」

「少女の方は…私の方で調べましたが、やはり何も覚えていないそうです」

「そうか——いや、寧ろその方が良いのかもしれない。幼い子にあの光景を思い出せという方が酷だ」

椅子に座ってスコーンを一口食べ、紅茶を胃に流し込みながら、ブルースは先程まで見ていた映像の内容を思い出す。

映像の始まりには、少女が映っていた。

防犯カメラ故に鮮明ではなく、また少女の映り込みも小さいものであったが、それなりに裕福な家庭であることが窺える小綺麗な恰好をしているのが分かった。

この映像を撮った防犯カメラが設置されているのは、大通りから外れた暗い路地だ。何故少女が一人でいるのか、如何して両親がいないのか、映像だけでは全く分からない。——だが残念ながら、この後の展開は火を見るより明らかだった。

少女が大通りに繋がる方向、即ち右側からフレームインしてきたことに対し、ゴッサム・シテイの貧困エリアに繋がる左側から、複数の

男がやってきたのだ。

映像が荒く表情まで見ることは叶わなかったが、きつとニタニタと厭らしい笑みを浮かべていたに違いない。身代金目当てか、それとも欲望のはけ口にするのか、ともかく男共は少女を標的として定めたように、じりじりと距離を詰めていた。

少女は恐怖のあまりか動こうとはしなかった。その態度に気を良くしたのか知らないが、男共の距離の詰め方はすぐに大雑把なものへと変わり、少女の方に手を掛けようとした——その時。

風が、吹いた。

吹いた後には、肉片しか残っていなかった。

男共の数は7。荒い映像越しでも分かる、鍛えられた肉体だった。

だが風が吹いた途端、一瞬で肉片になったのだ。何かに無理矢理切り裂かれたようにバラバラに。きつと男共は悲鳴を上げる暇もなかっただろうな、と他人事のように思った。

そして、またもや左側から人がやってきた。コートを着た人だ。ゆつくりとした歩みで少女に近付く様子は、心配からくる行動と思われる。：というより、そう思ったかった。散らばる肉片を容赦なく踏み潰し、全身を血で染めていることから、この者がこの惨状を作り上げた犯人であることは明白だった。

気付けば少女は座り込んでいた。男共の血の海に身体を浸すように。

そんな少女を気遣う様に、コートの者は少女の前に跪く。懐から何かを取り出す仕草をして、それを少女の口元に持っていった。

”何か”は、きつと液体の入った入れ物だったのだろう。それを口にした少女は糸が切れたかのように倒れ、それをコートの者が支えた。そのまま抱えて運び、血がない所に少女を安置して——左側へと、フレームアウトしていった。

その数分後に、ゴッサム・シティ警察が現場に突入してきた。

そこで映像は終わりだ。

ブルースは、ティーカップを持ちながら後ろの作業台を見遣る。写

真が台の上で散らばっているのが目に入った。

この写真は犯行現場を撮ったもので、防犯カメラの映像より非常に鮮明だ。だからこそ分かる。現場に流された血の量も、散らばる肉片の数も、——元軍人のアルフレッドが惚れ惚れするような鮮やかな切り口も。

7人いた男共は、映像を見る限りでは全滅したかに思えたが、どうやら1人だけ生きていたようだった。だが両足と左腕を失い、酷く錯乱していた。そして本日の夕方、「獣狩りの夜が始まる」と言い残し、死んだ。

これでこの事件について証言できる者はコートの子か少女だけとなったが、少女の方は何も覚えていないとのことだ。

「今後、トラウマとしてフラッシュバックすることが無いと良いが……」
「いいえ、違うのです、マスタ・ウエイン」

「何が違うと？」

ブルースが思わずといった様子で聞き返すと、アルフレッドは神秘的な顔つきで話し始めた。

「事件のショックで一時的に、だとか、あまりにも凄惨な現場だったため脳が拒否反応を示して、などではありません」

此方を、と渡された書面には、何かの成分表が書かれていた。

「少女の血中に含まれていた薬物と、現場に投げ捨てられていた小瓶の中身の液体です。どうか、見比べてください」

「血中に含まれる薬物、と言うが……ただの血液の成分と何ら変わりない……何だ、これは」

少女の血液に何の異常も見られないことを確認し、謎の液体の成分表に目を滑らせたとき、ブルースは瞠目した。

「確か青い液体だっただろう」

「はい、左様でございます」

「なら何故、これは、どう見ても血液じゃないか！」

項目に???が複数あること以外は、血液の成分表と全く同じだ。恐らくこれを少女に飲ませたのだろうか、まさか、血液だったとは。

それに血液とは本来赤いものだ。赤色の原因であるヘモグロビン

が取り除かれているのならまだ分かるが、成分表を見る限り違うようだ。

「???の項目は解明できていないが、未知の成分である可能性が高いぞうだ。」

「無意味に謎の液体を少女に飲ませるとは思えません。単純に、人の記憶を消すことのできる代物と見て間違いないかと」

「この書類の通りだと、DNAが既存の生物と当てはまらないらしいな」

「その通りです。未知の攻撃手段、未知の薬品、そして未知の血液…ああ、申し訳ありません、更に迷宮入りに近づけてしまいました」

おどけたような口調であったが、アルフレッドも悔しさを滲み出していた。

既に紅茶は冷めきっていたが、ブルースはそれをぐいと飲み切つて再びモニターに向き直る。彼は諦めるつもりなどない。少女を助けるとはいえ殺人という方法を取るあの者は、必ず捕らえなければならぬ。

「そういえば、少女の件ですが」

ティーセットを片付けながら、アルフレッドは溜息と共に吐き出した。

「本日の昼頃に目を覚まし、開口一番にこう言つたそうですよ」

——赤い月が、私を見下ろしていたわ。とつても綺麗なお花畑の中で。

逢着

ゴツサムの街は眠らない。

それは比喩でも何でも無い。むしろ、本来なら眠るべき時間帯こそがゴツサムの街の本当の姿だ。

麻薬の密売、強盗、殺人、放火、マフィア同士の抗争。大小さまざまな犯罪が、色々な悪党によって実行されるのだ。

ブルースは、そんな街の夜に己の身一つで練り出す。毎夜、毎夜、アルフレッドに止められようがお構いなく。仮にもゴツサムの街一番の富豪である彼が、護衛もつけずに。自殺行為ともとれるそれは、決して彼の気が狂っているからではない。

いや、ある意味で狂っているのかもしれない。

彼は今日も街を往く。悪を許さず、それらを悪びれもなく実行する者に執拗なまでに制裁を加える——闇を象徴する、バットマンとして。

コートの者の捜査について一度打ち切り黒衣に身を包んだ主人を見て、アルフレッドは苦々しい表情をしながらも何も言わず見送ってくれた。

リドラーの事件以降に精神的な距離が縮まったとはいえ、ブルースはあの従者への接し方に未だに悩んでいる。そしてアルフレッドも、主人への接し方に同じように悩んでいる。

お互いに面倒くさい性格だな、と内心で思いながら、グラップネルガンを駆使してビルの合間を縫うように飛ぶ。

途中で見つけた悪党共を取り合えず殴り、匿名で警察に通報する。加害者に罵られ、被害者に怯えられるのは常だ。

「ありがとう、黒い人！」

だが最近になって、去り際に感謝の言葉を伝えられることが増えた気がする。

ゴツサムの街を襲った津波の際、ずっと人々の救援活動に勤しんでいたためだろうか。確か1ヶ月前、漸く住民の避難や復興の目途が経った頃の報道で、馬鹿にされていた記憶があるが。自分の姿と名前

を売り込むための、偽善に富んだ間抜けなコスプレイヤーとして。

ブルースは感謝の声に一瞬だけ足を止めたが、直ぐにまた暗闇へと溶け込むように歩みを進めた。バットマンとしてのやり方は全く変えていない。悪人をただ殴り、蹴り、言葉もかけずにぶん投げる。被害者は基本的に放置し、双方に闇への恐怖を刻み付ける。それが、賞賛される筈がない。そう遠くない未来に、きつとまた怯えの目を向けられることだろう。

再びグラップネルガンでビルの屋上へ飛んでいき、下の道路を見下ろす。蝙蝠を模したカウルに仕込んだ生体感知センサは、ビルをすり抜けて生物の体温を感知する。そうして不審な動きを探知し、彼はまた、喧騒に向かって飛び降りるのだ。

一段落ついて見上げた公園の時計の針は、午前3時を10分程過ぎていた。

そろそろ切り上げるか？という思いが脳をよぎった。アルフレッドに連絡してシャワーの準備を…と、カウルの耳の部位に取り付けた通信機に手を添える。

『はい、マスタ・ウエイン』

「戻る」

『ではシャワーの準備を。それから、軽食も用意しておきましょうか』

「ああ、頼む——うん？」

悲鳴が聞こえた。

それ程、遠くはない。

「…あと1件、片付けたら戻る」

『あまり無茶をなさらぬように。せっかくの食材が腐ってしまいます』

「分かっている」

アルフレッドの冗談を軽く流しつつ、ケープを翻して悲鳴の方角を見据える。

そして、被害者が死んでしまわぬ内にと、目標目掛けて走り出した。



暗い路地に入ると、濃厚な血の匂いが漂ってきた。

悲鳴の主は路地の奥にいた。だが逃げた方角は行き止まりで、引き返そうとしてもブルースが来たがために道を塞がれてしまった。

ブルースは大通りから路地に入り、血の匂いを漂わせる被害者たちを見つめる。

距離にして20m程度だろうか。被害者たちは五体満足であったが、この距離で血の匂いが分かる程の重傷を負っていた。

そして顔に施されたペイントから、被害者たちが真つ当で誠実な人間ではないことも明らかだった。

「い、イカれた蝙蝠男…」

1人がそう発すると、周囲も恐れ戦くように身を縮こませた。

当然の反応だ。ブルースが活動を始めてから2年の歳月をかけたことで、ゴツサムの街の悪人はバットマンからの制裁を恐れるようになった。一部例外はいるが、それでも大半はバットマンがいもしない影にすら恐怖を抱くようになった。

「た、助けてくれー!」

この言葉も想定内だ。助けを求める言い訳として、自分たちより悪い人間が襲ってくる、と述べる筈だ。自分たちを正当化させるため、相手の頭がいかに可笑しいかを叫ぶ筈だ。

だから、きつと、油断した。

「あいつが来るんだ、恐ろしいあいつが!」

背後から音もなく近づく者に。

「獣なんかじゃないし、虫だって湧いてない!」

血を滴らせて近づく者に。

「ああ、嫌だ、あいつ、俺達を、汚物を見るような目で、」

何かうすら寒いものを感じ、ブルースは漸く振り向いた。時間をかけてゆっくりと、何処か受け入れがたい事実を直視しようとするかのように。

目に入ったのは、人のシルエットだ。裾がボロボロな、しかし上等

なコートを着込んだ、ごく普通の人の。

だがそのコートは、ブルースがバットマンとして街に繰り出す直前まで見ていた映像とぴったり一致した。脛まである裾は血に塗れ、右手には物騒な、恐らく凶器であろうノコギリのようなものが握られていた。

頭にはトリコーンと呼ばれる三角帽子が乗っかっている。長年使い古されたのか、それともファッションなのか、つばの部分がささくれ立っていた。

鼻の上まで布で覆い隠し、表情まで窺い知れない。

だが僅かに見える赤い瞳は、ギラギラとブルースの後ろを見据えていた。

間違いない。

殺気を隠すことなく距離を詰めようとするコートの者を、左手で制す。

今気付きましたと睨みつける相手の様子に閉口する。本当に今気付いたようだ。邪魔をするなど視線で訴えてくる相手を、臆することなく睨み返す。

「お前は昨夜、少女以外の人間を殺したな？」

相手が犯人だと確信しての発言だった。

知らない、という言い訳は通用しない。この事件は、発生から1日しか経っていないにも関わらず、ゴッサム中に知れ渡っていた。そしてこのワードの並びから、絶えず犯罪が起こるゴッサムの事件でも1件しか掠りはしない。

「獣だ、殺す」

だが相手が発した答えは、あまりにも端的であった。

「つまり、獣であるから殺してもいいと？」

相手が発した声は中性的で、男とも女ともとれた。背格好もしかし。身体的特徴から性別を読み取ろうと全身を見たが、ベストやシャツをこれでもかと着込んでいるため不可能だった。ただそれだけ着込んでも細身のシルエットなので、本来の体軀はもつと細いのだろう。

先入観で性別を決めつけておかなくて良かった、と思い、ブルースは再び相手を睨む。

「獣は殺す」

「彼らはクズだが、人だろう」

「邪魔を？」

「当たり前だ、殺人は——」

「ならば貴公にも虫が湧いているのだな。死ね」

突然左の脇腹に重い衝撃が走り、ブルースは壁に叩きつけられた。特殊な装甲で作ってあるバットスーツの上からでも、相当な衝撃であった。スーツが無ければ胴体が真っ二つになっていたのではないか。

相手を見ると、思っていた結果ではなかったのか驚いていた。きつとあの一撃でブルースを葬り去るつもりだったのだろう。振りかぶったノコギリのようなものを再度強く握りしめ、視線を完全にブルースへと向けた。

風が一陣、強く吹いた。

ブルースは今まで培った技術を駆使し…というより完全に野生の勘を発揮させ、素早く体を伏せた。途端に響く甲高い金属音。どうやら相手の攻撃を上手く避けられたようだ。

まさかこの攻撃まで避けられると思っていなかったのか、相手が一瞬だけ硬直したのが分かった。すぐさま足に蹴りを入れ転がし、マウントを取ろうと体を起こす。だが既に10歩程離れた場所まで後退されており、追撃を負わせることは叶わなかった。

ブルースを見つめる目は、手負いの獣を追い詰める猟師のそれであった。

また風が吹く。相手が高速で移動するがために起こるそれは、ブルースに危機感を察知させることに大いに役に立った。

相手の攻撃を避ける。拳を繰り出す。避けられる。その繰り返しを1分ほど続けたところで、両者はお互いに静止して相手を見定めた。

相手は確かに高速移動をする。だが実際の速度は、ブルースでは簡

単に目で追えるほどであった。

見た事もない独特なステップを、緩急をつけて繰り返すことであたかも瞬間移動をしたかのように見せるのだ。仕掛けさえ分かっしまえばなんてことはない。所詮は初見殺しの代物だ。

だが、目で追える」と、対処できる」というのは、残念ながら全く違うものだ。

実際に戦ってみて理解したが、相手はブルースよりも遥かに高い対人戦術を持っていた。独特なステップは移動も回避も仕掛けるタイミングも完璧で、するりと攻撃の合間を縫ってくる。そして馬鹿げた力で右手の武器を振るってきた。何とか避けられてはいるが、バットスーツの表面は既に何ヶ所か削り取られている。

そもそも相手の動きを読めるのはあらゆる武術に精通しているブルースだからであって、路地裏に住むチンピラでは影すら踏ませることなく殺されるだけだ。

次はどう来る、と観察に徹していると、ふと相手は両腕から力を抜いた。傍から見れば諦めて降伏するのではといった様子だったが、ブルースはこれが次の行動への予備動作であることを容易に見抜いていた。

そのままふらりと前に倒れようとする。あ、と思ったとき、相手は既にブルースの後ろにいた。

「な、」

完全に、目で追えなかった。

本当に瞬間移動したような。

今まで攻撃を予測することに役立てていた風もなかった。声を上げたとき、相手は既に武器を振り上げていた。

嘘だろう、と思う間もなく、右肩に重すぎる衝撃が迸った。

重い鉄骨で直に殴られたような威力だ。ゴキリと嫌な音が路地裏に響く。骨が砕けた訳ではないが、脱臼したようだ。あらゆる衝撃を吸収するよう設計したバットスーツも、繋ぎ目への衝撃は流石に弱い。

苦悶の声を上げ倒れこむ。相手はチャンスとばかりに2撃目を叩

き込むべく右手を振りかぶる。

「やられっぱなしは、性に合わなくてな」

だがそこは百戦錬磨の黒い影。攻撃の瞬間が一番の隙だということ、よく理解していた。

ピンを外して相手の顔目掛けて投げる。途端にそれは眩い光を発し、暗い路地裏を瞬く間に照らした。閃光手榴弾だ。威力は、間近で直視したら視力を半日失う程度。

今度は相手が苦悶の声を上げた。思わず武器を手放し、獣のように呻きながら両手で目を覆っている。

すかさず左拳を相手の頬に叩き込む。漸くまともに入った攻撃は、相手を後方へ吹き飛ばしていった。

更に蹲る腹に蹴りを入れ、壁に叩きつける。相手は未だに目を覆っており、加えて予測不能な攻撃により酷く混乱しているようだった。

相手の狂暴性は理解した。そのため、警察に引き渡す時も抵抗が出ないようと、ユーティリティベルトから頑丈で太いワイヤーを引き出す。一人が藻掻くどころか、戦車同士で綱引きをしても決して切れない代物だ。

右肩の骨を乱暴にはめ込み、拘束すべく近寄る。のた打ち回る相手を気絶させるべく、顎がある辺り目掛けて拳を繰り出し、

ドンツ。

銃声。

ブルースの腹に近距離で発射された銃弾が直撃し、彼は堪らず膝を着いた。スーツのお蔭か銃弾は表面に食い込む程度だったが、その代わり全身に衝撃が走り麻痺を起こす。痺れが、彼の身体を拘束した。

そうか、攻撃の瞬間が一番の隙だったな。

見ると、硝煙を上げる銃口が目に入った。

いつの間にか手にしていた銃は、武器というよりは美術品としての価値の方が高いようなアンティーク調のマスケットだ。銃口にぶれはなく、かなり使い慣れていることが分かる。

赤い瞳を怒りで満たしながら、ブルースを強く見据えた。既に視力は回復しているようだった。

痺れは取れていない。
ゆつくりと近づかれる。
まだ動けない。
右手を大きく引き絞った。
抵抗できない。

ああ、死ぬな、これは。

——突然相手は弾かれたように路地の奥を見て、次いでギリギリと歯を食いしばる音が響いた。
歯が割れるのではないか、と思考の片隅に浮かんだそれを振り払い、漸く動くようになった身体を無理矢理動かして何とか距離を取った。

何故、攻撃を途中で止めた。

同じように路地の奥を見ると、そこには誰一人いなかった。

ああ、と納得する。どうやら戦っている内に逃げられる隙を見出し、脇にある更に細い路地へと逃げたのだろう。

狩りの邪魔をしたブルースより獲物の方が大事だったのか、相手はコートを翻して大通りへと小走りで向かっていった。

「待て、」

そちらは反対方向だろう、と言いかけたのを飲み込んで、ブルースは言葉を重ねた。

「お前は、何だ！」

だが相手は答えない。追いかけるようにも、身体が思う様に動かない。

「獣狩りの夜とは何だ、赤い月とは何だ、お前は何故！」

曲がり角に差し掛かった時、漸く赤い瞳が此方を見た。

「何故、獣を殺す」

ほんの少しだけ目元を歪めて、相手はさも同然かのように告げた。

「私が、狩人だからだ」

そうして、狩人は闇へと融けるように消えていった。

つわものが夢のあと

あれから30分程狩人を探し回ったが、痕跡すら見つけることは出来なかった。

ならばと今度は追われていた彼らを探したが、ブルースが見つけたときには既に死体であった。

両足を縛られ宙づりにされていた。加えて両手首を縛られ、頭は真下の地面に安置されている。

「正気の沙汰ではないな…」

暫く肉は食べられそうにない。

警察に匿名の通報を入れ、漸く帰路に就く。その頃には、既に空が白んでいた。

「おかえりなさいませ、マスタ・ウェイン」

「…なあ、その呼び方はやめてくれ。前のようにブルースと」

「いいえ、ウェイン家の当主に恥じない行いを始めるようになった今、そのような呼び方は出来ません。シャワーの準備は出来ているので、どうぞ」

「はあ、分かった。…ありがとう」

「当然のことです」

アルフレッドが言う。ウェイン家の当主に恥じない行いとは、きつとウェインの名をふんだんに使った慈善活動のことだろう。

今まで引きこもりだったブルース・ウェインが、新市長就任と共に表舞台に顔を出すようになった。それだけでも特大ニュースなのだが、それに加えて、ウェイン家の財産を使って復興の支援をするだけに飽き足らず、今後ゴツサムの未来にウェインの人間として貢献できるように尽力するとまでスピーチを行ったのだ。

父の唯一ともいえる汚点——自身の弱みを握った記者の殺害については、既に誰もが知っている事実だ。そのことを引き合いに出し、揶揄する者も一定数いる。

それでも、ブルースが諦めることはなかった。

いつの日かゴッサムの街に真の意味で夜明けを齎し…バットマンが、不要となる日が来るまで。

あの津波で学んだのだ。

復讐だけでは何も変えられず、何も乗り越えることは出来ない。とはいえ2年かけて夜行性となった生活リズムを簡単に変えられない筈もなく、日中の活動時間は1時間で限界を迎えるのだが。最早闇夜に慣れた目では太陽光にも耐えられず、新聞に載るブルース・ウェインは常にサングラスをかけていた。

濡れた髪を乱雑に拭いながらバットケイブから出て、花瓶に花を挿し込むドリーへと声をかけた。

「ドリー、あー、その花は？」

「はい、スノードロップでございます。季節外れですが、温室で咲いているのを摘んでまいりました」

「そうか、その、」

「ふふ。マスタ・ウェイン、ペニーワースさんが彼方でフルーツを用意している筈ですから、どうぞ召し上がって下さい」

「あ、ああ、ありがとう」

にこにこドリーに見送られ、むず痒い気持ちのままリビングへと向かう。会話が上手く出来ずに四苦八苦している様を、従者たちは面白がって見ているだけだ。或いは、微笑ましく見守っているとも。

「こちら、新鮮なフルーツです」

ブルースの姿を確認するなり、アルフレッドは銀製のトレーを差し出した。

「ああ。…やはり、凝っている」

アルフレッドは手先が器用で、この美しい飾り切りも彼の仕業だろう。ほんの少しだけ顔を綻ばせて、ブルースはフォークでイチゴを刺して口に運ぶ。酸味の利いた、しかし甘いイチゴだ。

「飾り切りも問題なく出来るようになったんだな」

「ええ。ですから申しているでしょう、もう問題ないと。ところで先の件についてですが」

次はどのフルーツ食べようか、と迷っていた視線が一気に鋭さを増

す。先の件、といえば間違いなく狩人についてだ。

その鋭さのままアルフレッドを睨みつける。早く続きを、と圧をかける様子は、バットマンの時と何ら変わらない。

ふう、と勿体ぶるように溜息を吐く。アルフレッドは、ブルースが狩人を探している時間で実施した、出来た限りの捜査の報告を行った。

「まずお相手が持っていたマスケットについてですが、解析したところ：装飾から、19世紀頃のヴィクトリア朝のものと見て間違いはないかと」

「100年以上も前の？」

「その通りです。よく手入れしなければ使い物にならないようなものを、如何して好き好んで使用しているかは分かりませんが」

「トリコーンも、ヴィクトリア朝の少し前くらいに流行っていた帽子だったな」

ブルースは、あの特徴的な三角帽子を思い出す。今でも決して珍しくはないが、式典などの特別な日に軍人や警察が被る程度だ。流行最盛期の18世紀には民間人も被っていたらしいが、今時普段使いをする人間はいないだろう。

何だかやけに古い様式に拘る者、と結論付け、アルフレッドの言葉を待った。

「そしてバットスーツに付着していた弾丸の破片を分析しましたが、成分の大部分はHg、つまり水銀です」

ブルースの顔が益々強張る。

「水銀は確かに強い毒性を持つが、常温常圧だと液体だ。弾丸に出来る筈がないだろう。何か特別な凝固剤を使用したのか？」

「他には血液の成分が検出されました。間違いなく人間のものです。」「更に意味が分からない。他には？」

「いいえ、水銀と血液のみです」

水銀もそうだが、血液も意味が分からない。

アルフレッドの言い方からして、弾丸型の容器に水銀と血液を入れていた、という訳ではないだろう。その容器の破片が全く残っていない

いというのはあり得ないのだから。しかし本当に水銀と血液のみで弾丸など形成できるはずがない。

ブルースが受けた衝撃は確かに鉛の銃弾が被弾した時と同じか、それ以上だ。実は水銀によく似た、これまた未知の物質であった…の方が、まだ納得出来る。…いや出来ない。

——例えばその血が、人間は人間でも宇宙から来た神秘によって改造された人間のもので、水銀と混ざって凝固する性質を持つのなら、きつと話は別なのだが。

馬鹿げたSFだ、とブルースは頭を振った。

「後は残念ながら何も分かりませんでした」

「…何も？」

「ええ、何も。分からない、ということだけが分かりました」

「そうか」

何処か予想出来た答えだったが故に、落胆はそれ程なかった。

現場にいたブルースが痕跡すら見つけられなかったのだから、映像解析と採取した弾丸の成分解析しか出来なかったアルフレッドにはブルース以上の成果が得られないのは当然のことだ。

遣る瀬無さを感じて、フォークをオレンジに突き刺した。果汁が飛び散ったが、気にせず口へと放り込む。

「そして、マスタ・ウエインが帰還される10分前に、お相手に関するとある情報を手に入れました」

「どうやって？」

「どうやら通信時の電波が混線してしまったようで、偶々傍受してしまいました」

「偶然だと？本当にか」

「ええ本当に偶然ですよ。うっかり操作ミスでサーバーに保存までしてしまいました。本当の本当に偶然なのです」

思わず嘘だろうと言いかけて、やめた。目の前の執事の目を見て、真実偶然なのだろうと納得した。しかし通信内容の保存は絶対に故意だ。操作ミス。を年のせいになっているが、ブルースはアルフレッドのこういう茶目っ気が気に入っていたので、そのまま流されることにし

た。

「私からすれば、警察の通信を文字通り傍受する貴方様に言われたくはないのですが」

「何か言ったか」

「いいえ。そして内容ですが、アーカム・アサイラムに狩人が出現したとのことでした」

「アーカム・アサイラムに？」

アーカム・アサイラム、若しくはアーカム精神病院は、名前の割に事実上の刑務所である。正気を失った凶悪な犯罪者が収容されており、一度服役すれば二度と出られない地獄として有名だった。3カ月前にゴッサム中を震撼させた事件を引き起こしたリドラーも、ここにいる。

脱獄に成功したものは今のところいない。

「玄関を大砲のようなものでぶち破り、中に侵入して獣のように吠え立てたようです。『獣を匿うな、出せ』と」

「あそこの警備は嚴重だろうに。よくもまあ侵入できたものだ」

「警備にあたっていた者は何名か切り刻まれてしまったようです。どうやら犯罪者を‘獣’と見立てて、殺しまわっているようですね」

「何というか、狩人の‘獣’に対する執着と憎悪は狂気の域に達しているな」

まるで、恐怖と復讐に囚われたかつての自分のようだ。

急に押し黙ったブルースを敢えて無視し、アルフレッドは続けた。

「ですが、いくら人外の如き動きをしてみせても、多勢に無勢。数分の奮闘の末、呆気なく射殺されたようです」

「……、」

「流石に最新重火器の集中砲火は堪えたみたいですね。死者は警備員が6名、重軽傷者は20名程。狩人が狙っていた犯罪者は誰一人死なず、また騒ぎに乗じて脱獄する者もいませんでした」

呆気ないな。

ブルースの感想はそれに尽きた。

死んでしまえば、狩人が犯した罪を認めさせるのも、罰を受けて罪

を清算させることも不可能だろうに。

だがアーカム・アサイラムから脱獄者が出ることはなくて本当に良かったと思う。収容者は例外なく狂っており、殺人を全く厭わない。もし彼らが再びゴツサムに現れたら、間違いなくもつと多くの人間が死ぬだろう。

「…そうか。ならばもう狩人を追う必要がないのか」

「ああ、いえ、そうではなく」

何故かアルフレッドが言い淀む。いつも物怖じせずはつきりとした口調の彼が珍しい、とまじまじと見てしまった。

やがて意を決したのか、コホンと一つ咳払いをして口を開いた。

「狩人の死体が消えたそうです。まるで夢であったかのように、跡形もなく」

白いリボンの少女

狩人という存在は、本当に宇宙の神秘が齎した奇跡の存在なのかもしれない。

ブルースは、丁度昨夜に狩人が目撃された場所へと到着した。だがいくら現場を捜査しようとも髪の毛一本、足跡一つすら見当たらない。

徹底した科学的痕跡の隠滅に、寧ろ感心してしまう。此方が学びたいくらいの、卓越した技術だった。

アーカム・アサイラムで狩人が射殺されて、今日で7日目だ。

普通に考えれば——狩人は複数人おり、昨夜目撃された人物と射殺された人物は別人と考える方が自然だ。なんせあれだけ着込んで体型や性別を隠蔽しているのだ。背丈さえ合わせれば何の問題もなく入れ替えることが出来る。

だがブルースは、どちらの狩人も同じ人物だと半ば確信していた。根拠も何もないただの勘であるが、きつとそうなのだろう。

獣、赤い月、血液。

狩人に関するワードは、今のところこれだけだ。

「もうこんな時間か」

そろそろ朝も近い。ブルースは今日の夜警を切り上げることにした。

バットモービルまでは少し遠い。それに疲労も溜まっている。グリップネルガンを使えば移動は速いが、使う気も起きない———ので、地上を歩いていくことにした。ここは郊外に程近いわりに、チンピラの巢も珍しくない区域だ。途中で襲われる心配はない。

風がケープを揺らす。

この付近は津波の災害の痕跡が未だに強く残るせいか、人の気配が一切しない。

この光景を噛み締めるべく、歩調は自然とゆっくりとしたものになる。自分があと少し早く、復讐だけでは何も成せないと気付いていた

のなら。

瓦礫、瓦礫、瓦礫の山。

きつとあの下には、逃げきれなかった人々が今も埋まっているのだろう。未だ復興の手が回らない現実には、唇を強く噛む。

空が白む先へ進む。バットモービルまで、あと数分歩けば着くだろう。

ガラガラガラ、ガシヤン。ガラツ。

何処からか、瓦礫の崩れる音がした。

何かの拍子で崩れたかと思ったが、その音は断続的に、しかし規則的に響いていた。

誰かいるのだろうか。

音の発生源へと歩を進める。入り組んだ細い道を抜け、漸く辿り着いた。

最初に目に入ったのは、くすんだ白いリボンを結わえた後頭部だった。

ヒュ、と無意識に息を呑んだ。

思い起こされるのは7日前、狩人の暴漢虐殺を目の前で目撃した少女だ。彼女も、同じ様に白いリボンを。

後頭部が、ブルースの立てた足音を聞いてぐるりと回る。

泣き疲れて何もかもに絶望した少女の顔だった。

ガラガラツ、ガラララララツ。

少女の前には一際大きな瓦礫の山があり、その頂上に人が立っていた。

その者は大きな瓦礫をヒョイと持ち上げて遠くに投げ、小さな瓦礫はもつと遠くに投げている。一定のリズムで、機械のようにブレなく作業をしていた。

細身で肌が青白く、栄養失調気味の病人と間違えられてもおかしくない相貌だ。着ている服も裾がボロボロで、いやに長いサスペンダーが邪魔そうだった。丈の短いマントはフードが付いているようだが、

視界確保の為か下ろしている。

燃え残った灰のように艶のない白髪はボサボサで、作業の合間に泥を整髪料として後ろに撫でつけていた。

——それでも、燃えるような憎悪を湛えた瞳は忘れることはない。

「狩人、」

病人、もとい狩人は、ブルースの囁く様な声すら聞き取ったらしく、ピタリと動きを止めてブルースを見た。

だが一瞥しただけで直ぐに作業を再開する。どうやら狩人の中でブルースの優先順位は相当低いらしい。或いは、この作業が最優先事項か。

「パパ」

と、今まで黙っていた少女が狩人を指差しながら、虚ろな目でそう言った。

この少女は狩人の娘なのか？眉を潜めて少女を見る。

「と、ママ」

いや、違う。少女が指差していたのは瓦礫の山で、それをパパとママと呼んだのだ。

——そして瓦礫の山を崩している狩人の様子から、何が起こっているのかを漸く正確に察することが出来た。

「おい、」

「……」

「私も、手伝おう」

「…好きにし給え」

本来なら、一刻も早くゴツサム・シティ警察に通報して狩人を突き出し、少女を保護してもらうのが正しいのだろう。だがブルースはそうすることはせず、ただ黙々と作業に徹することにした。きつと正解を取ると、少女と両親は2度と会うことはないだろうから。

疲れた体に鞭を打ち、山の上から順に崩していく。瓦礫程度だったらバットモービルを特攻させれば直ぐ片付くが、少女の両親が原形を留めることはないだろう。同じ理由で、脇から崩していくこともでき

ない。

突然大きく崩れて自分や少女が生き埋めにならぬ様、バランスを見ながら慎重に瓦礫を放り投げていく。

ブルースも狩人も口数が少ないため、会話らしい会話もせずに瓦礫を投げ続ける。

暫くは瓦礫の崩れる音だけが響いていたが、沈黙に耐えられなくなったのか、少女はぼつりぼつりと話し出した。

——黒い蝙蝠の人、テレビに出てたよね。

すごいなあ、本物だ。パパがね、アナタの事悪く言ってる人にね、「偽善と罵られようとも人を助けるのがヒーローだ！彼はあの場において、誰よりもヒーローだった！」ってね、怒鳴ったの。怖かったけど、パパ、アナタのファンになったみたい。きつと喜んでるよね。憧れの人に助けてもらってるんだもん。ママもね、絶対、ありがとうって言ってるよ。

ちらりと少女を見た。急に向けられた視線に肩を跳ねさせ、怯えた表情を形作った。だが直ぐに引き攣った笑顔を見せる。

そのあまりの痛々しさに、ブルースは今にも泣き出してしまいそうになった。胸を食い破られるような痛みが息を詰まらせ、自分の無力さを思い知らされる。

それから、少女は色々話してくれた。

3ヶ月前の津波で、住む場所を失ったこと。

急遽建てられた仮住居に今まで住んでいたが、4日程前に音信不通だった親戚と漸く連絡がとれ、その家に間借りすることになったこと。

インフラの整備が追いついておらず、バスやタクシーでは辿り着けないため、少し遠回りだが悪漢に襲われる心配のないこの区域を通ることに決めたこと。

——そして2日と半日前、父と母が瓦礫の崩落に巻き込まれ、少女だけ助かったこと。

それきり、少女は黙った。虚ろだった目に、全てへの諦念を宿して。
「狩人。お前はいつから？」

「――丁度、昨日だ」

「丸一日ずっと作業を？少し休め、効率が落ちるぞ。何か食べるものを」

「必要ない」

ブルースの提案を突っぱねて、狩人は身の丈程の瓦礫を軽々と持ち上げた。

絶対に500kgを超えているのに何故持ち上げられるのか小一時間程問い詰めてやりたいが、どうせ答えてくれないだろうと口を閉ざすことにした。

空が白み始める。

その光景を見ると、狩人が見せた狂気を思い出して気分が悪くなる。

頭を切り落とされた逆さ吊りの死体。

衣装と装備を古い様式のもので揃えていたぐらいだから、あれも当時の儀式の再現なのだろうか。一応調べたが、似たようなものは見当たらなかった。

ああ、くそ、

悪態を吐きそうになる。何もかも嫌になってくる。この状況にも、目の前の狩人にも、今も何処かで誰かを脅かす犯罪者共にも。

何も出来ない自分にも。

朝日が昇る。

今日のゴツサムはどうやらご機嫌らしく、珍しく快晴であった。水平線の向こうから、眩しい光が良く見える。

思わず目を細めて朝日を見た。息を細く吐き、頬に付いた泥を拭おうと手を上げる。その拍子に、生体感知センサーが起動してしまった。ピピッ、という起動音が気に障ったのか、狩人が強く睨んでくる。きつと頭の中では、同じ様な起動音を発した閃光手榴弾が浮かんでいくことだろう。

作業を再開しよう。

ているのだろうかと思ったが、違う。狩人はずっと、自分に言い聞かせるようにしているのだ。絶対助ける、と。

「よし、丁寧だ。無茶をさせるなよ、相手は、——、あ、」
砂埃が舞う。

ブルースは父親を、狩人は母親を抱え、瓦礫の山を飛び越えて少女の前に辿り着く。

これでは、もう。

あまりの現実に目を逸らしたくなかった。

確かに少女の両親は生きている。だがそれも、きつと数分しかもたない。

身体のうちこちは瓦礫で潰され、骨まで飛び出ている個所もある。これだと内臓までミンチだろう。

息もろくに出来ていないのだろうか、ヒューヒューと、呼吸音にも満たないか細い音が聞こえる。当然、両名とも五体満足ではない。

ゆっくりと地面に横たえさせる。彼らの血は既に色褪せていた。

「ありがとう、」

少女は、とうに枯れていると思われた涙を静かに流す。

「生きてるうちに、パパとママに会えた」

ブルースは何が何でも自分を呪いたくなかった。

少女は両親の手をぎゅつと握る。彼らはそれに応えられず、ただ鼓動の止まる時を待っていた。

朝日はあと少しで昇り切る。

柔らかな光がこの家族を包み込み、そして奪っていくのだろうか。

待ち望んでいた筈の夜明けを、今は憎々しく思った。どうか今は、時間が止まってくれたならば。

「ああ、ああー」

ブルースの隣で、狩人が少女以上に涙を流しながら蹲っていた。

両手を祈るように組んでおり、家族に向かって嗚咽を漏らし続けていた。

「良かった、生きていた、良かった。ありがとう、生きていてくれてありがとう、」

「お前、」

この状態を、果たして、'生きている' と軽々しく形容する冒読者がいるだろうか。

ブルースの頭は一瞬で怒りに染まった。衝動のまま目の前の顔をぶん殴ってやりたかった。だが少女を見て、家族の最期の安らぎの間を邪魔しないよう思い留まる。その代わり、狩人を連れて早く此処から立ち去ることに決めた。

しかし狩人はブルースなど気にも留めずに両手を解くと、懐から鐘を取り出した。ゴシック調の小さな呼び鈴のようだ。

「生きているのなら、助けられる」

瓦礫の中から見つけ出したのか、鋭利なガラス片を左手に持つ。右手の甲に滑らせると、当然ながら皮膚が裂かれて血が溢れる。

狩人は啼泣の声を止ませることはなかった。それでもブルースが今まで見てきた狩人の表情の中で、一番安らかな、希望を湛えた笑顔だった。

「もう痛むこともない。大丈夫だ」

リイイ…… イ…… イン

澄んだ音が響く。

血塗れになった鐘からは、心が安らぐような優しく澄んだ音が発せられた。

鼓膜を通り過ぎ、脳に到達する。ふわりと包み込むような温かさを感じ、妙な安心感が胸の内を支配した。

唐突な心地良さに目を瞑り、身を委ね——ようとして、流石に不味いとハツと目を覚ます。

何が起こったか理解出来なかったが、ひとまず正体不明の心地良さを頭の隅に追いやって、

——そうして、目を見張った。

「ほ、」

…嘘だろう。これは現実なのか。

両親が、少女の両手を握り返していた。

握り返しただけではない。潰れた身体も、突き出た骨も、ミンチになった内臓も、失われた四肢も、全てが夢であつたかのように綺麗さっぱりなくなっている。

「生きてる」

母親が声を発した。掠れていたが、先程まで死にかけていたとは思えないようなはつきりとした口調だった。

そのまま茫然とした表情でゆっくりと起き上がり、身体を捻って少女をその目で捉え——思いつきり、抱きしめた。

「ああ、アリア、アリア!!」

「ママー・ママが、生きてるよお!!」

2人はそのまま、大きな泣き声を上げた。

未だ現実を受け入れられないのか、父親の方は寝そべったままだ。

徐に左手を上げ、開閉を繰り返す。何度かやっている内に、指の間からブルースの姿を捉えたようだ。

手をどけて、ブルースをじつと見る。その視線に耐えられなくて、ずっと泣いている少女と母親を見るよう目線で促した。

父親は漸く起き上がる。数回頭を振って己の状態に全く問題ないことを確認し——少女と母親を纏めて抱きしめ、同じ様に大声で泣いた。

その光景を、ブルースは少し離れて見守るだけ。

狩人が齎した奇跡を噛み締める様に。

遠くから近づいてくるサイレンを、今ほど待ち遠しく感じたことはない。

いつの間にか姿をくられました狩人のことは考えないようにした。数時間後の自分が何とかするだろう。多分、きっと。

朝日は既に昇り切り、暖かな温もりを与えていた。

‘狩人’ という存在

あの後、到着した警察に家族の引き渡しを行い、ブルースはすぐさまその場を離れた。

担当した警察は3ヶ月前から妙に交友を持つようになったマルティネス巡査だった。ブルースを視界に入れた途端「うげっ」と嫌そうな顔をしたが、多少の世間話をするくらいは仲が良いつもりだ。

「蝙蝠の人、じゃあねー!!!」

ブルースがそそくさと去ろうとしているのを見た少女は、真つ黒な後ろ姿にそう叫んだ。死んだ表情が嘘のように、花が咲いたような笑顔だった。

家族3人が奇跡の感動を分かち合いながら抱きしめ合う様は、ブルースが一番望みながら決して得られない光景だった。ちらりと後ろを見るだけにし、その幸福が壊されないように願うと、軽く頭を下げた。

後ろから事情聴取のため署まで立ち会えと叫び声が聞こえたが、そこらは全く無視して、急いで自身の愛車へと向かった。

朝日が本当に眩しい。

カウルにサングラスを仕込むか、と一瞬考えたが、そもそも活動時間の大部分は夜であるため無意味だと切り捨てた。

疲労が完全になくなってしまったのかいつになく軽い身体を運転席に滑り込ませて、エンジンをかける。唸る機体に少しだけ笑みを浮かべて、ブルースはアクセルを思いっきり踏んだ。



「お帰りなさいませ、マスタ・ウエイン」

「ああ、戻った。直ぐに記録を」

「承知しております」

バット кейブ に到着後カウルを脱ぎ捨て、目に仕込んだコンタクトレンズ型のカメラを取り出した。専用の読み取り装置にそれを乗せ、

先程までの光景をアルフレッドと共に観察した。

「…これは、信じられませんか」

「父親と母親の怪我に加え、栄養失調かつ餓死寸前の少女も全快した」
「貴方様が妙に元気なもの？」

「…そうかもしれない。あの鐘の音を聞いたら疲労が全部吹き飛んだようだ」

これが目の前で起こったことだ。とアルフレッドに語れば、彼は茫然とモニターを見て固まってしまった。フィクションのような現実
に驚きのあまり思考を止めたようだ。ブルースは、彼が驚きすぎて心臓発作を引き起こさないか内心ハラハラしていた。

—— 実際は、少年のブルースに悪人を絶対許さないと決意させた
あの日の事件に、シチュエーションがあまりにもそっくりだったため、アルフレッドは気が気でなかったのだ。

あの時、狩人がいたら、同じ様に助けてもらえたのか。と自暴自棄
になりかねない。

だがモニターを見つめるブルースの目は心底穏やかで、アルフレッドの心配は実際杞憂だった。

ブルースは、着実にあの日から成長している。安心したように目を
細め、アルフレッドは目の前の問題に集中することにした。

「鐘に血を付着させることで奇跡が起こせるのでしょうか」

「鐘が特別なのか、奴の血が特別なのかは分からない。血の方は採つてきたから解析にかけてくれ」

「はあ、いつの間に」

「溢れた血の量が多かったのか地面に液溜まりが出来ていた」

「本当によく周りを観察していますね。感心致しました」

狩人の血液が入ったガラス瓶をアルフレッドに預けて彼を下がらせる。

「では、私はこれで。マスター・ウエインも、早くお休みになられてください。なんせ今夜はパーティーへの出席があるのですから」

思いつきり顔を歪めたブルースを見て、アルフレッドは子供らしい
仕草だと微笑みながらエレベーターに乗り込んだ。

その後ろ姿を憎々し気に睨みながらブルースは大きな大きな溜息を吐いた。僅かばかりの反抗だ。そうしたところで、パーティーが中止する訳がないが。

「いや、今は狩人の事だ」

再びモニターに注視する。

小さな薄い箱の中に映し出された狩人は、必死の表情で瓦礫を持ち上げているところだった。

『ちゃんと、ちゃんと今度は助けられるんだな』

「…今度は、か」

狩人の内にも、大切な誰かを失った過去があるのだろうか。

それは狩人の行動理念の元になるような、大きな出来事だった筈だ。ブルースにとつての両親の死のように、狩人にとつての大きな損失が。

どこことなく似ている気がした。

そしてブルースとは違い、他に選択肢がなかったのだろう。

涙を流しながら狩人は微笑む。

この瞬間に、狩人の積み重ねてきた後悔が報われたのなら。

途端に恥ずかしくなつて頭を押さえた。らしくない。ブルース・ウエイン、らしくないぞ。自分に言い聞かせる。

思考を切り替える。理由は何であれ、'殺人'という方法を取る狩人を放っておける訳がない。

映像から顔がはつきり映っている瞬間を切り取り、コピー用紙に出す。またAIを駆使し、サーバーに溜め込んだゴツサム中の人間の顔と一致するものがないか検索する。

「…最高で71%一致する者を発見。いや、だが別人だな」

残念ながら、サーバーに狩人の顔は保存されていなかったようだ。もしされていたのなら、住居や職業、友好関係もある程度把握出来たのだが、仕方がない。新しく、狩人、として登録する。そこで漸く、名前も性別も知らないことに気が付いた。

プリントアウトした顔写真に、現在分かっている情報を書き込んでいく。

白い髪、赤い瞳、病的な肌、細い手足、妙に怪力。

謎の血液を用いた未知の青い薬品、少量の血が混ざった水銀の弾丸、血液を付着させ使用する鐘。

独特なステツプ、古めかしいマスケツト、ノコギリのようなもの。

ヴィクトリア朝を思わせる装飾品、獣への憎悪、…赤い、月。

血液、赤、獣、月、白い花、血、血、

獣狩りの夜。狩人。

脳内に、何か引つかかるようなものがあつた。

それが何であるか、どのようなものかを引つ張り出そうと——して、止めた。理由は分からないが、まだ、理解してはいけない気がしたから。

ふと目に入った、モニターの脇に置いていたノートPCには、昨今の話題である‘メタヒューマン’についてのWeb記事が映し出されている。

実際に記録に残っている訳でもなく、また寄せられる証言も殆どが嘘のものだ。だが火のない所に煙は立たぬ。人智を超えた能力を持ち、それを行使する存在——それが、‘メタヒューマン’。

宇宙人だとか、海底人だとか、半神だとか、サイボーグだとか、光より早く走るだとか、根も葉もない噂話ばかりだが——実在することを、ブルースはバットマンになる前から知っている。ヴィジランテとなるための情報収集の際、彼らの力も利用できないか散々調べつくしたからだ。結局、コンタクトを取る機会もないまま今日までできてしまったが。

狩人も、この‘メタヒューマン’に分類される存在だろう。あれが真つ当な人間である筈がない。

狩人がどんな能力を持っているか把握する必要がある。奇跡的にアーカム・アサイラムに収容できたとして、能力を使って脱出されてしまえば全く意味がない。少なくとも、死体を偽装して煙の様に消してしまうことが可能であるのだから。

「人間相手はまあ平気だが…メタヒューマン相手だと、それなりに準備を整えなければまず勝てない」

更に狩人は対人戦術においてブルースより遙かに高みにいる。その時点で狩人の拘束は難易度を上げるが、回復力も異常だということも考慮しなければならぬ。なんせ瀕死の状態から全快させる鐘に加え、半日は目を潰せる閃光手榴弾も数分で無効化したくらいだ。最新技術の技術をふんだんに使用したガジェットも、狩人の前では殆ど無意味だろう。

考えれば考える程、狩人をアーカム・アサイラムに放り込むシーンがイメージ出来ない。

数秒でも動きを拘束できれば、勝ち筋はいくつかある：かもしれない。

踏むと電気ショックを引き起こす地雷型のガジェットはどうだろうか。それともトリモチのような粘着性のある物質を使用した罠だとか。しかし用意に時間がかかるため、手を付けるなら今の内から。釈然としないままモニターの電源を切る。脇に置かれていた小型のサンドウイッチをもそもそと食べながら、上へと向かうためにエレベーターを起動した。

歯車の軋む音が耳に入り込む。ブルースはこの音があまり好きではない。

1人乗りの籠がゆっくり下りてくるのをぼーっと見つめ、パンの力がついた口の端を袖で雑に拭った。

ぼんやりとした思考のまま考える。

狩人は恐ろしい相手だ。人を簡単に殺めてしまう程の残忍さを持ち合わせている。

だがあの時見せた安らかな笑顔もまた狩人の本性だ。あの瞬間だけは、人の幸福を心から祝福出来る人間だった。

ブルースが狩人に対して消極的になってしまっているのは、あの笑顔を見てしまったからだ。

他者の幸福を喜べる心優しい人間だった筈だ。しかし、何かが狩人の綺麗な心を歪めて踏み躪ったのだろう。それは在り方を大きく変えてしまう程の、劣悪で残忍な何かだ。

それこそ、正常に動く細工物に無理矢理粗悪品の歯車をねじ込んだ

ような。

結局、全部ブルースの妄想でしかないけれども。

歯車の軋む音が好きではない。

両親が殺されたあの瞬間、散々聞いた音だったから。

到着した籠に乗り込み上昇させる。彼の頭の中では、既に狩人への対策でいっぱいだった。口に手を当て、視線を伏せて試行錯誤を繰り返す。会話での心理戦は有効か、相手の動きに対抗するガジェットの開発をするか、現在の装備でどこまでやれるのか。

こうして考えることは嫌いではない。作戦を練って練って練って成し遂げた後の達成感も言わずもがな。

——それでも、いやそれ以上に、誰かを殴ることが嫌いで、しかし中毒者のように止めることが出来なかった。一種の自傷行為だと言われたそれが、心のどこかで恐ろしくなってしまった。

死ぬのは怖くない。

が、大切な人が死ぬのはとても怖い。

たまに思う。今の自分は、本当に人間なのだろうか。徒らに人を傷付ける野獣と変わらないのではないかと。

『獣だ、殺す』

そうか、獣か。

瞳に宿った憤怒と憎悪を理解できた。

狩人は、自身が進むかもしれない数ある可能性の内の一つ、その成れの果てだろう。

狩人の感情に、漸く触れることが出来た。そんな気がした。

ガシヤン、とエレベーターが停止する。

僅かに眠気がこみ上げてきたので時計を見れば、午前9時を僅かに過ぎていた。夜行性の自分にとって正しく就寝時間である。ドリーが整えたであろう自身のベッドに潜り込むため、寝室へと向かおうとする。

決して、目の前の光景に対して現実逃避している訳では無い。決して。

「アルフレッド。人間は寝ないと死ぬ」

「常識ですからね、勿論承知しております。ですから就寝なさる前に着ていくスーツを決めていたいただきたいのです。ええスーツだけで良いです。合わせる小物は私と彼女で決めますから」

ニッコニコ。そうニッコニコだ。

アルフレッドとドリーは嬉しそうにスーツのかかったハンガーラックを押している。キャスターが回る軽い音に、逃げ場はないと悟った。

「行かなければならないのは分かっている。だが着飾る必要があるのか」

「何を馬鹿なことをおっしゃいますか。碌なコーデイナーもせずに行つてごらん下さい。ウェインの名に泥を塗るばかりか、下に見られて余計な汚名を被ることになります」

「いや大丈夫だ分かっている。分かっているが、何もこんなに用意しなくても」

「出来れば動きやすい方が良いでしょう？色々試着なさつて、一番身体にフィットするものを選んでください。後はペニーワースさんと私で、頑張りますから」

試着。試着と言ったか。

50着近くもあるスーツを全部か。正気か。

流石にドレスコードを無視する訳ではない。昔からそう教育されているし、そもそもとして当然の常識である。上級層のパーティーにラフなスーツだけで済ませるなど、要人の葬式にジャージ姿で出席するくらい常識がない。靴やネクタイ、それにシャツやチーフなど、合わせる小物にまで気を使わなければならない。

だが多い。スーツがとにかく多い。試着の途中で寝てしまわないか、俺が。ブルースは諦める様に溜息を吐き、両手を上げて降参の構えを取った。

アルフレッドとドリーは益々笑みを深めて、各々がブルースに似合

うと思ったスーツを手に取り始めるのだった。

赤い月

ブルースは今夜、とある富豪が主催するチャリティーパーティに主賓として参加する。というのも、表舞台に立つようになったウエイン家当主と交友を持ったためというありきたりな理由の影に、何やらきな臭い闇を感じ取ったからだ。

とはいえ殆ど勘であり、杞憂の可能性も十分にあった。結局何もなくとも、その富豪と繋がりを作っておくことで今後の為になることは重々承知している。

結局、スーツ選びには2時間かかった。ブルース自身がスーツに慣れていないのもあるが、アルフレッドとドリーが白熱したことに原因がある。あの熱気は凄まじく、特にドリーはあれもこれもと小物を取り出し、生き生きとブルースに付けたり外したりを繰り返していた。

彼らが本当に楽しそうだったから、結局ブルースは嫌がることなく最後まで大人しくしていた。

狩人の鐘の奇跡で疲労が完全になかった状態でも、既に疲労困憊だ。ならばその奇跡の恩恵を受けていなかったら、今頃どうなっていただろうか。

特注のポマードと香水で酔うことはなかった。アルフレッドが取り寄せたようで、爽やかな香りは全く不快にならなかった。

ネクタイや革靴はドリーが選んだものだ。スーツ同様、動きを全く阻害しない。有事の際も素早く動ける機能性に優れていて、かつ粗末さを感じさせない、優美なシルエットに仕上がった。

きつと彼らはずっと前から準備していたのだろう。ブルースがいつか前に進み、道に迷う誰かを導く者になったとき——バットマンではなく、ブルース・ウエインとして人々の希望に成り得るよう。ふさわしい格好をずっとずっと考えて、ブルースが身に付けるのを心待ちにしていたのだろう。

胸の内がぽかぽかと温かくなり、目の前がやけに色鮮やかになった。

パーティーは億劫だが、2人の期待に応えられるよう頑張ろう。

警備員に誘導されながら駐車する。素早く下りると、警備員はブルースの顔を見てあっと驚いた表情を見せる。ゴツサムのプリンスと名高きブルースが現れたのだからその驚愕は当然のものだが、彼はその反応が好きではない。滅多に姿を見せない珍獣みたいな扱いをされているようで、それなりに癪に障る。

駐車場は会場から少し離れているため、歩く必要がある。スツと背筋を伸ばして歩き出し、先程とは別の警備員に話しかけた。

「会場は向こうで合っているな？その、少し騒がしいが、時間までまだ余裕があつたはずだろう」

「あ、え、はい、あ、いいえ、パーティーはまだ始まってないです。少し前にちよつとした騒ぎがあつて、多分野次馬とか、そんな感じですよ」「ちよつとした騒ぎ？」

「はいそうです。何か、こう、いかにも浮浪者って感じの人間が、不法侵入しようとしてまして。仲間が取り押さえたんですよ」

先程から気になっていた騒ぎについて尋ねてみたら、どうやら野次の声だったようだ。すわ遅刻か、と少々焦つたが、違つたようで安堵した。

警備員はしどろもどろになりながらも、何とか正確に伝えようと身振り手振りを交えて続きを話した。

「警察には通報したんですよ。本当はその辺まで引き摺って放り投げるか、直接警察に連れていくかしたかつたんですよ」

「引き摺るのは止めた方が良くと思うぞ」

「ああ、すみません。ええと、そうしようとする途端に暴れ出して、これが妙に力強くて。押さえつけておけば大人しくしてるんで、仕方なくそのまま、って感じですよ。だから人が寄ってくるんです」

「…、」

そうか、と殆ど空気となつた言葉を吐き出し、軽く会釈をしてその場を立ち去つた。警備員は暫く呆けていたが、あと少しすれば我に返り「あのブルース・ウエインと喋つた！」と同僚と無線で自慢する事だろう。いや実際に聞こえてしまった。

だから自身は珍獣ではない。その扱いは止めてくれ。

会場の入り口、その少し外れた場所に、確かに人だかりが出来ていた。件の人物は良くここまで侵入できたものだ、と少しだけ感心した。もしくは簡単に侵入を許せてしまう程に警備が笨なのか。

カツンと靴音を響かせると、何名かがブルースへと振り向いた。どれも新聞やテレビで見た事があるような顔ぶれだ。皆一様に驚愕に目を見開き、隣の者の肩を叩いたりして振り向かせつつ、彼の元へ駆け寄った。

「ウェインさん！会えて光栄です！」

「ああウェインさん、本当に来るなんて！」

「ウェインさん、この間はどうもありがとうございます！」

「お久しぶりですウェインさん！」

自分は今、上手く笑えているだろうか。

作り笑いに頬が引き攣りそうになったが何とか耐える。ここまで大勢に囲まれてしまえば匂いで酔いそうだ。人々の好奇の視線が突き刺さった。

我慢だ。慣れる。

これがあと数時間続くことに精神が病みそうになる。

ブルース・ウェインとして活動していくのなら必要なことだ。理解している。

もう帰ってしまいたい。

何かを失う訳じゃない。耐えろ。

脳内で自身との問答を繰り返し、精神状態を切り替える。

よし、と仮面を被り直したブルースは、先程より自然な笑顔を形作ることが出来た。

取り敢えず、室内で話さないかと周りに提案する。肌寒いと感じる気温だ、風邪を引くかもしれない。ブルースが。

周囲が一齐に瞬き、それもそうだとぞろぞろと入り口を目指して歩き出した。

ほっと一息吐く。手ごたえを感じて少しだけ自信がついた。

人が離れて、漸く遠くからサイレンが聞こえることに気が付いた。

本日2回目のそれは、浮浪者を逮捕もしくは嚴重注意するためにやってくる警察のものだろう。

そういえば、浮浪者は取り押さえられたままだったな。

疎らになった人の隙間から、ヒョイと顔を覗かせた。警備員数名が何かに乗っかっているのが見えた。随分大げさだな、と視線を下に向けた。

「はあ？」

呆れた声が漏れた。咄嗟に口を押さえたが手遅れで、幾人かの視線が訝し気に向けられた。

その、赤い瞳だけは、真っ直ぐだったが。

取り押さえられているのは正真正銘、狩人そのものだった。今朝と変わらぬ格好で、幼い視線を向けていた。

待て待て待て。ブルースの脳内が途端にお祭り騒ぎを始めた。より正確に言うならとても混乱していた。何故奴が、こんなところで。

その混乱がつい表情に出てしまう。押さええた手の内でポカンと口を開け、更に目を見開いて狩人を見つめた。

たっぷり数秒間視線を交わす。流石に周囲も様子がおかしいことに気が付いたのか、ブルースの体調を気遣う言葉をかけてくる。

そこで漸く我に返り、周囲が余計な詮索に走らないよう、心配ないと薄く笑みを作った。

「貴公、」

石畳に押さえ付けられたままの狩人が声を発した。騒ぎの中であつても良く通る声だった。

赤い瞳からは邪な感情の一欠けらも感じない。無垢な赤子のような澄んだ瞳だった。共に瓦礫を放り投げていた時は、死んだ魚のように濁っていた筈なのに。

声を発したからか、上に乗っていた警備員の1人が驚いたように身動きした。その動作が恐らく狩人の肺を圧迫したのだろう、「っぐう、」と苦しそうな呻き声を漏らした。

ブルースは、今度は別の驚愕に目を見開いた。狩人が本当に大人しいからだ。

一夜の逢着で身に刻まれた狩人の暴力性を考えれば、この程度の拘束など容易く振り解けるだろう。だが今日の前にいる者は、見た目通りただのひ弱な病人だ。ぼんやりとブルースを見つめるばかりで、確かな抵抗もせずに大人しくしていた。

或いは、絶好のチャンスだろうか。

このままゴードン警部補にバットマンとして通報すれば、これからパトカーに乗せられるであろう狩人は、本来の手続き上ならば1日も経たず解放されるところを、一生アーカム・アサイラムで過ごすことになるだろう。

狩人がそれまで大人しくしているかは懸念事項であるが。

「ああ、Mr. ウェイン!!」

今夜のパーティー会場である、神殿のような巨大なドーリア式の建築物。その出入り口から、小太りの中年男性がブルースに駆け寄った。

額から滝の様に流れる汗をハンカチで拭っていた。ニコニコ、というよりはニタニタとした笑みを浮かべながら、黄ばんだ歯を見せて話し出した。

「この度はご多忙にも係わらずご出席いただき、誠にありがとうございます
います」

「…いいえ、私の方こそ、お招きいただきありがとうございます」

「精一杯おもてなしをさせていただきますとも、ええ。さき、此方へ」

この人物が、このパーティーの主権者である富豪だった。

さっと観察した限り、足元が気にならない程度にふらついているだけで、他には何も怪しい点はなかった。ほんの少しのアルコールの匂いから、既に酔っているのかもしれないと当たりを付けた。

——確かに怪しい点はないが、あのニタニタとした笑みは気になった。

普段ならとつとと殴って笑みの裏になにか隠してないか恐喝するところだが、その笑みが上級層特有の腹の探り合いからくるものなのかもしれないから、ブルースは判断に困っていた。

いくら内心で自分を見下していても構わない。他者の人生を滅茶苦茶にするような犯罪に手を染めてなければ、彼の出る幕はないのだ

から。

つまるところブルースは、自分が知らないだけで、この笑みが上級層の常識であるのかもしれないと思っっているのだ。

人付き合いを始めて日が浅い彼は社交の場に未だに慣れていない。ヘタに賢い人物よりいつそ無能を演じるべきか本気で悩んでいると、男が不審な目を向けてきた。彼がその場を一向に動こうとしないからである。

「Mr. ウェイン？あの、もしや体調が優れないの？」

直ぐに体調の心配をされるのは、病弱なせいで今まで碌に表舞台に出てこれなかったからだ、と噂が流れていたためだろう。

本当は夜な夜な犯罪者を相手に戦っている、とは誰も想像出来ない。出来る筈もない。

「大丈夫ですよ。本当に」

これ以上外にいると本気で風邪を引きかねない。ブルースは漸く足を動かし、男の少し後ろに付いた。

サイレンの音が随分近くなった。後数分もすれば、狩人は連れていかれる筈だ。ちらりと横目で狩人を見る。相変わらず、ぼんやりとブルースを見ていた。

ブルースを、見て、

「獣め」

ぼんやりとした焦点が、この一言で一気に定まった。

「何が獣だ、汚らしい鼠め」

男が吐き捨てるようにそう言った。心の底から軽蔑し、下らないものを見るような目だった。

「警備、早くそいつを連れていけ。さっきから何故押さえ付けただけなんだ」

「いえ、先程も説明しましたが、こいつ動かそうとすると何故か暴れて、って、おい！動くな!!」

赤い瞳は男を捉えていた。

グルル、と獣のような唸り声を上げて、鋭い犬歯を剥き出しにしている。両腕を立てて立ち上がるうとしており、警備員は慌てて手に力

を込め直す。それでも、狩人は徐々に身体を浮かせていた。

「獣め、殺す、許さん、殺してやる」

これは、非常に不味いのでは。

急いで男の腕を掴んで引っ張った。此処から離れなければ、狩人から離れなければ、この男はきつと殺されてしまう。

「早く会場へ、その者は危険だ」

「何を言いますかMr. ウェイン。あんな不埒者に背を向けるなんて、」

「早く!!!」

ブルースの叫びに男は肩を跳ねさせ、ブルースを凝視した。人間、突然の出来事には硬直してしまうものである。男も例に漏れず、僅か数瞬、石のように固まった。

数瞬あれば、十分な隙である。

男の姿が瞬く間に横へ流れ、大理石の柱に轟音と共に叩きつけられた。

あ、とブルースが思う間もなく、狩人はブルースの目の前に立っていた。その赤い瞳は自らが吹き飛ばした男ただ一人に向けられ、獲物を追い詰めたかのように慎重に観察に徹していた。

「ああ、獣め、殺す、殺してやる」

「おいお前、」

「薄汚い豚め、豚は嫌いだ、その膨れた腹にさぞ大きな淀みが溜まっているのだろうよ、許さん、虫は潰す」

矢張り、ブルースなど眼中にないようだ。

狩人はゆっくりとした歩調で男に近付いていく。今すぐ止めたいが、スーツも着こまず道具も持たないブルースに止められる訳がなく。

「おいー!」

しかしブルースは彼の肩を掴んだ。煩わし気な瞳に射抜かれる。

勝てないから何だ、敵わないから何だ。そんなものは理由にならない。止めなければ後悔する。だから止める。止めなければ。

「いい加減にしろ。これ以上罪を重ねるなよ」

赤い瞳に負けじと睨み返す。

「…貴公、」

スツと狩人の瞳が細められる。獲物を見定めるそれだ。氷水を頭からかけられたかのように、急激に体温が下がったのが分かった。きつと蛙は、蛇に睨まれた時に同じように感じるのだろうか。そう、恐怖だ。

だが、負けられない。

只管に無言で睨む。睨み続ける。

視界の端で吹き飛ばされた男が立ち上がるのが見えた。よたよたと覚束ない足取りだったが、動けるようだ。このまま男が逃げるまで、或いは警察が駆け付けるまで時間を稼ごう。

周囲には既に人はいなかった。皆、ずつと遠くからブルースと狩人を見つめている。その光景はまるで舞台上の演劇のようで、男一人が怪我を負った事実がなければ、すっかり騙されていたことだろう。

そしてブルースにとっては大変都合が良く、周囲の目はこの光景を、⁶「暴漢を果敢にも己の身一つで止めている大富豪」として見ていた。見世物になった気分だが、下手に狩人と知り合いだと言癖をつけられるよりはましだった。

どのくらい睨み合っていただろうか。数分、数時間、それよりもっと？

いや実際は10秒も経っていない。狩人の殺気がブルースの体内時計を大幅に狂わせる。

今、ブルースの脳内には逆さ吊りの死体が浮かんでいる。あれこそ正に狩人の狂気の発露だ。何をどうしたら、あのような発想が出来るのか。死体を吊っている最中、狩人は何を考えていたのだろうか。

どうかその狂気を仕舞っていてくれよ、と思いつながら、永遠ともとれる短い時間が過ぎたとき、狩人は、

ふ、と小さく笑った。

再び面食らう。

何だ、お前はそんな顔も出来たのか。

ドンツ。

銃声。やられた。

狩人の早撃ちはコンマ一秒にも満たない。それを経験している筈なのに、ブルースは銃声が響いた直後に「やられた」と思うことしかできなかった。

ブルースに笑いかけた途端、狩人は素早く体を逃げる男の方へと向けた。正面に捉えてしまえば、後は狩人の独壇場である。どこからか取り出した古めかしいマスクットを構えた瞬間、発砲。碌な狙いもつけていなかった筈の銃弾は、真っ直ぐ男の背に当たった。

水銀で作られた弾丸は、水銀の性質上やはり威力が低いようだ。また男も念のためとスーツの下に防弾チョッキでも着込んでいたのだろう、それは男の背の皮膚を僅かに裂いて止まっただけだった。狩人と男の距離が離れていたことも幸いした。

だが撃たれたことのあるブルースだけは分かる。あのマスクットは獲物を殺すためではなく、獲物の動きを止めるためのものなのだ。案の定、男は全身を襲った衝撃に耐えかねて膝を着いていた。

狩人はあの独特なステップを繰り返して、男との距離を瞬時に詰めた。右手を大きく引き絞って、膝を着く男の背に狙いを定めて。

ブルースは既に駆け出している。だが間に合わない。常人の足の速さではこの距離は遠すぎた。

あの時。狩人と初めて会ったあの時にブルースに対して実行される筈だったそれが、今日の前で起こってしまうのだ。

何かを叫んだ気がする。我武者羅に手を伸ばした気がする。それでも狩人を止めるには何もかも足りなくて、結局は全て無駄だったのだと思ひ知らされた。

ズブリ。右腕が男の身体に埋まった。

スーツも、防弾チョッキも、皮膚も、脂肪も、骨も、何の防護にもなりはしなかった。

獣の爪のように見立てた右手は信じられない程の強靭さを持っていた。男の身を守っていたものを、紙のようにくちやりと破った。ね

更に悲鳴が上がる。猟奇的かつ狂氣的なその行為に、とうとう失神者まで現れたようだ。

「潰す、潰す、潰す潰す潰す——ああ、そういえば長は死んでいたな。私が殺したから」

スン、と狩人が狂気を潜めた。

「ならば女王に穢れを捧げるか——いや、女王も肉塊にしていたな」先程までの狂人っぷりは何処へやら。

耳元まで裂けていたと錯覚させるほどに上げられていた口角は真一文字に戻り、剥き出しだった鋭い犬歯は唇の奥へと隠された。

血で染まっていなければ、数分前までの大人しい病人のようだった。

ブルースは信じられない光景を見て、緩く頭を振った。

彼は、狩人が人を殺す瞬間を漸く見ることが出来た。今までは狩人の獲物の末路しか見られなかったが、この場で狩人の殺人——否、‘狩り’を、目にしたのである。

この瞬間までの狩人に対する考察を全部吹き飛ばしてしまう程の衝撃だった。

——まるで、獣じゃないか。

ゴッサムの犯罪者は例外なく狂っている。食料を買い込むような気安さで重火器を買い込み、雑草を刈るような気軽さで命を刈る。だがそんな彼らでも狂い、人、と称される。人の枠組みからは絶対に外れない。どんなに精神異常者であっても、根底にある思いは人間らしい感情だ。

しかし、先程の狩人の一連の行動は、どう考えても人のそれではなかった。獣に対する憎しみはあれど、狩人を突き動かす衝動は全く別のところにある。寧ろ、免罪符として憎しみをういているようにも見える。

それは何だ。何が狩人を突き動かすのだ。

狩人のことを形容するなら、人より獣の方がより近いだろう。ただ効率良く、ただ正確に、ただ速く、ただ純粹に、狩りを実行するだけの存在。

それでいて、狩りが終わった瞬間には‘人’に戻る。二重人格だとか、性格の切り替えが出来るだとか、その程度の話ではない。狩人は‘人’と‘獣’を、相反するはずのそれらを、平気でぐちゃぐちゃに混ぜ捏ねているのだ。一方を切り捨てることをしない。どちらかに偏ることもしない。ただただ平等に存在させている。

声は、発することは出来なかった。

恐怖と驚愕のあまり、声の出し方をすっかり忘れてしまったのだ。

狩人は暫く死体を見つめ——何を思ったか、血で染まった自身の右手を舐め上げた。

獣の毛づくろいのように、ごく自然な動作だった。何度か繰り返して右手を綺麗にし、左手の血も同じように舐めた。

色付く肌は決して見間違いないのではない。気分の高揚が原因で血流が良くなっている証拠だ。

こいつ吸血鬼か何かか、とブルースは1歩引いた。すると狩人の頬の赤みは直ぐに引き、ゆっくりと彼の方を向いた。

「動くなっつ!!」

ゴードンの怒声が響く。ブルースは狩人の視線が彼を通り過ぎたことで、ゴツサム・シテイ警察がその場を取り囲んでいたことにやつと気が付いた。

彼の肩を必死にたたくのはマルティネスだ。早く安全な場所へ、と口が動いている。だが足は引いた1歩以来全く動かない。魔法をかけた訳でもないのに、地面に縫い付けられたようだった。マルティネスは彼のそんな様子に気付き、狩人から庇うように前に立ってくれた。勇敢なところは有難いが、しかし今は寧ろ状況を悪化させないか心配だった。

警察らと狩人の距離は2 m程度だ。前列にいる者は全員銃を構えている。安全装置は解除されていて、ゴードンの号令が響けば直ぐにでも狩人を蜂の巣に出来る。

「左手の銃を棄てて手を上げろ、早く!!」

だが狩人は動かない。

裾のよれた服から血が滴ったまま、狩人は押さえつけられていた時

と同じようにぼんやりとしているだけだった。

抵抗する気はない、と判断したのか、ゴードンは狩人との距離をじりじりと詰めていった。彼だって人を撃ちたくはないだろう。無抵抗でいるのならそれで結構だった。

「貴公、」

だが突然狩人が言葉を発したため、ゴードンは動きを止めて銃の照準を狩人の頭に合わせた。それでいて意識は古めかしいマスクेटトに注がれている。妙な動きを見せた瞬間に発砲できるよう、全神経を集中させる。なんせ近くにはあの「ブルース・ウエイン」がいるのだ。彼を守らねばという意志が、ゴードンの精神を揺るがぬものにしていった。

そんなゴードンの行動を狩人は気にも留めず、ぼんやりとした視線をブルースに向けていた。興味のないものはとことん無視を決め込むらしい。あの夜の遭逢と同じだった。

「名を」

ブルースに名を聞いているらしい。

ゴードンはその意味を理解するのにたっぷり数秒使った。頭の中で意味を吟味し、理解し、今更何を聞くのだと怒鳴ってやりたかった。そしてマルティネスの「何で知らないんだよ」という呟きは、残念ながら空気に融けていった。

ブルースはひっそりと息を吐く。

鮮血を浴びて真っ赤な狩人の肌は、元は病人のように青白かった。血の気が引いていて生気がなく、まるで全身の血液を抜かれたような風体だった。

ならば全身の血液は、何処にいったのだろう。

赤い瞳を見遣る

綺麗な赤色だ。血のようだ。動脈を流れる、鮮やかな赤色の。

「ブルース」

シンと静まり返った空間に、彼の声がいやに反響した。

視線が一気に集まる。普段ならば居心地が悪く感じられる環境であるにも関わらず、ブルースは一切を気にしていなかった。

彼の目は、狩人の瞳しか映していない。赤い、血のような瞳を。月のような神秘的な瞳を。

赤い、月。

「ブルース・ウェイソンド」

言い切った途端、どつと疲労が押し寄せた。

極度の緊張状態に晒され続けたからだろうか。体が重い。今すぐ足を畳んで座り込みたかったが、深く息を吸って耐えようとする。異変に気付いたマルティネスが、咄嗟にブルースの肩を掴んだ。

「そうか、ブルース」

再び、小さく笑った。

「話せてよかった。有難う」

狩人は見事な早撃ちの技術で、自身の頭を撃ち抜いた。

夜明けを望むけものたち

あれから7日経った。

狩人は、毎夜のように死体を吊り下げていた。

1人の時もあれば、10人以上が一気に殺されていた時もあった。異変に気が付いて駆けつけても、死体があるばかりで狩人の姿は見つけられなかった。

死体を吊り下げる場所の法則性も見当たらない。その場で見つけた獲物を狩っているだけのようだった。

ただ、悔しい。

狩人の足取りは一向に掴めない。

ゴードンは、狩人が起こしたであろう殺人事件の何件かは、模倣犯の仕業ではないかと睨んでいた。そうであれば、法則性が見つからないのも頷ける。

だがブルースは即否定した。間違いなく狩人の仕業であると、ゴードンに強い口調で言ったのだ。

何故だ、とゴードンは問い詰めたかったが、リドラーの一件以降から未来予知にも似た推理を發揮し続けている彼の言葉に、渋々ながら納得した。

「脳漿のはじけ飛ぶ様が、場違いにも美しいと思っただ」

バットケイブにて、ブルースはバットマンの格好のままアルフレッドに告白した。

「見事な早撃ちだった。洗練されていて一切の無駄がない。気付いたら狩人が倒れていて、更に瞬きをした途端に死体が消え去っただ」
アルフレッドは彼の言葉を静かに聞いていた。あの時の彼はコンパクトレンズ型のカメラを仕込んでいなかったため、アルフレッドは事件のあらましを、彼の言葉と新聞でしか知らなかった。

「きつと俺はおかしくなった。なあアルフレッド、俺は最近、狩人のようになれたら楽になれると思うようになったんだ」

心に燦る憎悪のまま、脳内を支配する怒りのまま、衝動に任せて殺

しつくしてしまえばきつと楽に報われるだろうと。

両親を失ったあの日。何もかも失ったと思っただけでも、ブルースには多くの選択肢があった。彼はその中から復讐のため闇に身を投じる道を選び取り、今に至った。そこに後悔はない。今までもこれから、彼は闇に住まい影に潜むヴィジランテとして存在し続ける。そうなる運命であったし、彼もそのつもりであった。

狩人に出会うまでは。

確信があった。ブルースが殺人を許容してしまえば、きつと狩人のようになるだろう。

無慈悲に、残酷に、冷酷に、それでいて無機質に。

殺して殺して殺しつくして、完成した血だまりの中に一人で佇み、嘲笑の声を上げる。それが酷く魅力的に思えてしまっただけ。

「恐ろしいんだ。あの赤い月が忘れられない」

カウルをゆっくり外す。

目元に塗った黒い塗料が、汗と雨のせいで顔全体を汚していた。アルフレッドは黙って手元のタオルを差し出し、ブルースはそれを受け取って顔を乱雑に拭いた。

暫く、静寂が場を包んだ。

控えめに鳴る機械音に耳を澄ませる。ファンが空気を吐き出す音が心地良い。

ブルースは黒く汚れたタオルをじっと見ていた。爽やかな柑橘類の香りが少しだけした。ドリーが選んだ、ブルースの気に入っている洗剤の匂いだ。

視線を僅かに横にずらす。テーブルの上には狩人の血の分析結果が書かれた紙が置かれている。結局、ごく普通の人間の血液と何ら変わりないものだったし、一致する人物はサーバーに保存されていなかった。これ以上はとうしようもできないため、後日ゴードンに分析結果を渡す予定である。

振り出しに戻った気分だった。

溜息を吐く。僅かだったとはいえ、静かな空間にはよく響いた。

——そして、けたたましいアラーム音。

視線を鋭くさせる。アルフレッドも同じで、皺の寄った目をギラリと輝かせて、光り出したモニターを凝視した。

「侵入者です。防犯アラームが作動した位置は——西口、此処に繋がる地下道です」

モニターに表示された地図には赤い点が点滅していた。既に敷地内の奥深くまで侵入を許しており、ゆっくりとした速度でバットケイブに近付いていた。

ウエイン邸に近付くだけの輩は警察に通報するだけで済むが、ブルースとアルフレッドしか知らない地下道を迷いなく進んでいることから、ただの浮浪者や犯罪者ではないことが窺える。

「真つ直ぐ此処に向かっているな。迎撃システムを作動させろ」

「承知しました。監視カメラも起動させま、」

アルフレッドの言葉が不自然に途切れた。常に冷静沈着な彼が珍しい。何かとブルースも監視カメラの映像を見遣る。

——左手に大砲を構える、コート姿の狩人の姿が映っていた。

大砲は普通地面に固定して使うものとか、左手だけで持ち上げられる筈がないとか、そもそも片手で扱える代物じゃないとか、ありとあらゆる思いが脳内を駆け巡り——轟音。大きな砲口から巨大な砲弾が発射され、カモフラージュの壁を突き破った。

狩人はというと、発砲の反動で数歩下がったが、それだけだった。それだけで反動を殺し切り、何事もなかったかのように歩みを再開した。

科学の結晶たる防護壁も役に立たなかった。轟音が此処まで響く。いくらカモフラージュ加工のため僅かに脆くなっていたとしても、そう易々と破壊されるほどではなかった筈だ。

「…流石に大砲を用いられるという想定は出来ません」

顔に出ていたのだろう、アルフレッドは苦々しくそう告げた。

アーカム・アサイラムに侵入するときも同じような手法を用いたらしいから、その時から対策すべきだったか。いやそれでも、大砲を片手で扱うなどと誰がイメージ出来るものか。

今狩人がいる西口はあまり広くない。主にバットマンとして地上

に出る際にしか用いないためだ。通常の大砲程度の大きさの兵器であれば運搬は容易ではないし、地下道に運び入れた時点で迎撃システムが作動して破壊する手はずになっている。そもそもとして、想定する必要がないのだ。

電気ショックを起こす床も、ゴム弾が高速で発射される銃も、落とし穴も、縦横無尽に移動する巨大なペンデュラムも、全て避けられるか無効化される。その動きがやけに慣れているのが腹立たしい。

「マスター・ウエイン？」

「迎え撃つ」

一度取り外した装備を再度装着する。アルフレッドが制止するよきな声を上げたが、構わずにベルトを締め直す。

様々な罠が効かないのなら、結局はこうするしかないのだ。

「下がっているアルフレッド。出来れば上に逃げてほしい」

「そういう訳にはいきません。主人を置いて自分だけ逃げる従者が何処にいますか」

「…気を付けろよ」

「危なくなったらきちんと逃げますよ。貴方様を連れてね、ブルース」カウルは机に置いたままだ。どうせ狩人には正体がバレている。

これ以上壁を破壊されては修理費が嵩むだけだ。ブルースは迎撃システムを止め、此処に繋がる扉を全て解放した。

少し遠くに狩人の姿が見えた。左手に大砲を、右手にノコギリのよきなものを持って、ゆっくりとした歩調で近付いてきた。

砲弾を持っている様子は見られないから、もうあの砲は使えないだろう。撃つ弾がないのなら、巨大な金属の塊と化す。振り回されてしまえば堪ったものではないが、少なくとも出会い頭に砲撃される心配はない筈だ。

1分、1秒すら過ぎるのが長く感じる。

狩人の赤い瞳を認識する。途端に背筋を奔る怖気に身を固くした。

まだ、遠い。

歩みは尚もゆっくりだ。

ブルースは動かない。

あと少し。

漸く、5 m程の距離まで近付いた。

「狩人」

ブルースの顔を見ても、やはり驚いた様子を微塵も見せなかった。

「何時からだ」

「最初から」

静かに口を開いた。

「ブルース。貴公のことは、最初から知っていた」

大砲が消える。煙のように突然薄くなり、最初から存在しなかったかのように消えたのだ。これで突然現れたマスケットの絡繰りも解けた。何処か見えないところに隠し持っていたわけではなく、左手に持つその瞬間まで、この空間に存在していなかったのだ。

赤い瞳が横に流れ、アルフレッドを映した。成程確かに、蠱惑的で神秘的な瞳だ、と彼は思った。だが囚われる謂れもないと、悠然とした態度でブルースの後ろに佇んだままだ。

狩人は、やはり直ぐに興味を失くして、再度ブルースに向き直る。

「夜は明けたか？ 酷い夢だ、ゴツサムの街は。価値のない醜い獣が、当然のように跋扈する。ずっと昏い夜のままだ」

「それでも俺の街だ。お前のような異常者が口を出すなよ狩人。山に籠って、熊でも狩っていればいいだろう」

「面白い冗談だ」

軽口を叩いてみたが、狩人は笑うことも憤慨することもなかった。感情の一切が揺れることのない、凧いだままの声色だった。

狩人はそれきり黙って、じつとブルースを見つめていた。ブルースも狩人を見つめた。瞳から感情を読み取ろうとしたが、何も感じることは出来なかった。

「彼女も、白いリボンをつけていた」

ぽつり、狩人がそう言った。

「オルゴールを渡された。両親の思い出の品だったそうだ。帰ってこない父親を捜しに行った母を探してくれと、泣きながら私に頼んだ」
これだ、と差し出された左手には、掌に収まるくらいの小さな木箱

が握られていた。子守歌が流れるらしい。聞いてみたいと思ったら、また消えた。随分と便利な手品だと片隅で思った。

「彼女の家から少し離れた墓地に、父親はいた。獣を殺していた。彼もまた狩人であったから、当然だった」

そこで狩人の視線が下がった。僅かばかり彷徨わせて、戸惑うような様子を見せた。

「だが彼もまた獣になっていた。敵味方の区別がつかず、少し前に顔を合わせた私すらも、認識できなかつたようだった」

「顔を合わせた？」

「そうだ。彼女と会話する少し前、彼に助けられた。とても強かつた。私など足元にも及ばなかつた」

赤い瞳に感情が宿った。怒り、悲しみ、強い憎悪。

「だから彼が襲い掛かつてきたとき、私は形振り構っていられなかつた。失った記憶を取り戻すため、目的を達成するため、彼を殺すしかなかった。殺し切られる前に、彼を殺したのだ。説得も通じない、人の言葉も話さない、ただの獣だったから」

空いた左手を懐に突っ込んだ。ごそごそとまさぐるように動かす。目当てのものを掴んだのか、徐にブルースに腕を突き出した。

それは真つ赤なブローチだった。血のような鮮やかな赤色だ。装飾からして、間違いなく女性のものだろう。

「彼を殺した墓地にあつた、死体の女性が身に付けていた。母親のものでつた。獣に殺されて、その獣を父親が殺していたのだ」

次に取り出したのは、布の切れ端だった。純白だったであろう生地は赤黒く汚れている。僅かに鉄のさびたような臭いが漂ってきて、汚れの原因は血であると悟った。

「母親は死んでいた。父親は殺した。彼女に母親のブローチを渡しながら告げた。酷く罵倒されて、蹲つて泣いたまま動かなくなった。避難所である教会に連れていこうとしたら、激しく抵抗された。仕方がないから、教会の場所だけ告げて私は去つた。」

瞳に浮かんだのは、激しい後悔の感情であつた。

「心配になつて戻れば、彼女はもう家にはいなかった。だが家から教

会までの間の道に、やたらと腹の膨れた獣がいた。目障りだから殺したら、腹からこの布とブローチが出てきた」

見た事のない、弱り切った狩人だ。上げていた左腕が、糸が切れたようにだらんとぶら下がった。ガシャン、とノコギリのようなものが地面に落ちた。力の抜けた右手から滑り落ちたらしい。

「だから獣を殺す。狩りつくす。如何あつても絶滅させる。人に危害を加える愚かな獣を、誰かを悲しませる獣を、私は決して許さない。獣の総数は知らないが、最後に狩るべき獣はもう知っている。それが息絶えるまで、私は狩人として獣を狩り続ける」

「…途方もない話だ」

ブルースは少しも視線を逸らすことはなかった。

赤い瞳が揺れ動く様を見つめ、彼は狩人の感情を読み取った。先程までの無機質なものは違う、人間らしい瞳だった。

「内に潜むものが獣であろうと、人は人でしかない。たった1人で殺戮を繰り返すと？お前はただ、獣という言葉を自身の免罪符として使っているだけだ」

「黙れよ、貴公。獣は死ぬべきだ。だから獣を狩る狩人がいるのだ」

「大した情熱だ。ならば、最後に狩るべき獣とは、さぞや恐ろしい、人に多大な害をなす存在なのだろう」

「そうだ。その獣とは、私なのだから」

ブルースは、続けようとした言葉を飲み込んだ。

狩人が口元を覆う布をずり下げた。中性的な顔立ちが露わになる。小さな笑みを形作っており、それが何だか泣いているようにも見えた。

「私こそ、狩らなければならぬ獣なのだよ。だが死なない。貴公も見ただろう。私は死ぬが、その死がまるで夢であったかのように失われる。なかったことになるのだ。酷い話だよ、本当に」

な、とブルースは目を見開いた。死体を偽装する何かしらの特殊能力を持っていると思っていた。だが正体は全く別の、私こそ世界の理を無視する冒流的な神秘だった。

死をなかつたことにする。大抵の人間はその能力を喉から手が出る程欲しがらるだろう。歴史を紐解いても分かる。歴代の権力者は、皆一様に死を恐れて不老不死を求めた。狩人のような能力を、何が何でも手に入れたいだろう。

ブルース自身も、バットマンとして活動している最中に死にかけることなど多々あった。様々な運が彼を助け、奇跡的に死ぬことはなかったが。

その度に思う。冷えていく身体も、力の入らなくなった四肢も、だんだんと遠ざかっていく感覚も、もう二度と味わいたくないと。

だから理解できる。そのような不死性など、死んでも御免だ。

「私は死が怖い。あらゆる感覚がなくなっていくのに、それが無かつたことになってしまうから。また、夢に目覚めてしまうから。貴公は死が怖いか?」

「――自らの死を、怖いと思ったことはない。死ねばそれで終わりだから」

「そうか。そうだろうな。うらやましいな、貴公」

「羨ましい、か。普通の人間の感覚なら、お前の方を羨ましく感じるだろう」

「それこそ愚かだ。私など、結局は何かを殺すことしか出来ない畜生だよ。血塗れで、醜くて、淀んで、汚れていて、何もかもを無駄にしてしまう。何も成せず、誰も助けられない」

「あの家族を助けた」

囁く様な声は、狩人の耳にきちんと届いたらしい。それでも、狩人の価値観は揺らがなかった。

「貴公がいなければ、助けられなかったよ。私はてつきり、もう死んでいると思っていたんだ。彼女の母親のように、もう手遅れだとはかり」

全てを諦めているような表情だった。口元は小さな笑みを浮かべながら、眉尻は下がっている。細められた瞳は、涙を堪えているように見えた。

「狩人になんてなりたくなかった。なつても意味がなかった。最初は

信じていたさ、獣を狩りつくせば、永い永い夜が明けて、死ねるのだと。だが獣は増え続けるし、夜はまだ明けることがない」

そうか、と瞼を閉じた。

狩人を獣狩りへと突き動かしていたものが、ブルースに分かった。分かってしまった。

憎しみも、怒りも、興奮も、全て飾りでしかない。

強烈なまでの自殺願望。

彼も、かつて抱いていたものだ。

「獣が絶えることはない。夜も明けない。だが私には殺すことしか出来ない。だから獣を殺す。獣狩りの夜だ。決して明けない昏い夜だ。獣に死を。人を害する獣に死を。…殺すことしか出来ない最も野蛮な獣に、死を」

狩人の赤い瞳から、とうとう大粒の涙が零れた。

「私がゴツサムの街を夢見るのも、きっとこの街も似たようなものだったからだろう。だから貴公に聞いた、夜は明けたか？と。どうか答えてくれ、ブルース。ゴツサムの街に、夜明けは齎されたか？」

「…いいや」

少しだけ間を置いて、正直に答えた。

狩人が‘獣’と称するような犯罪者は、ゴツサムに掃いて棄てる程いる。無害な市民は常に奴等の脅威に怯え、街全体の空気をどんよりとした陰鬱なものにさせていた。すると外から更なる犯罪者が目を付け移り住み、更に犠牲者が増え――。

悪循環に陥っている。バットマンとして戦っていても、与える影響は微々たるものであった。その影響が悪い方向に転じることだってある。その度に感じる遣る瀬無さは、言葉では形容できない程に苦しい。

狩人の瞳から徐々に感情が失われる。絶望したのでだろう。この街もまた、明けない夜に囚われていると。狩人の望む結果は得られないのだろうと。

「だが」

ブルースが1歩踏み出した。狩人は突然の出来事に肩を跳ねさせ、

1歩下がった。

その反応に溜飲が下がる。常に彼の前を往く狩人の鼻柱をへし折った気分だった。

「いつか成してみせる。父と母が愛したこの街を、俺が生まれ育った街を、絶対に夜明けへと導いてみせる」

「その見た目で？ふざけた蝙蝠の格好で、街を救えると？馬鹿げた発想だ。貴公、冷静になり給えよ」

「お前に言われたくない——いいや論点はそこじゃない。いいか狩人、明けない夜など存在しない」

「口では如何とでも言える。そうか、私はどうやら貴公を買い被って、!？」

狩人の胸倉を乱暴に掴んだ。狩人の方が身長が低いせいとか、引き寄せるとつま先立ちになった。

ふん、と鼻を鳴らし、ブルースはぐつと顔を近付けた。

「人は夜に絶望する。同じように、朝に希望を見出す。俺もつい最近まで理解していなかった。お前の言う獣——犯罪者を殴っていくだけでは、絶望が拭える筈がなかったんだ！」

赤い瞳が憎々し気に歪んだ。少ない遭逢の中で知ったことだから、狩人がこうするときは大抵人が死ぬ。狩人が殺す。

構うものか。ブルースは思いのまま叫ぶように言い放った。

「夜に眠って、夢を見る。だが必ず朝に目覚める。それが当たり前なんだ、狩人。どれだけ昏く、永い夜だろうと、必ず明ける瞬間が来るんだ。いつか、絶対に。例え何か大きな存在が朝を隠していたとしても、それを打ち倒し夜明けを齎す英雄ヒーローが現れるだろうさ。ああ、絶対に」

「夢物語だ、笑えてくる。絵本の見過ぎだよ。…ならば貴公が、ゴツサムにおける英雄ヒーローとなるのか？」

尚も食い下がる狩人。左手には既に古めかしいマスクETT——獣狩りの短銃が握られている。狩人の早撃ちの速度と精度を考えれば、ブルースの頭は今すぐにでも弾け飛ぶだろう。

それでも、狩人の言葉に鼻で笑ってやった。不快そうに顔を歪めて

いたが、無視をして続きを話し出した。

「英雄が特別な存在だと勘違いしているな。愚かで、馬鹿馬鹿しい考えだ。俺はヒーローではないし、なるつもりもない」

「意味が分からない。貴公も言ったではないか。夜明けを齎す者が――」

1つ息を置き、ブルースは狩人の瞳に吐き捨てた。

「特別な力を持つ者では務まらない。ただ、手を差し伸べられる人間が、英雄なんだ。英雄には、誰でもなれる。絶望する者に手を差し伸べて、まだ終わりじゃないと笑いかければいい」

大きく目を開き驚愕する狩人を突き飛ばした。数歩フラフラと下がっていき、ブルースを力なく見上げた。

「俺はきつかけであればいい。いつか皆が立ち上がり、夜明けを齎すために動き出す。そんなきつかけであれば、それでいい」

「…黙ってくれ、頼む」

「黙らない。いいか狩人、繰り返すぞ。明けない夜は、決していないだ。人はそれを、希望と呼ぶのだから」

「――人は、希望を求めずにはいられない、か」

狩人は今度こそ座り込んだ。

「…ロケット」

「ロケット?」

「そう、ロケットだ。小さな真鍮のペンダントの。大切なもの、だった気がする。多分、記憶をなくす前の、唯一持っていたもの。失くしてしまった」

ブルースは瞬きをした。

少し間を置いて、やがて狩人は、再び静かに涙を流した。だがそれは悲しさではなく、安堵からくる涙だった。

体全体を震わせている。ああ、と息を漏らし、ブルースを優しげに見上げていた。

「それが、私にとっての希望だと、思う。でももういい。どうせ見つからないし、今の私は価値を感じないだろう」

「それでも、」

「いいんだ、ブルース。何故だか、今は晴れやかなんだ」

狩人が立ち上がる。向けられた表情は、共に瓦礫の山を掘っていたときのような、心からの感謝の言葉だった。

「有難う。貴公と出会えて本当に良かった」

「…そうか」

「そして済まない。私と貴公は精神構造が何処か似ているからか、貴公も随分と獣性が上がっているようだ。放置しておくとは何か私のようになるぞ。これを飲め」

虚空から取り出した小瓶を投げ渡される。

小瓶に満たされた液体は鮮やかな青色で。何処かで見たような、と悩んでいると、アルフレッドが焦った様子で耳打ちしてきた。

「これは、その、狩人が最初に引き起こした事件で、」

「被害者の少女に飲ませたもの」

人の記憶を消す疑いがある薬を易々と投げ渡すなど、なんてことを。

何の意味があるのか、とギロリと睨むと、狩人は軽く肩を竦めて見せた。

「その薬は脳を強く麻痺させる。それ以外にも、記憶の混濁や意識の消失などの効果を齎すが、効果が切れると後遺症も残らない。飲ませた少女も特に何の異常もなかった筈だ」

「ではなぜ事件の記憶が消えていた？」

「秘儀’を使った。あの家族に使用した‘聖歌の鐘’と同じような――

――いや、これ以上は‘啓蒙’を齎す。止めておこう」

聞けば、この薬は見た目そのまま‘青い秘薬’というらしい。精神麻酔の一種で、その効果からよく人さらいが用いていたそうだ。狩人はそれを自分が服用するために持ち歩いているとのことだ、実際に飲んで見せてくれた。

常人が飲んでも脳が麻痺するだけだが、狩人は違う。己の強靱な意志によって意識を保つため、主作用を引き起こすことがない。

だから、副作用だけを利用できる。

ブルースは一瞬たりとも狩人から目を離さなかった。しかし、途端

に狩人の姿が掻き消えたのだ。またあの高速移動か、と辺りを見渡しても何処にもいない。アルフレッドにも見えなかったそうだ。

「私は動いていない。よく目を凝らせ」

声が聞こえた。言われた通り、狩人がいた場所を睨むように見た。やはり何もいない。

いや、いた。存在が希薄だが、間違いなく狩人がそこにいた。

此処に侵入するときも、この薬を用いたそうだ。これは気付けない。深く侵入されて初めてアラームが鳴ったのも、システムの不具合ではなかったようだ。

「貴公の意志は常人よりは強靱だ。1本飲んだとして、半日意識を失うだけで済むだろう」

「半日…、飲む必要が？」

「あるとも。放っておくと獣性に吞まれるぞ。私の瞳に魅入っていただろう？」

凶星を突かれて、ぐっと押し黙った。

居心地が悪そうに視線が下がるのを見て、狩人はおかしそうに声を上げて笑った。

「私の瞳は特別なんだ。その昔、人が月に魔性を見出したように、私は月に魅入られているから。だから脳を麻痺させてリセットしろ。赤い月は、人と獣の境を曖昧にさせる」

ほんの少しだけ寂しそうだった。

「あと、これも」

「これは…鐘？随分と小さいし、古いものだ」

「狩人呼びの鐘」だ。何か本当に、とても恐ろしい——人間だけでは太刀打ちできないような強力な化け物が出てきたら、鳴らせ」

——狩人は、言外に、別れを告げていた。

黙ってアーカム・アサイラムに行けと冗談を言っただけだったが、止めておいた。

きつともう会うことはないだろう。狩人は元居た場所に戻って獣を狩り、ブルースはゴツサムを守るために尽力する。なにもかも、出会わなかった頃に元通りだ。

毅然とした態度を崩さぬよう、赤い瞳を強く見返した。

狩人の赤い瞳は、不器用な温かさがあつた。包み込むような、柔らかな温かさ。

動揺する。見守るようなそれに戸惑い、悟られまいと眉根を寄せた。

「もう行く。二度と会うことはない。この世界には、既に頼りになる狩人がいたのだから。さようなら、ブルース。どうか精一杯生きて、この街に夜明けを齎し給えよ」

「言われずとも分かっている。：ゴツサムは案外強いのだから、俺にも出来ることはきつと出来てしまうだろうが」

「自信を持ち給えよ。頼りになる者もいるだろう」

ブルースは僅かに振り向く。アルフレッドが嬉しそうに、綺麗なお辞儀をし返した。

狩人の姿が薄れていく。悪い夢であつたかのように、存在そのものを消している。

最後まで、視線は逸らさない。夢と片付けさせるものか。狩人は確かに此処にいる。多くの人を殺し、街を恐怖のどん底に陥れ、でも希望を探して彷徨うだけの迷い子だった、そんな者が、此処にいるのだ。

「お前の罪は忘れないし、許すこともしない」

「そうか、嬉しいな」

それでは、貴公に血の加護が――、

「いや、：ブルース。従者と共に、末永く元気で」

狩人の姿は、夢のように掻き消えた。

朝日と希望

「まだ、着かないか」

頬を伝った汗を拭う。あちこちから野鳥の囀りが響き渡り、木の葉の擦れ合う音と共にブルースの耳に入り込む。

森に入ってから、既に2時間は経過していた。

ブルースは遭難している訳ではない。調べた資料を基に目的地の座標を割り出し、仕事の都合ではあったがやつと近場の街に来られたので、休日である今日をこの探索に費やしていたのだ。

探しているのは街、だったものだ。

街の名はヤーナム^{Y h a r n a m}。狩人がいた場所だ。

ずっと頭に引っかけかかっていたものの正体は、まだ彼の両親が健在だった頃に読んだ、世界の怪談を集めた短編集だった。

その本は既に失くしてしまったから、記憶を頼りにサーバーを掘り返し、該当しそうな情報を片っ端から集めた。必要なものが揃ったのが、つい最近。

医療の街、ヤーナム。

人里離れた山間にポツンと存在するこの街は、**血の医療**という奇跡を求めて来訪者が絶えなかったそうさ。だがその場所がとにかく辺鄙らしく、辿り着けずに道中で死んでしまうのが大半だったそうさ。というのも、ヤーナムを目指して旅をしたものは絶対に帰ってこなかったのだ。だから誰もヤーナムを見た事がないし、存在すら疑われていたらしい。

栄華極まるヴィクトリア朝。真偽も定かではない、当時の噂話だ。呪われた、しかし不治の病も癒せる街。

ヤーナムがあるであろう方角からは、獣の遠吠えが絶えなかったらしい。

「———これか」

蔦だらけになった鉄柵を見つけた。長年雨風に晒され、表面がびっしりと錆に覆われていた。

その柵に取り付けられたプレートも劣化が酷く、刻まれた文字を讀

むことが出来ない。

ブルースは背負ったバッグから小型の解析装置を取り出しスキヤンする。液晶画面に、嘗て刻まれていただろう文字が浮かび上がった。

‘Y h a r n a m,’

「大当たりだ」

漸く辿り着いた、と笑みを浮かべた。水分補給をし、気合を入れ直して柵を飛び越えた。



狩人の狂行がパタリと止んでから、1年が経っている。

ゴードンには、狩人がもういないことを直ぐに話した。そんな筈はない、また現れるぞと彼は激高したが、現在はもう狩人の事など思いつくこともないだろう。ゴッサムの街は、常に新しい犯罪者を生み続けるのだから、現れない者に構ってる暇などないのだ。

ゴードンに限らず、街の住人もそうだった。いつ自分が逆さ吊りにされるのかと恐怖する日はもうない。遠い過去の恐怖より、入れ替わるようにやってくる新しい死の脅威に備えることの方が大事だ。

それが少しだけ、可哀想に感じた。

直ぐに狩人を思い出せるのは、今やブルースとアルフレッドだけだった。それ以外は、一時の悪夢のようなものだったと認識し、次第に完全に忘れていく。

「……これが、ヤーナム」

鉄柵を飛び越えて30分。漸くヤーナムの入り口に辿り着いたブルースは、そのあまりの美しさに感嘆の息を漏らした。

100年以上も人の出入りがなかったためか、街の大半は雑草やら蔦やら樹木やらで荒れに荒れていた。だが残っている建物は当時の姿を殆ど保っており、荘厳な雰囲気は建築技術の精密さを語っていた。

衛星を駆使しなければ見つかることはなかったであろう山奥に、人

が辿り着ける筈もない。だが万が一野盗が住み着いている可能性も考慮し、手甲を装備しておく。

「ごくりと唾を呑み込む。

緊張から、喉がいやに乾いた。

「本当に、美しいな」

歴史的にも、美術的にも価値がある。密集するような街並みは圧巻の一言に尽きた。

遠くに見える崩れた建物は、周辺に比べて一際大きかった。時計の針のようなものがぶら下がっているから、時計塔だったのだろう。

ひとまず、その時計塔を目指すことにした。

歩みを進める中でも、周囲へ視線を向けることを中断しない。

内側から壊されたような壁があった。不自然に崩れた屋根があった。妙に黒い染みが出来ている祭壇があった。一部分だけ酷く湾曲する鉄柵があった。何かを磔にした痕跡があった。狩人の言葉を信じるなら、これらが獣狩りの夜の名残なのだろう。

遠くから、オルゴールの音色が聞こえた気がした。

弾かれたようにその方向を見る。何も無い。

どうやら疲れているようだった。再び水分補給をして、ペチンと頬を叩いた。

大きな橋に辿り着く。街の上の方に繋がる橋だ。苔だらけで、敷かれている石の間からは雑草が伸び放題だ。

途中にある金属製の箱は、鉄柵と同じように錆塗れだった。

「棺桶？」

それは棺桶だ。鎖で雁字搦めにされているそれが、何故こんなところに。

積み上げられるように所々に乱雑に置かれている。弔いが追いつかない程多くの死者が出たのか、埋める場所がなかったのか。とにかく、ヤーナムの街のそこかしこに棺桶が放置されていた。全て、鎖で封をされていた。

開けたら吸血鬼が出てきそうだと心の中で思いながら、上へ上へと登っていく。

ヤーナムの街は、縦に積まれていると錯覚させるほど高低差が激しい。山を切り開き、斜面を利用してそのまま街を造つていったからだろうか。

いくらブルースが鍛えていても、流石に息が上がってくる。特に最近は寝不足に拍車がかかり、少しでも気を抜けば倒れてしまいそうだ。

気力で何とか耐え、橋の先の大きく歪んだ鉄格子を潜り抜けた。

広々とした階段が目に入る。今からこれを登るのか、と顔を顰めたが、覚悟を決めて足をかけた。

「流石に、堪える、な、つく、」

早く事を済ませなければ、という焦りが生まれる。日没までには森を抜けないと、本当に遭難してしまう。

階段を半ばまで登って、一際大きな建物が正面に鎮座していたのが見えた。

教会のようだ。遠くからでも分かる華々しい装飾は、迷える人々を優しく迎え入れるためのものだろう。やけに浮いている、と思った。

階段を上つているとき、道中に空っぽの乳母車が捨て置かれているのが目に入った。それだけ、何故か綺麗に形を保っていた。勿論、中は空っぽだ。

美しいが、不気味な街だ。

——ふと、狩人の匂いがした。

1年たつても忘れることはない、独特な匂いだ。別の何処かで嗅いだような匂いのような、朧気ながら手が届きそうで、しかし決して届かない、不思議な匂い。

弾かれたように走り出した。

風の方向を読む。右側からだ。丁度脇に繋がる階段を見つけ駆け降りると、墓地に囲まれた広場に出た。

奥には巨大な建築物。階段の上の教会よりは一回り小さいが、此方も教会のようだった。

広場にゆっくりと足を踏み入れる。墓が乱立していて歩きづらい

ことこの上ない。教会の近くだからなのか、捨て置かれている棺桶の量も先程より多かった。

中心には、ポツンと井戸だけがあった。恐る恐る近付く。

井戸にもたれかかるように何かがあった。白く細長いものが見えて、骨だと確信した。気を引き締める。井戸を中心に回り込み、その何かと相對する。

やはり骨だ。丁度、大人1人分の。

骨を包む衣服には見覚えがある。いやに長いサスペンダーに、丈の短いフード付きのマント。狩人のものだった。

やっと、見つけた。

右手があつたであろう位置に、なにか光るものがあつた。

心の中で断りを入れ、拾う。真鍮製のロケットペンダントだった。中を見るために開く。錆びて開かないかと思つたが、予想に反してすんなりと開いた。

2人の肖像画が入っていた。男と女。雰囲気は狩人によく似ていた。

息を吐き、ロケットペンダントを元の位置に戻す。ついだとばかりに、取り出した可愛らしい封筒を狩人の懐にねじ込んだ。

「お前が助けた家族からだ。お前に届けてほしいと。…随分時間がかつて申し訳ないが、黙って受け取ることを推奨する」

彼らの顔が浮かぶ。久々に会ったときは真つ先に父親に抱き付かれて暫く思考が停止した。その後娘、母親、家族の親戚の順で更に抱き付かれて混乱した。後ろにいたゴードンは呆けていたが、事情を知るマルティネスはうんうんと涙を浮かべていた。

暫くは感謝の言葉の洪水だった。突然の出来事に固まっていると、あれよあれよという間に封筒を託された。どうか、もう1人に届けてほしいと。

確実に、とはいかないが、約束しよう。そう言つたら、泣き出してしまった。本当にありがとうございます、という言葉を受け止め、そのまま別れた。彼らは既に、ゴッサムを出ていったのだろう。

狩人に会つたら、色々な文句を言つてやろうと思つていた。

青い秘薬を飲んだら本当に半日意識が吹き飛んだ。

酷く疲れたように目を覚ました。

貰った狩人呼びの鐘は舌が付いておらず、叩いてもくぐもった音しかならない不良品であること。

狩人が殺した富豪が裏で人身売買の市場を取り仕切っており、元締めがいなくなったことで市場が自然消滅したこと。

だが結局は全て飲み込んで、ブルースは何も言わず立ち去ることにした。太陽の位置と時計が指し示す時間を照らし合わせて、日没の時刻を計算する。

あ、と気付く。

日没までは3時間程だ。太陽は真上をとうに過ぎ去り西に傾いている。丁度、井戸を挟んで狩人の後ろ側に。

狩人がいる位置からだと、朝日がきつと良く見える。

「なあ、狩人」

発した声は穏やかだった。

狩人の匂い——月の香りは、もうしなかった。

「お前の夜は、明けただろうか」

分からないし、知る術もないけれど。

狩人が何処かで、あの小さな笑みを浮かべている気がした。

おわりへ?〈

あとがき（作者感想）と人物設定

楽しかったです（遺言）

声優に釣られて映画見に行ったらまんまとザ・バットマン沼に嵌りました。ああいう危うい雰囲気醸し出す幸薄系美形に弱いのがよくへへへへ…。

ゴッサムの雰囲気あまりにも暗いのでブラボコラボいけるのでは？と軽率にクロスオーバーさせたら全く合わなくて苦労しました。どれもこれも狩人様が強すぎるのが悪い。

アメコミヒーローって今までデップーしか興味なかったんですが、バットマンいいですね。バットマンをザ・バットマンで初めて知ったと思ってたんですけど、なんか記憶に引つかかるなどデッドプール2を見返してたら、デップーが自分の事を「バットマンだ」と言っていたりケイブルに「お前DCユニバース出身かよー」と危ないネタを混ぜ込んで、漸く意味が分かって1人でゲラゲラ笑ってました。

今はアーカムシリーズ（PS4）やってます。本当は5でやりたいなど血涙を堪えつつ、リドラーチャレンジに苦戦しています。鬼畜すぎるわあれ。ゲームのリドラー、サイコパスだけど爽やかさを感じて映画のリドラーのヤバさを再確認しました。

ザバ坊ちゃんはどうぞと新鮮なベリー食べて大人しく寝ろ!!って思うんですけど、どの媒体のバットマンにも言えることでしたねえへ。

書きたいこといっぱいあるんですが、ここまでにしておきます。

ザバ、字幕も吹替も良かったです。時間を忘れてたっぷり3時間世界観に没入、堪能出来て幸せでしたし、綺麗な英語の発音で英語の勉強にもなりました。

以下参考にならない人物設定。大分遊んでます。

○ブルース・ウェイイン

言わずと知れたゴツサムの貴公子。そして陰に潜むバットマンの正体でもある。

優れた体術、観察眼を持っており、それらはリドラーの一件から大きく成長している。

あらゆるガジェットを駆使して超人のように戦うが、彼自身はただの人間である。狩人と対面した時それを強く実感し、暗い劣等感が生まれた。その劣等感が狩人の瞳に月を見出し、また魅入ってしまった。狩人の渡した青い秘薬を飲んでいなければ、その内獣となって人を殺していたところだった。

狩人という存在を、殺人という選択をした自分の末路だと思っている。常に心に留めておき、良い反面教師としている。

最近の悩みは、ゴシップ記者が常に周囲をうろついているところ。と、病弱で直ぐに倒れてしまう、守るべき存在だと周囲に思われていること。

ちなみにヤーナムからはアルフレッド遠隔操作の飛行ビークルで一気に帰った。

作者はノーランバッツがライジングの最後でゴードンに言ったセリフがお気に入り。

○アルフレッド・ペニーワース

万能執事。坊ちゃんが戦うことに否定的な態度を取るが、決して見捨てることはない。

○ドリー

ウェイン家に仕える召使。おばあちゃんは大好きなのもっと登場シーン増やしてほしかった。

○ジエームズ・ゴードン警部補

バットマン、いい加減急に姿を現したりいなくなるのは止めてくれ。

○マルティネス巡査

今日もウエインさんを生で見ただぜバットマン！

○狩人

強い自殺願望を持ったマジキチ血狂い地底人。内臓攻撃をするこ
とに喜びを感じている血に酔った狩人。

自分の名前を忘れているため、知り合いは単に「狩人」や、ヤーナ
ムでの通称だった「月の香りの狩人」、「イカレサイコパス」や「妖怪
温めないで」と呼ばれている。つまりあだ名がいっぱい。定まったこ
とはない。

「ゴッサム・シティ」という場所を新たな悪夢だと勘違いし、いつも
のように獣狩りを遂行。バットマンとして活動していたブルースと
出会い、久方ぶりのまともな人間の目に人であった頃の感覚を取り戻
したおかげで随分と理性的だった。狩人もまた、ブルースに感化され
ていた。

ガスコイン神父関連のイベントのトラウマのせいか、リボンを付け
た少女とその家族はいかなる状況下であつても身体を張って助けよ
うとする。

○青い秘薬

私はこの薬に無限の可能性を見出している（迫真）。

Bloodborne 劇中で、獣性関係（人の内にある狂暴性）が
赤、啓蒙関係（宇宙から齎される神秘）が青色だから青い秘薬も宇宙
関連だよね

？という思考のもと、上位者の血＋医療協会の混ぜ物Ⅱ青い秘薬な
んじゃない？と捏造しました。

○水銀弾

強い毒性があり、また魔除けの効果がある水銀を、狩人が血の遺志
を用いて弾丸状に固めたもの。殺傷能力は鉛の弾丸に劣るが、弾丸を
固める血の血質を上げれば上げる程、威力も増す。

主に内臓攻撃を仕掛けるための一手として用いられるほか、秘儀の使用にも触媒として扱う。

○火に惹かれる不死人

糞団子と黄金の残光を持ちながら森を徘徊する個体と、雪原を彷徨い続ける個体が存在する。狩人の不死仲間。よく殺したり殺されたりにしている。

○灰

最初の火の炉で火防女とイチヤイチャしている、狩人の不死仲間。よく狩人と一緒にある忍を追いかけている。

○忍

少年と一緒に茶屋を営んでいる。狩人に左手の忍義手を狙われている。狩人に近付かれると怖気ゲージが一気に溜まるので視界に入れたくもない。

○褪せ人

まだ5ないです（血涙）。

続編予告

——故に、獣は吠え立てる。

世界に危機が迫っている。

この星を侵略せんと我が物顔で。

彼方より飛来する恐怖は、人を随分と幼くさせた。

「だから僕たちがいるんだ。人々を、地球を守るために」

最前線にして最大級の砦。

人類の希望にして唯一。

ああ、我らがスーパーヒーローたちよ！

最も固い防具を纏おうとも、最も鋭い武器を振り回そうとも、最も強大な軍を率いていたとしても。

彼らは、決して逃げはしない。

彼らには、決して勝てはしない。

正義を掲げる彼らの背は常に、人々によって支えられているから。守るべきものを支え、また守るべきものに支えられる。

続く限り、彼らは膝を屈しない。

屈しないが。

「何とびつくり財政難！ごめん、ちよつと今月は厳しいかなあ！」

「騒ぐなバリー……うわ、共有の預金残高が見るに堪えない程に少なくなっているぞ。どうする、ダイアナ？」

「とは言ってもねえビクター。戦いの余波で破壊した街の修復とか、孤児院への寄付とかで消えちゃうもの。仕方がないわ」

「俺としちゃあ、行き当たりばつたりの戦略をどうにかしたい。今は個々の力で如何にかなつちやいるが——」

「ああ。このままだといつか、各個撃破されておしまいだ。優れた軍師が必要だと僕は思うよ」

財政難。戦略不足。

彼らだけではどうしようもない現実には、直面した。

「だったらさ、やっぱり、彼、を仲間に入れよう。ビクターは、彼の、の

街に住んでるだろう？僕、近々仕事で行くから、その時に勧誘しようかなって」

「だがクラーク、俺は、彼、を実際に見た事がないぞ。行動パターンが分かり辛いから、街中の監視カメラをハッキングしないと接触のしようがない」

「そこまでしないとイケないの。彼、本当に用心深くて隠れるのが上手なのね」

「へー、じゃあ、クラークさんの仕事に合わせて、皆でゴツサムシテイに集合する感じでいいの？いや僕は別にいつでも駆け付けられるけど」

「なら、後で日にちを教えろよ。海が騒いでる、早く現状打破しねえと不味いことになりそうだ」

彼らが思い浮かべるのは同じ人物だ。

真っ黒なケープ、蝙蝠を模したカウル、機能性と防御力に優れたスーツ。

ゴツサムの闇に潜む影にして、沈黙を守る暗黒の騎士。

バットマン。

ジャステイスリーグが欲する、ただの人間だ。

——故に、これらは必然である。

「ごめんダイアナ、待たせたね」

「あら、予定より10分も前よ、クラーク？」

世界は歪み、獣の咆哮が呼び覚ます。

「ちよつと待って、あの人僕の動きについてきたんだけど!？」

「気を抜くんじゃねえ来るぞ!!」

宇宙は目覚め、頭蓋に溜まった呪詛が漏れ出す。

「貴方が、バットマン…否、ブルース・ウェイイン」

「…君はサイボーグだったな。ジャステイスリーグの」

彼方への呼びかけに応えるものは、果たして何を齎すのだろうか。
感応する精神。

此度の侵略者は、最も固い防具も、最も鋭い武器も、最も強大な軍もなく。

ただ純粹な、狂気のみで。

青白い神秘が、冒瀆的な思想が、正常な思考を悉く滅していく。内側から湧き上がる衝動は、憤怒か、憎悪か、それとも悲哀か。分からずとも、それ等が全て、‘破壊衝動’となることに変わりはない。

苗床よ。

「なに、あれ」

さあ、なんだろう？

理解してはいけない。そういった類のものが、相手となった。それだけだ。

血の赤子を抱くために。

赤子を。

瞳の宿る、へその緒を。

——故に、獣は吠え立てる。

「出ていけ」

冷たい声が響き渡った。

「此処は私の——俺の、街だ」

ずっと遠くで、次元を跨ぐ鐘が響いた。

第2章（前編）：暗闇に融けるもの 改革の兆し

某所にて集まる者等。

世界を幾度となく脅威から守ってきた、ヒーローチーム。恐ろしい暴徒、狡猾なる悪党、果ては宇宙より攻めてきた異星人に至るまで、個々の驚異的な力と圧倒的な連携で押しつけてきた、素晴らしい彼等。

名をジャステイス・リーグ。メタヒューマンのみで構成される、正義の味方である。

各々に各々の生活があるため、人命の危機がない限り全員が一堂に会するのは珍しいことである。しかし、今回はとある目的のため、拠点の一つである此処に急遽集まったのだ、

「何とびつくり財政難！ごめん、ちよつと今月は厳しいかなあ！」

「騒ぐなバリー！うわ、共有の預金残高が見るに堪えない程に少なくなっているぞ。どうする、ダイアナ？」

「とは言ってもねえビクター。戦いの余波で破壊した街の修復とか、孤児院への寄付とかで消えちゃうもの。仕方がないわ」

バリー・アレンの悲痛な叫び声と、ビクター・ストーンの冷静な声色、そしてダイアナ・プリンスの美しい溜息。

メトロポリス内にあるジャステイス・リーグの拠点で、ごく久しぶりに全員集合を果たすことが出来た。暫定リーダーのクラークは人知れず安堵の息を漏らす。

「最近はダークサイドの侵攻もない。平和そのもので何よりだ」

「あら、クラーク。紅茶と珈琲どちらがいいかしら？」

「珈琲で。ありがとう、ダイアナ」

ダイアナからカップを受け取り、フェイクレザーのソファに座る。空気の抜ける音がして、少しだけ可笑しくて笑ってしまう。

一口啜る。適温で飲みやすい。

「うーん、預金の件は、とりあえず後回しでいいかい？いつものよう

に、リーグへの寄付金は色んな街へ。自分で稼いだ分は自分で使う」
「昨日スーツを駄目にしちゃったしなあ。もしかしたら、緊急時に駆け付けられないかも。ごめんね」

「では残りはバリーのスーツの修繕に回そう。それでいいか？」

「ビクターに賛成よ。バリー、申し訳ないからって遠慮しないでね？ いざという時の貴方ほど、頼りになる人なんていないんだから」

バリーは申し訳なきように頭を掻いた。弟がいたらこのような感じだろうな、と温かな気持ちになる。

共有の貯金は、あくまでジャステイス・リーグとしてのものである。その多くは善良な市民からの寄付で賄われており、他の施設への寄付や破壊された街の修繕費、今回の様に仲間のスーツの修理に充てられる。

預金残高についての会話が終わったタイミングを見計らってか、皆が沈黙してすぐ、ガコン、と少々乱暴な音が響いた。部屋の隅で筋卜レをしていたアーサー・カリーが、筋卜レ用の器具を置いた音だ。

のしのしと擬音が付きそうな程豪快な歩幅で近寄り、空いている木製の椅子に座る。持っていた酒瓶にそのまま口づけ、盛大に煽って大きな溜息。残念ながら見慣れた光景であり、昼間から飲むなど注意する者は誰もいなかった。

「俺としちゃあ、行き当たりばつたりの戦略をどうにかしたい。今は個々の力で如何にかなつちやいるが——」

アーサーは大局を冷静に分析する。リーグを結成してから1年は経つが、彼は今までの戦闘を俯瞰して、一番足りないであろうピースをズバリと言いつつ当てた。

つまり、司令塔。

各々の持つ能力が強力故か、いくら連携を取ろうと注意しても、結局は意図せずワンマンプレーに陥ってしまう。傍から見ればきちんと連携を取れているように見えても、やはり何処かちぐはぐさを感じてしまう。チームとして形を成していないのだ。これは明確な欠点であり、恥ずべきものである。

現在はビクターとダイアナが作戦を立てているが、ビクターは経験

不足、ダイアナは長命故の視点の違いが顕著に表れていた。

アーサーの言う通り、今までは上手くいっても今後がそうとは限らない。更に強力な敵が現れたりでもしたら、負けはしなくとも周囲への被害が大きくなるだろう。

「ああ。このままだといつか、各個撃破されておしまいだ。優れた軍師が必要だと僕は思うよ」

ここからが、クラークがリーグを集合させた理由だ。

緊張のためか、手が少し震える。4人全員の視線が一気に向いたため、それぞれに視線を合わせるように首を動かした。

「だったら、やっぱり、彼、を仲間に入れよう」

前々からリーグに打診し、結局後回しにしていた課題。

新たなメンバーの加入だ。

クラークは、近々観光客を装つてとある街に集合し、彼、の活動する夜に勧誘を行うことを提案する。

それを聞き、ビクターは少しだけ慌てた様子で切り出した。

「だがクラーク、俺は、彼、を実際に見た事がないぞ。行動パターンが分かり辛いから、街中の監視カメラをハッキングしないと接触のしようがない」

「そこまでしないとイケないの。彼、本当に用心深くて隠れるのが上手なのね」

加えて、とビクターは、彼、にリーグの情報が洩れている可能性があるかと付け足した。以前に同じ話題が出たときに情報収集を行った際、彼、からハッキングを受けたのだそうだ。ビクターにとってその程度は攻撃にもならないが、この件で、彼、のリーグに対する警戒心の強さは跳ね上がったかもしれない、とのことだ。

「敵に成り得る存在の情報是一片っ端から集めるとの噂だ」

「は、臆病な蝙蝠だな！」

ビクターの言葉を一蹴するようにアーサーが悪態を吐いた。どうやらアーサーは、彼、のことが気に入らないらしく、話題に上がるたびに突っかかってくるのだ。

ビクターの手にかかれればいかに強固なセキュリティも突破できる

ためいくらでも情報を奪い放題だが、これ以上警戒されてはリーグに損害しか齎さない。故に、正当法でいくしかないのだ。

「僕は、彼、程冷静で頭の良い人材はいないと思っっているよ。あのゴツサムシティで20年もヒーローを続けている大ベテランだ。ジャステイス・リーグに足りない部分を補ってくれる、貴重な人材を勧誘したい。異論があれば、挙手を」

無音。

クラークの言葉に、異を唱える者は誰もいなかった。クラークは、漸く全員の同意が得られたことに満足げに頷く。元から好意的であったダイアナやバリーはともかく、中立的だったビクターと反対派のアーサーも納得してくれたようで本当に良かった、と微笑み、組んだ手をパンと叩いた。

「じゃあ、決まり」

「勧誘は全員で行う、でいいんだろう?」

「へー、じゃあ、クラークさんに合わせて、皆でゴツサムシティに集合する感じでもいいの? いや僕は別にいつでも駆け付けられるけど」

「うん、そうだな、着いたら連絡を取り合おう」

「ゴツサム、そういうええ行っただことがなかったわ。旅行ではないことは分かってはいるけれど、楽しみね」

「なら、後で日にちを教えるよ。海が騒いでる、早く現状打破しねえと不味いことになりそうだ」

不満げに漏らされたアーサーの言葉に、和気藹々とした空気が一気に霧散した。

「多分、近々大きなことが起こるぞ」

海は地球の体表面の7割を占めているからか、何か異変が起こる際に真っ先に感知し、知らせてくれる。海底人であるため海と親しいアーサーだからこそ分かる危険信号。

表情筋を引き締める。

「今担当している記事がもうすぐ終わるから、上長にゴツサムでの何らかの取材権を掛け合ってみるよ。もし無理でも、休暇を長めにとっておくから、その時に」

「恋人のために上手い言い訳を考えておくのよ？」

「う、わ、わかってる」

ロイスつてば妙に勘が鋭いところあるからなあ、と呟き、会合はお開きとなった。

去っていく背中を見送り、クラークは1人思案する。

彼、は、クラークが知る中で最も素晴らしいヒーローであり、同時に最も恐ろしい狂人である。何故なら、あの、ゴツサムシティで20年もヒーロー活動を続けているからだ。たった一度だけ、デイリー・プラネットの記者として訪れた際のあの衝撃は忘れられない。ごく平和なメトロポリスの、湾を挟んで向こう側にあのような狂気渦巻く土地があるとは思ってもよらなかったのだ。

平気で警官の汚職があり、平気で危険な薬が横行し、平気で人が死ぬ。何よりも、それが一般市民の常識として染み付いている。表層は確かに煌びやかだ。だがたった一枚薄皮を剥ぐだけで、恐ろしい本性が現れる。

狂気と薬と暴力、汚い金が跋扈する街。

それがクラークにとつての、ゴツサムシティの認識である。

そんな街でヒーロー活動を続けるのは至難の業だ。余程の正義感を持つていなければ容易く心が折れてしまい、余程の狂気がなければ悪に立ち向かうこともできない。

彼、は決して表舞台に上がることはなく、故に世間からの評判は全く良くない。しかし、彼が現れてから今日こんにちまでのゴツサムシティでの犯罪率を統計で見ると、実はほんの少しずつ下がっているのだ。一概に、彼、のおかげとは言いい切れないが、少なくとも要因の一端を担っていることは間違いない。

——だが、彼、の過激な方法に熱狂的なファンがいることも事実。犯罪率は下がっているが、犯罪者の凶悪度は上がっている。投獄と脱獄を繰り返している彼等は殆どが、彼、を圧倒することに固執しており、毎度のように多くの命を犠牲にして、彼、に見せつけるそうだ。

きっとアーサーは、'彼'のこの部分に嫌悪を示しているのだろう。人間であるはずなのに何処か、獣の様な獰猛さ。獣の様であるのに何処か、人間らしい狡猾さ。

まるで暗い路地裏の奥を覗き込む様な心境だ。何も見えない暗闇に、何かあるかもしれないという好奇心で一步踏み出すことの、何と愚かなことか。

つまるところ、'彼'を仲間に取り入れることはそれだけハイリスクなのだ。

「…それでも、」

それでも。

やはり、必要なのだ。

冷静沈着な思考が。超常的な頭脳が。超俯瞰的な視点が。

狂人と紙一重であるからと諦めるには、'彼'は優秀すぎるのだ。

或いは、'彼'を世間に認められるヒーローにしたいという、クラークのエゴだろうか。

漸くクラークは出口に向かって歩き出した。

考えることはあまり得意ではない。一度絡まった思考を解すため、少し散歩してから帰ろうと思いついた。

「うーん…。どうやって説得しようかな。絶対警戒されているし」

ビクターによつて、既に最低限の情報は揃えてある。脅しとして使えないし使いたくもないが、交渉の材料にはなるだろう。

「よし。まずは明日、記事を終わらせよう！」

最前線にして最大級の砦。

人類の希望にして唯一。

あらゆる敵を退け続けた、超常的な力を持つ彼等。

ジャステイス・リーグ。

その最後のピースを求めて、昏く悍ましい街に繰り出そうとしていた。

真っ黒なケープ。

蝙蝠を模したカウル。

機能性と防御力に優れたスーツ。

ゴツサムシテイの闇に潜む影にして、沈黙を守る暗黒の騎士。

——バットマン。

彼を、求めて。

だがヒーローは知らなかった。

今より18年前のある事件、その恐ろしい真相を。

僅かな歯車の歪みが、どうしようもなく大きな齟齬となつて世界に異変を齎していることを。

抗えぬ狂気が、すぐ傍まで近付いていることを。

生命の冒涇者が、小さなきっかけを待ち続けていたことを。

悪夢は、終わっていない。

全てに意味があることを、ジャスティス・リーグはまだ気付いていなかった。

18年前の獣狩りの悪夢と、現在ゴツサムシテイで起きている妙に毛深い人間の惨殺死体に関連性を見出せなかったのだ。

これから先、ゴツサムシテイにて。彼等は、地獄よりも恐ろしい悪夢を体験することになる。



ゴツサムシテイで起きている奇妙な連続殺人。被害者は皆、殺される直前には体毛が異常に伸びていたとのこと。

「なんかの奇病か、はたまた犯罪者共の実験か。現地に行つて確認し

てんじ」

「うーうーん????」

なんとまあつごうのいいこと。

今書いているアメフトの記事は?と問う間もなく原稿を取り上げられ、代わりにゴツサム行きの交通費を握らされたのだった。

暗闇を導く月光

「ごめんダイアナ、待たせたね」

「あら、予定より10分も前よ、クラーク？」

ゴツサムシティ。その最も賑わっている大通りに面しているカフェに、クラークとダイアナは集合していた。開店したばかりだから客が少なく、好きな席を選ぶことができた。

「いいカフェでしょ？仕事仲間が、此処だけはおすすめだと言ってくれたの。会合の次の日にゴツサムシティに来たけど、1日に2回も通っちゃうほど良いところ」

「じゃあ今で…11回目？」

「昨日は3回来たから、12回目よ」

ホワイト編集長に交通費を握らされた5日前。

『例の件でゴツサムシティに行くんでしょ？だったら私も、』

『絶っつっつ対に駄目』

恋人のロイス・レインを説得した3日前。

『丁度ゴツサムシティで仕事が入ったよ、つと…』

仕事が入ったとジャステイス・リーグに伝えた昨日。

『あらクラークさん、おはようございます。今日も仕事、頑張ってください』

『おはようございますアリアさん。実は今日から出張なんです』

そして朝、隣人に挨拶をしてからバスに乗ってゴツサムシティに辿り着き、クラークはダイアナが指定したこのカフェに直行したのである。

「今回は運が良かったな。丁度ゴツサムの事件の取材が長期で入るなんて。ダイアナは仕事大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫よ。ちよつと前から長期休暇を貰ってるの。あと1ヶ月は問題ないわ。注文決まった？」

「コーヒーとサンドイッチかな。ビクターは今日の夜に僕等と合流して、アーサーとバリーは明日の昼に一緒に来るそうだ」

「全員揃うまでは活動を控えましょ。変に動くとも更に警戒されてしま

うでしょうから。注文いいかしらー?」

ダイアナの呼び声に反応したのは若い男だった。物静かな印象を受けたが、ダイアナの注文を慣れた様子で聞き、クラークをちらりと見て奥に引っ込んでいった。流石に12回も通っているだけあって、既に店員とは仲が良いらしい。

「ありがとう、ダイアナ。でも、僕、彼に後ろから刺されないかな。仲が良いんだろう?」

「そうしたら怪我をするのは彼だわ。注意しておかないと」

つい漏れ出た本音に、冗談だと思つたダイアナが冗談で返した。思わず吹き出す。

「笑いすぎよ。本題に入つて?」

「ん、ああごめん。これなんだけど」

カバンから新聞を1部取り出し、ダイアナに渡す。彼女は怪訝そうな顔を隠しもせずに新聞を受け取り、クラークがつけた赤い印の部分を読み始めた。短い記事であるから、読み終わるのに5分もかからないだろう。

予想通りすぐ読み終えた彼女は、綺麗な形の眉を寄せていた。恐らく、クラークの言いたいことを察しているのだろう。

ゴッサムシティで起きている謎の殺人事件。

殺人であれば(他の街では絶対にありえないことだが)ごく当たり前の出来事だが、これは多くの謎を残しているのだ。

被害者は共通して体毛が異常に伸びている。遠くで蹲っていれば、獣と見間違える程に。だがその特徴が一致する人物は、死体が見つかる直前まで発見できない。

そして殺害方法が多種多様だそうだ。刃物で斬られ、鈍器で潰され、何か強い力で振り切られ、或いは焼かれ、銃で撃たれている。

被害者は何故殺されたのか。奇病の蔓延を防ぐためか、はたまた何かの実験の口封じか。

殺害方法が何故被害者によってバラバラなのか。複数犯と攪乱させるためか、複数犯か、そもそも被害者に偶然共通点があるだけで実は全く別件の殺人事件なのか。

「僕が記事を担当する事件の内容だ」

「…そして、バットマンも追っている?」

「大正解」

ダイアナの眉間の皺が更に深くなった。

「へえ?じゃあ、貴方の仕事を手伝っていれば、自ずと彼に近付けるって寸法?」

「え、あ、ちが、違うよ。手伝ってほしいとかそんなんじゃない」

「分かっているわよ、冗談だわ」

「お待たせしました、コーヒーとサンドイッチ。それからダイアナ、君にはいつものを」

「あら、ありがとう」

目の前にコーヒーとサンドイッチが置かれる。コーヒーからは良い香りが漂っており、サンドイッチはみずみずしい野菜が隙間から覗いている。成程、ダイアナが通うだけある。とても美味しそうだ。クラークはコーヒーを飲み、それからサンドイッチを一かじりした。

「うん、おいしい!」

「でしょ?ランチも美味しいのよ、此処」

「値段も相場よりかなり低い。倍の値段を取られたって僕は文句を言わないよ」

「店主の意向ですつて。あの子、きつと喜ぶわ」

店主とは、厨房から少しだけ見えた老人のことである。ダイアナから見れば、誰だって子供同然なのだろう。

「あ、ごめん、話が逸れたね。ええと、とにかく」

バットマンは、ゴッサムシティで起こる全ての犯罪の解決に関わっていると言っても過言ではない程に事件の介入に積極的だ。この事件もゴッサムシティで起きているのだから、捜査に彼が介入しているも何ら不思議ではない。

だがクラークは、何かの違和感を覚えていた。超人的な身体能力と引き換えにあまり機能しなくなった危機感が、警鐘の様なものを発しているのだ。

ゴッサムシティに来る前、集めた資料の中に混じっていた被害者の

写真を見たときから、鳴り響くそれ。

「もしかしたらこれ、人間じゃ手に負えない案件かもしれない」

「…どういうこと？」

「僕もうまく言えない。ただ、こう、うーん、勘というか。腹の底から冷えるような、背筋が凍るような…」

「珍しいわね、大抵の事には動じない貴方が」

ダイアナが紅茶を一飲み。その様子を何となく見つめたまま、クラークはこの事件について考える。

たった一瞬感じた、それだけだった。だがそれをどうしても見逃すことができなかった。暗闇に見つめ返されるような、何とも言えない恐怖を。

その恐怖の根源が何処にあるのかは分からない。だがそれは、ダークサイドと対峙した時の様な緊張感をクラークに齎した。いや、もしかすると、もっと。

「そういえば、なんだけれど」

「うん？」

「ゴツサムシティ、何か良くないものがあるわ。私もはっきりとは感知できないけれど」

「本当かい？ダイアナが言うなら、間違いないだろうけど」

「ええ。もしかすると、その良くないものが、その事件に関係しているのかも。あまり大きくない気配だけど、確かに人間の手には余りそうだわ」

「そうか。なら、事件を追っているバットマンや警官が危ないかな」

「ベストタイミングで手を貸せば、彼に好印象を与えられそうね」

少しだけ残ったコーヒーを飲み干せば、ダイアナも丁度良くスコーンを食べ終えたところだった。同時に立ち上がり、同時に財布を取り出す。

「僕が払う。素敵な場所を教えてくれたお礼さ」

「今度は皆でどう？その時は私が払うわ」

「はは、皆で来るのは賛成だ」

おつりが出ないようぴったり支払って、外に繋がるドアへと手を掛

けた。

「ダイアナ、今からデートか？」

「あら、そんなところよ」

「ちよつと、ダイアナ」

そんな彼らを呼び止めたのは、あの若い男の店員だ。あまり手入れされていない黒髪から覗く右の瞳は、暗い翡翠色をしていた。

クラークは直ぐにデートを否定する。彼にはロイスという心に決めた女性がいるのだ。ダイアナは大切な仲間であるが、そういった関係ではない。：ただ、ダイアナは彼の反応を面白がっているだけである。勿論理解しているが、心臓に悪い。

店員がダイアナの冗談をどう受け取ったかは定かではないが、彼は幾つかの観光名所を教えてくれた。犯罪率が異常に高いこの街でも、安全に楽しめる場所だそうだ。

ダイアナが興味深そうに聞いている中、彼はふと、例の事件について愚痴を漏らした。そのせいで観光客が減り、客足も遠のいたと。事件が起きるごとにそうなってしまうのは最早日常茶飯事であるため、それ程ダメージはないと付け足して。

「あ、あの。少しだけいいですか。僕、実はデイリー・プラネットの記者です」

「あ、記者の人だったんですね」

「ええ、それで、その事件：体毛が獣の様に伸びている被害者、多種多様な殺害方法。それを、追っているんです」

クラークの言葉を聞いた途端、店員は顔を思いつきり顰めた。顔の殆どを髪が覆っているにも関わらずその様子はつきりと分かった。

どうやら彼の嫌な思い出に触れてしまったらしい。クラークが急いで謝ると、彼は軽く首を振って俯いた。

「：その、僕、その事件の1つの、第一発見者なんです」

「え、そうなのかい!？」

「はい。警官に朝から晩まで事情聴取されたし、あの蝙蝠の男と何時間もにらめっこ。うう、辛かった」

「あー：、それは、ええ、辛いわね」

ダイアナが同情の目を彼に向ける。何とも言い難い、気まずい空気が流れた。

クラークとしては、このまま彼を取材してしまいたい気持ちが心中の大半を占めていた。だが既に、警察やバットマンのみならず、ゴツサムシテイの取材班に追いかけて回されているのだろう。その心労が見て取れた。

疲れ切っている彼に、更に別の街の記者の取材を受けてほしいという都合の良い願望を受け入れてもらうのはとても心苦しい。どうしたものかとうんうん唸っていると、彼が控えめにクラークを見つめた。

「…良ければ、取材を受けましょうか？」

「あ、その、此方としては有難い。でも君、良いのかい？」

「構わない。あ、構いません。僕としては、今のこの状況こそ好ましいものだ」

「確かに、デイリー・プラネットの発信力はそれなりに強いわ。もしかしたら、事件の早期解決に繋がるかも」

「…、あ、うん。そんな感じだ。ただ今日は夕方までシフトを組んであるから、それが終わってからになります」

「すごく助かるよ、本当にありがとう！」

時間がきたらこのカフェを訪れることを約束し、クラークとダイアナは大通りに出た。

まさかこんなにも早く第一発見者を取材できる、かつ取材に協力的だなんて、運が良い。バットマンとも顔を合わせたときだ。

「運が良すぎて怖いくらいよ。誰かの仕込みかしら」
「考えたくないな」

大通りを走る車の群れを横目に歩く。これからクラークはホテルに行き、時間まで取材のための書類を整理しようと思っている。対しダイアナは、クラークの取材が終わるまで、店員から教わった観光名所を回るつもりだそうだ。

その後、ビクターと落ち合うことにしよう。その一言で会話を区切り、ダイアナと別れようとしたとき。

近くの車道を、1台の車が通った。

超がつく程の高級車である。ゴツサムシティでそれを乗りこなす者は限られており、加えてクラークの動体視力では運転席にいた人物を難なく確認できた。

ブルース・ウェイン。

大企業‘ウェイン・エンタープライズ’のオーナーであり、アメリカで1、2位を争う程の億万長者。18年前から慈善活動を積極的に行い、ゴツサムシティの発展に大きく貢献している人物だ。ただ性格に少々難があり、それが彼の評価を下げている。

ケチのイメージが纏わりつく金持ちだが、ゴツサムのために金を落とす。しかし他人を寄せ付けない警戒心の強さと、本人の病弱さ、オーナーでありながら企業の経営に殆ど口を出さない無関心さから、クラークは彼を変な金持ちの道楽者程度にしか認識していなかった。少なくとも、彼の裏の顔を知るまでは。

「どうしたの?」

「さっきの車、ブルース・ウェインが乗っていた」

「あら。気付かれてないと良いけど」

「ビクターが、彼の情報網は舐めない方が良い、’って言っていたし、案外気付かれているかもね」

「考えたくないわ」

想像もつかないような真実。

数年前の自分に、‘冷酷無比なバットマンの正体はブルース・ウェインである!’と言つても、きつと信じてはくれないだろう。



「ごめん、お待たせしました。改めて、デイリー・プラネットのクラーク・ケントです」

「ご丁寧にも。どうぞかけてください」

約束の時間。

言われた通りに訪れたカフェは‘CLOSE’の看板が掲示されて

いた。勝手に開ける訳にもいかず、とりあえずノックを数回。直ぐに扉が開き、中からあの店員が顔を出した。

店主からはカフエを取材の場にする事について許可を取っている。有難いことにコーヒーまで用意してもらい、クラークはチップと共に心からの感謝の言葉を伝えた。

「：取材を受ける、と言っても、僕の持っている情報は既に全部マスクミヤ警察に明け渡しました。目新しいものはきつとないですが」

「構いません。僕としては、世に出た情報は書き手の思想が混じっているものであり、真実から僅かでも遠のいていてと思っています。だから、なるべく当事者の口から体験を聞きたいのです。：あ、でも、トラウマがあったりするのなら、絶対に無理をさせません。遠慮なく拒絶してください」

「きよ、拒絶って」

店員に漂う緊張感が少しだけ和らぐ。クラークの冗談めいた口調が功を奏したようだ。

とはいえ、事件の第一発見者であるならば、確実に被害者の死体を目にしてる筈だ。その光景がトラウマになっていないとは言えない。慎重に質問を選びながら、クラークは口を開いた。

「第一発見者と言いましたが、被害者のみ目撃したということでしょう。正しいでしょうか。犯人が今まさに！つてところを見た訳じゃないですよね」

「あ、はい。1ヶ月前くらいのことです」

早朝、カフエに出勤するために家を出て、その先の路地裏を何となくに覗いた時。店員は直ぐに後悔したという。

異常に毛深い体毛が、夥しい程の血に塗れていた。コヨーテかアライグマか、それにしても大きいなど考えていたら、人間の手足がはつきりと目に映り、次いで服を身に纏っていることに気が付いたという。

「その後は直ぐに通報しました。店主に事情を話して休暇にしてもらって、それから夕方まで聴取のためずっと警官に囲まれています。思い出すだけでも疲れる」

「ああ…それは何とも…」

心拍数は正常。一定を保っている。

嘘を言っていないことを確認し、手元の資料を見る。恐らく彼が目撃した被害者は、最初の事例が確認されたから3件目の事件のものである。当時の記事との齟齬も見当たらなかった。

「あの死体、妙な傷口でしたよ。確かに刃物で斬られたような傷だったんですけど、爛れていたんです。傷口に態々薬品を塗った様な、いや、何かしら肉体が拒絶反応を起こして？とにかく、普通に斬っただけじゃ絶対にそうならない筈なんですけど」

「え、傷を直視したのかい？」

「はい。それに凶器もかなり特徴的です。普通のナイフや木を切る鉋じゃ全然足りないぐらいの、それこそ肩に担ぐくらい大きくて重い大剣じゃないと、人間を両断出来ないです」

「ま、待つて待つて待つて。やたらと詳しいね??」

あ、と間の抜けた声が聞こえる。店員は話の展開についてこれていないと判断したらしく、丁寧な説明を始めた。

「僕、昔は獣を狩猟する仕事をしていて。だから獣の死体は見慣れているんです。その、人間と思わなければ問題ないです」

「はあ」

「傷口についても、僕だけじゃなくて警察やバットマンのお墨付きです。正当な検死の結果ですので、ご心配なく」

「バットマンも駆け付けましたか」

「早朝だったので、少しだけ。でも夕方近くに警察署に押しかけて、僕に質問しては警官と話して、を数時間繰り返し返していました。大勢の警官から解放されたと思った途端にそれだ。本当にうんざり」

「あ、あはは」

丁度バットマンの話題も出たところで、クラークは方向性を変えてバットマンに関する質問を投げかけた。

「バットマン。ゴッサムシティのヒーローですね。ゴッサムシティでの事件だから、当然彼も追いかけていると思っていました」

「実物にあつたのは初めてでした。こう、凄く威圧感があつて。でも

不思議と親近感が：あ、いや、なんでもない。向こうは僕が犯人である可能性も視野に入れていたみたいですけど、結局疑いは晴れて、夜も更けた頃に解放されました」

「彼は過激な方法をしばしば取るらしいですが、何かされませんでしたか？」

「いえ、特に。彼が過激なのは犯罪者に対してのみであって、僕のような、疑わしいだけの人間には暴力を向けてくることはないです。会話の中で感じましたが、彼はとても理性的な人だ」

ふむ、と唸る。バットマンをジャスティス・リーグに引き入れるにあたり懸念していた暴力性は、現時点では問題ないように思えた。

理性的、という点にも好印象を覚える。世界で最も偉大な探偵の一人として見做されることもある彼は、頭の回転が非常に速いのだろう。此方が敵意を見せず対話に徹しようという姿勢を見せれば、話くらいは聞いてくれるかもしれない。

問題はどうか邂逅するか、である。ブルース・ウェインとして振る舞う間は決して近付けないだろうし、バットマンとして活動している間は決して動向を掴ませないだろう。さて、どうするか。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ、ごめん！少し考え事をしていました。ええと、そうだ。今回の事件で、何か思うことはありませんか。時間も迫ってきているので、これで最後の質問にいたします」

「はい、分かりました。…とにかく、早く解決出来る日が来ることを願っています」

最初に確認された事例は、郊外にある廃聖堂の近く。その次が人の立ち入らない港。そして店員が目撃したそれ。一番新しい事件は、4日前に発見された8件目のものだ。

犯行そのものを直接見た者はおらず、監視カメラにも映らない場所に限定されている。加えて、被害者は体毛が異常に伸びているという共通点を抱えているにもかかわらず、直前まで共通点が当てはまる人物は見つからないのだ。殺害方法までバラバラ、目的も不明。気味の悪い事件だ。

「僕もです。きつと、必ず」

「…ありがとうございます」

店員が僅かに微笑み、すっかり冷めたコーヒーを飲み干した。少し苦そうな顔をしていたのは見なかったことにして、クラークは席を立つ。残念ながら目新しい情報は無かったが、十分に話を聞くことが出来た。

「さて、本日はありがとうございます。長くお時間をいただき、感謝いたします」

「此方こそ、助けになれたのなら幸いだ。あ、幸いです。良い記事、書けるといいですね」

「はは、頑張ります。今後此処には客として来る予定ですので、その時はよろしくお願いします。僕の友達と一緒に」

「ありがとうございます。店主も大喜びだ。…、あ、」

不意に店員が声を上げた。クラークが振り返ると、眉を顰めた彼が声を潜めて言葉を発した。

「その、役に立つかは分かりませんが」

「おや、何か？」

「バットマンと仲の良い、ゴードンという警官がいるんです。その人がふと零した独り言なんですけど」

ゴードン、と言えば、ゴッサムシティ警察の本部長がその名前だった筈だ。あまりにも捜査に行き詰った場合、バットマンの力を非公式に借りているとの噂だ。となると、バットマンと店員との面会に立ち会ったのは彼なのだろう。

「バットマン、今回の事件に妙に積極的だそうです。常より警戒が強いとか、度が過ぎる程に慎重だとか」

「じゃあバットマンは、この事件をかなり危険視しているということですか」

「みたいです。彼なら、事件の全てに関わっている筈ですから、もし会えたら聞いてみるのも手かもしれないです」

「運が良かったらね」

最後にとても良い情報を得た。バットマンがこの事件に熱心なら

ば、いつか確実に彼と邂逅することが出来る。懸念事項が解消されて、クラークは少しだけ気分が上がった。

しかし浮かれてばかりいられない。バットマンの捜査に対する姿勢が常と違うのなら、彼もダイアナと同じような良くないものを察知しているのかもしれない。人間の手に余ると予想されるそれを。

そしてジャスティス・リーグとして、これ以上の被害を看過出来ない。人外の力が関与しているのなら猶更だ。クラークは改めて気を引き締め、店員に別れを告げ——ようとして、店員の名前を聞いていないことに気付いた。

「ああっ……ごめんなさい！名前、窺っても!?!本当は取材の最初に聞く筈だったのに」

「あ、大丈夫です」

「本当にごめんなさい。名前は基本的に匿名で、記事には決して載せませんが、念のために」

年下に醜態を晒してしまい、クラークは顔が熱くなった。ものを忘れ、直ぐに慌てるのは己の悪癖である。店員に止められるまで、申し訳ないと何度も頭を下げた。

完全に緊張感を失った店員は、ダイアナと話していた時の様な気安さを漂わせていた。どうやらクラークの大人の余裕と引き換えに、心の距離は縮まったらしい。

「ああ、僕の名前ですね」

あまり手入れされていない黒髪の間から覗く暗い翡翠色が、2、3度瞬いた。

「月光です」
ムーンライト

暗闇へ誘う星明り

ビクターは1人、ゴツサムシティの裏通りを歩いていった。

金属の身体が露出せぬよう、パーカーのフードを目深に被る。手はズボンのポケットに入れ、視線をやや下に向けながら、人の間を縫うように進む。

此処がゴツサムシティでなければ、まず間違いなく目立つ怪しさである。

だが周囲の人間は今のビクターと似たような出で立ちの者ばかり、寧ろスーツを着ようものなら確実に浮くだろう。何か疚しさを隠すような、コソコソとした装いこそが、この街で上手く生きていくコツなのである。

例えば表通りであっても、郊外に程近い場所では常に命の危険が付き纏う。故に1人歩きなど言語道断。夜更けに出歩くなど論外である。

それがゴツサムシティであり、ビクターが住み慣れた街の概要であった。

「…む、もう少しか」

今夜、クラークとダイアナに合流する約束だ。それまでまだ時間があるため、ビクターはバットマンが追っている事件の現場へ向かっていた。

謎の殺人事件。被害者は揃って獣の様に毛深く、殺し方は多種多様。

クラークの仕事の一助にもなるとして、ビクターは情報収集に動んでいるのである。

「ハッキング、バレていないといいが」

ただ、その方法はかなりグレーだ。監視カメラは勿論のこと、警察にまでハッキングをしかけ、有用な情報を拝借しているのだ。

世界的なヒーローとてただの部外者でしかなく、そんな存在に情報を渡せる筈もない。ただビクターの場合、あらゆる電子機器を支配下に置いていってと言っても過言ではない。証拠も痕跡も残さず、するりとファイアウォールを潜り抜けられる。此方側が白状しない限り、少

なくとも警察にはハッキング行為を摘発されることはない。汚職に塗れたゴツサムシティの警察にその様な頭があるかは、全くもって定かではないが。

だが。

警察に察せられずとも、バットマンであれば気付くかもしれない。彼自身も電子機器の造詣が深く、使用する(最早兵器とも言える)ガジェットも最新型。噂では、自ら作成しているとも。

ビクターは確かに電脳世界の王であるが、まだ若い。可能性が限りなく低くとも、何処か見落とした部分があるかもしれない。そして、バットマンはその見落としを見つけるのがとても上手いのだ。僅かな証拠からジャスティス・リーグを暴き出し、更に警戒を強めるだろう。

最悪、謎の殺人事件との関係性を疑われるかもしれない。そうなつてしまえば最後、ジャスティス・リーグは敵と看做され、きっと今までにない窮地に追い込まれる。

此方はあくまで彼を仲間に取り入れたいがため、またクラークの仕事の手伝いのため事件を追っているのだ。

「……………ん？」

ふと、違和感。

ジャスティス・リーグにバットマンを引き入れることが決まった次の日、クラークに新しい仕事が舞い込んだ。その仕事が、バットマンが追っている謎の殺人事件の記事を書くこと。

事件を追っていれば、自ずとバットマンと接する機会が得られるだろう。

「偶然か?にしては都合が良いな」

首を捻る。偶然と言えばそれまでなのだが、どうにも違和感が拭えない。

そもそも、クラークは元々担当していた記事を取り上げられ、今に至るのだ。編集長との仲は良くないが、嫌がらせをされる程悪くもないと彼は言っていた。他の者に任せれば良いものを、態々クラークに任せるなど。

もしや、仕組まれた？

だが誰に。

いや、でも、しかし。

……、盗聴器の類は仕込まれていなかった。メンバーの誰かが外に漏らす筈もなく、ならばきつと偶然なのだ。

ビクターはそう結論付け、歩幅を少し広げた。頭の中の違和感を拭い去り、数秒後には何事もなかったかの様に。

すれ違う人々に目をやることもなく、少しずつ奥へと。

暗闇へと。

もう少しで目的地に辿り着く。そう思った時、僅かな歌声が聞こえた。

近くの建物で、合唱をしているらしい。よく耳をすますと、パイプオルガンの音も聞こえた。

直ぐに周囲情報を検索する。

右手側の建物が、どうやら廃聖堂のようだ。最近買い手が見つかり格安で譲られたそうだが、なるほど、合唱団の練習場となっているらしい。生憎とクワイアには明るくないビクターだが、かすかに聞き取れたラテン語から、それが賛美歌の類であることは理解出来た。

足が自然と廃聖堂の方へ向く。事件現場から程近い場所であるから、目撃者と会話が出来る可能性がある。第一発見者が、近くの建物を拠点とする合唱団の一員であるとの情報もある。

何より、その歌をもう少し聞きたかったのだ。

或いは、水の滴る様な微かな導きだったのだと。

全てが終わった後、ビクターはこの歌をそう形容した。



古びた扉に力を入れると、予想に反して音もなく開いた。隙間に身体を押し込み、辺りを見渡す。埃1つない、よく手入れされた内装が目に入った。

少し奥には壁一面のステンドグラス。買い取りの際に改修したら

しく、そこだけ真新しい印象を受けた。夜空に輝く星々、それに祈る何かの生物。

合唱団は、そのステンドグラスの前で歌っていた。老若男女、果ては服装まで問わずバラバラな人物が20名程。指揮者の降る腕に合わせ、一心不乱に声を出している。

ほう、と息を漏らす。荘厳な雰囲気には圧倒され、その世界観に入り込む錯覚に陥る。美しい夜空、輝く星、祈りを捧げる美しい娘。賛美歌から、そのような風景が見て取れた。

「あら、あら、あら」
「うわっ」

突然かけられた声に思わず飛び退く。何事かと思いを巡らせたが、直ぐに己が不法侵入をしかしている事に気付く。

しまった、と己の醜態を恥じ、ビクターは目の前の人物に謝罪の姿勢をとった。

「突然すまない。その、綺麗な歌声だったから」

「あら。ふふ、嬉しいです」

だが目の前の人物は、ビクターに対して特に何も咎める気が無いようだ。小さな桃色の唇が、少女の様な微笑みを形作っている。

「此処は合唱団『聖歌隊』の拠点です。いつでも、どなたでも、歓迎しておりますわ。わたくしは僭越ながらリーダーを務めております。どうぞよろしくね、サイボーグさん？」

「…知っていたのか」

「大変失礼ですが、袖口から機械の腕が見えたので。カマをかけましたが、引つかかってくれて嬉しいですよ」

「やられた」

「ふふ」

ビクターよりずっと小さい、それこそ少女と形容しても問題ないであろう彼女は、ビクターの手を躊躇いなく握って椅子へと案内した。特徴的な形の目隠し帽は少女にミステリアスな印象を与え、白で統一された服は聖職者の様な出で立ちに仕立て上げられている。

間違いなく何処かの宗教に属する者。下手をすれば無茶な勧誘を

されるかもしれないと、ビクターは気を引き締めた。

「この歌、本当は演奏も加わるのです。ですが諸事情により、皆様で集まる機会が減ってしまいました、ええ」

「…とても綺麗な歌だと思う。演奏も加われれば、もっと素敵なのだろう」

「ええ、ええ！その通りです！美しい星の娘を讃える歌。それが素晴らしい訳がありません！」

小柄な少女はビクターに物怖じせず、ニコニコと笑っていた。顔の下半分しか露出していないが、かなり上機嫌であることが容易に窺えた。

「ジャステイス・リーグ、サイボーグ。貴公が此処にいるという事は、何かの事件かしら？それとも、プライベート？」

「リーグとしての仕事だ。歌に惹かれたのも事実だが」

「まあ！世界を守る皆様、どうもお疲れ様です。わたくしに協力できるものであれば、尽力いたします」

と、歌が不意に止んだ。クライマックスを終えたらしく、歌い終わった人々がバラバラと動き出した。

「皆様方、今日も素敵なお褒め歌でした。熱心に取り組んで頂き何よりです。さあ、お帰りになって？」

少女の言葉に、彼等は手早く荷物を纏めて出口へと歩き出した。会話が異様に少ない事が気になるが、気にしている間に、すっかり皆出ていってしまった。

「さて、ミスター・サイボーグ。何をお聞きに？」

ハッと当初の目的を思い出す。頭の中で手早く情報を纏めつつ、少女に簡潔に説明した。

この廃聖堂付近で起きた殺人、それを皮切りに連続する奇妙な事件を。

ビクターの話を、相槌を交えながら聞く少女は、話が終わった途端腕を組んで悩み出した。1ヶ月半も前の話だ、正確に思い出すのに時間がかかるだろう。

「あの件ですか。わたくしもずっとずっと悩んでおります。全く、何

処の誰が何をしでかしたのやら」

「第一発見者は近くの建物を拠点とする合唱団の一員だと。此処で間違いないか？」

「ええ、合っております。先程の、指揮者を務めていた女性の方です」
この聖堂は少女による相談所も兼ねているらしく、合唱団の殆どが彼女に悩みを打ち明け、抱える者だそうだ。

相談所の噂を聞きつけた女性が仕事終わりの夜更けに聖堂を訪ねたところ、近くで惨殺死体を発見してしまったそうだ。

「歌はあまり上手ではありませんが、指揮がとても素晴らしい方なのです。ええ、ええ。あの時の発狂っぷりは目を見張るものがありました。死体を発見した後直ぐに此処へ駆け込み、わたくしに助けを求めたのです。落ち着くまでずっと背を撫でていました」

酷く震えて、小さく縮こまる。ただ恐ろしいと涙を流す。

最悪なのは、死体の傍から立ち去る足音を聞いてしまったところだ。恐らく犯人のもの。姿など見てはいない。足音だけ。

女性は1ヶ月半経った今も怯えているそうだ。犯行を目撃されたかもしれないと思った犯人が、いつか目撃者の己を口封じのため殺しに来るのではないかと。

「彼女は日が沈むまでに帰宅します。日が昇るまで家でじっとしています。可哀想で、何とかしてあげたいと思っています。本当ですよ？わたくしも、事件の早期解決を望んでいるのです」

「…尽力しよう。いや、我々が何かしなくても、ゴッサムの闇の騎士が解決しそうではあるが」

「あら、そう思うのなら、何故この事件に関わるのです？」

「…企業秘密だ。黙秘権を行使する」

「ふふ、承知しました」

ビクターが入手した情報によれば、この付近で発見された死体は見るも無残に切り刻まれていたらしい。

体毛が伸びているためか常人よりずっと斬りにくい被害者を、惚れ惚れする程の鮮やかさで斬ったのだろう。刃先にブレはなく、完璧な太刀筋。凶器は恐らく刀だろうと結論付けられていた。

「警察によれば、刀傷らしいですね。やはりカインハーストの阿呆共かしら。あら失礼。刀なんて持ち込めば直ぐ気付かれそうなものですが」

「どうだろうな。ゴッサムは中心地から離れれば離れる程、犯罪者が増える。裏ルートならいくらでもあるだろうな」

「そればかりは警察の怠慢です。嘆かわしい」

「警察だけじゃ手が回らないから、バットマンという存在が生まれるのだろう。君も、夜道は気を付けた方が良く。いや夜道だけではなく、不法侵入もあり得るか」

「その点に関しては問題なく。ご心配には及びません」

窓を見ると、入り込む光がかなり弱まっていることに気付く。もう直ぐ日が落ち、夜が来る。クラーク、ダイアナとの待ち合わせの時間まで余裕はあるが、事件現場の確認もある。そろそろ聞き込みを終えても良いだろう、と判断した。

「すまないが、そろそろ行くこうと思う」

「いいえ、構いませんよ。またいつでもいらしてくださいね。…もしや、これから現場に行くので?」

「そのつもりだ」

「む、む、む。残念ながら、証拠らしい証拠は残っていない筈です。1ヶ月半前のことですし、目ぼしいものは警察やバットマンが押収していききましたから」

「理解している、念のためだ」

「そうですか。ご武運を。…あ、やっぱりお待ちになつて?」

既に足を踏み出していたビクターを、少女は呼び止める。

半歩分だけ振り返れば、少女は口許に笑みを浮かべたまま問いかけてきた。

「バットマン、という存在について、貴公の意見を伺っても?」

「…構わないが、何故?」

「合唱団の方の中には、彼を暴徒と同義にしている方もいらつしやいます」

少女としてはバットマンが犯罪者か否かは至極どうでもいいこと

であるらしい。結局は赤の他人であるためだ。しかし彼女が相談に乗っている者の中には、バットマンに怯えている者もいる。ゴッサムシティに余計な混乱を招き入れる不吉な影として。

偶にバットマンについて相談を受けるそうだが、彼女自身はバットマンのことを良く知らないため、的確な助言が出来ずに困っているという。

「わたくし、2ヶ月前に此処にきたばかりなのです。ミスター・バットマンのことなんて風の噂程度にしか知らないのです、如何様にも出来なくて困っているのです。ジャステイス・リーグであれば、何か有用な情報を持っているのではないのかと判断いたしました」

「と言っても、我々ですら世間での共通認識程度しか知識がない。俺の力を使えば直ぐだろうが、あまり使いたくないのが本音だ」

「此方としては、彼が害のある存在でないことを判断できればそれで良いのです」

シユン、と擬音が付きそうな程しよぼくれてしまった少女は、きつと隠された瞳をビクターに向けている筈だ。

「彼は確かに暴力的で手段を選ばない。だがそれは無辜の市民に害を及ぼす悪にのみ向けられている、と俺は判断する。彼に怯える人間は、きつと疚しい過去を抱えているのだろう」

「概ね同意いたします。むう、ですが、何故この聖堂を今も嗅ぎまわっているのか、」

「…待て、それは初耳だ」

「あら？」

知らなかったのか、と言わんばかりの驚きようだ。小さな手を口に当て、近くのビクターを見上げていた。きつと少女は、ビクターがその事実を知っていて此処に訪れたと思っていたのだろう。

「人間の心理において、一度逃げたとしても必ず現場に戻る習性があります。彼は、ここに犯人が戻ると予想して張り込んでいるのかしら」

「若しくは犯人に近い者が此処に出入りしていると踏んでいるか、だな」

ビクターが放った何気ない一言は、少女の気分を害してしまったようだ。

「ま。カインハーストの様な腐った血狂い共なんて出入り拒否です。失礼。合唱団の誰か、或いはわたくしが怪しいと？わたくし、獣を狩っていないので全く無関係ですのに」

少女は憤慨した様子で腰に手を当てた。疑われているのだ、怒っても無理はない。

「同じ事件を追っているんだ。きっといつか彼に会うだろう。その時に真意を聞いてみよう」

「ありがとうございます。さて、引き留めてしまい申し訳ありません」

ス、と少女が前に行き、閉まっていた扉を開けた。両開きの扉の、右側だけ。

一人が通れる隙間が出来たら身を引き、ビクターに向かって笑いかけた。

「武運を、ミスター・サイボーグ。ジャスティス・リーグ諸共折角引き寄せたんですから精々役に立ってほしいものですが、貴公の成果が、実りあるものでありますように」

花が咲いたような笑みだ。ビクターは、怖がらないどころか積極的に協力してくれた彼女に感謝をしつつ、意気揚々と扉をくぐった。

「君達が少しでも早く安心できるよう、近況はまめに伝えようと思う」

「まあ、嬉しいです。どうかお気を付けて」

クラークとダイアナとの約束の時間まで、まだ余裕がある。大丈夫だろう。

少女が扉を閉めるところを確認して、ビクターは少し駆け足で現場へと向かった。その足取りは何処か軽やかだ。その原因はビクターにも分からない。分からないが、きっと少女の驚異的な洗脳能力のお蔭だろう。

未知なる神秘の耐性を全く持たないビクターは、少女から滲み出る神秘の残骸ですら、猛毒となるのだ。軽い足取りのまま、とうとうビクターは駆け出した。その表情は何処か晴れやかで、すがすがしいものであった。

それは己の事を怖がらないでいてくれた少女の、あ、うえ、ぎ、いう。「さて、さて。ちよ〜つと急がないとマズくなつてきましたしい。他の狩人、殺つとく選択肢も入れておきましょうか」
暗闇に融け、微笑むものは誰であろうか。



何もない事件現場。証拠らしい証拠が見つからず撤退するビクターを、暗闇から見つめていた者が1人。

周囲の影に同化するように紛れていたその者は、ただじつと、何をすることもなく壁に張り付いている。だがその目にはめたコンタクトレンズは、随分前に開発した録画機能付きの超高性能カメラ。拠点のサーバーにデータが送信されたことを確認し、とうとう壁から離れて移動し始めた。

ワイヤーを射出しビルの合間を駆ける。その度に黒いケーブルが音を立ててはためき、翼の様に広がる。

黒で統一された武骨な装備は、凶悪な犯罪者をねじ伏せるのに役立つ。

蝙蝠の様なカウルは無二のシルエットを生み出し、見た者に対して恐怖を与えることだろう。

バットマン。

ある程度離れたところで、ビルの屋上に着地する。グラップネルガンを軽く見て、問題なく動作することを確認したところで、聖堂の角度をちらりと向いた。だが直ぐに視線を逸らす。体中を蛞蝓が這いずり回るような強烈な嫌悪感が全身を駆け巡るのだ。何の変哲もない、強いて言うなら外見が廃墟同然であるだけの聖堂である筈なのに。

否応にも思い出すことがある。18年前の、あの。

頭を軽く振って、バットマンは再び駆け出した。彼は今回の事件に、あの聖堂にいる存在が深く関係していると確信していた。丁度、メタヒューマンの集いであるジャスティス・リーグもゴッサムシティ

を訪れている。彼等を利用して、おびき寄せようと画策しているのであった。

約束を、果たすため。

ゴツサムシテイの夜は、まだ明けていないのだから。

暗闇を切り裂く刃

夜も更け、月が真上へ上りきった頃。

波の音に紛れて何かが這い上がる。ザパン、と軽快な音を立て、海から現れたる1つの影。

極限まで鍛え上げられた肉体を魚の鱗の様な鎧で包み、滴る海水を豪快に払い落とすその者。

「かーっ。辛気臭いな、この街は」

アーサーは悪態をつきながら腰にぶら下げていたビール瓶を開栓し、一気飲み。気を紛らわせる時は、いつも酒を飲むのだ。

ゴツサムシティ、外れの港。無人のそこはアーサーにとって都合の良い場所であった。

車、バス、飛行機、電車、現代の乗り物は彼にとって窮屈に過ぎる。そして何よりも遅い。水の中を高速で移動できるアトランティス人の彼はどうしたって慣れず、こうして人気のないところを態々選び、上陸したのである。

と、紫電が走る。

目立たぬ様、しかし確かに存在を主張するようにアーサーの目の前を通り過ぎ、1人の青年の姿が現れる。超高速での移動が可能なメタヒューマン、フラッシュユことバリーである。

「あ、お疲れ様。漸く会えたよ！ゴツサムシティ5周くらいしちやっただ。途中でクラークさんに会えたからついでに挨拶してきた！僕の用事に合わせてもらってごめんね、僕も仕事があつてさ、あの上司中々解放してくれないんだよ。僕よりせっかちさ。うん、ホント。でも結果として集合時間早まって良かったね！バットマンに会えるの楽しみだなあ！あ、それと、んむぐっ」

「落ち着けこの。早すぎて聞き取れねえ」

出会い頭のバリーのマシニングトークは、特に気が滅入っている今は精神に来るものがある。アーサーは彼の口を押さえ、無理矢理黙らせた。

「ふは、息が出来なくなる！ところでアーサーさん、調子悪い？」

「……………少しな」

「クラークさんに、人外の存在がいるって忠告されたんだ。そのせいかも」

「ふうん。ま、このくらい、相手には良いハンデだろうよ」

と、言いつつ、アーサーの表情は険しい。若輩の前で弱っている姿を見せる訳にもいかないと、気を引き締める。顔に刻まれた皺が更に深くなるのを自覚しながら、遠くの摩天楼を睨み付けた。

回遊中、ゴツサムシテイに近付くにつれて強くなる何かの気配。随分と遠くにいる様な、或いはすぐ隣にいる様な曖昧なもの。囁き、滴り、啓示。どれにも当てはまらぬそれは、何かの言葉に似た音であった、と思う。

気味の悪い。アーサーは心の中で吐き捨て、纏まらない考えを思考の外へ丸投げした。

ずっと昔、もう声すら臙気な母の声、肚の中にいたアーサーに語りかけていた言葉がある。

——…呪いと海に底はなく、故に全てを受け入れる……

ともすれば、それは母の声ではなかったのかもしれない。もっと概念的なもの。それこそ、海の様な。

「だーっ。止めだ止めだ。ごちゃごちゃと考えるなんて俺らしくねえ」

手入れのされていない髪をかき上げ、空になった瓶を遠くへ放り投げた。

「わっ、ポイ捨ては駄目だよ！」

「知るか」

後少しでコンクリートに激突、するところで、バリーが瓶を危なげなく掴み取る。

そのまま姿が掻き消えた、と思っただけなのに現れた。だがその手に瓶は握られておらず、何処かのゴミ箱に捨ててきたことが容易に窺えた。

「ポイ捨てされたゴミが巡り巡って海を汚すんだ、それでも良いの」「良い訳ねえだろうが」

「…やっぱり調子悪そうだ。今日はもう休もう」

本来ならバリーの仕事の都合上、2人のゴツサムシティ到着予定は次の日の昼頃である。しかし予定より早く全てが片付いたため、これから他のメンバーと合流し情報交換を行うつもりだ。

しかしバリーはアーサーが本調子ではないことに気付き、休養を提案する。どうせ時間が早まったのだ、その分を自由に使っても問題ない、と判断したのだ。

他のメンバーに事情を話せば、快く提案を受け入れてくれるだろう。そう思っていたのだが、しかしアーサーは頑なに首を縦に振らなかった。

「問題ねえと言っている」

「いやありまくりだよ！ポイ捨てなんて基本絶対にしないよ、アーサーさんは。頭が回らない程気が滅入ってるってことでしょ」

成程、よく観察している。とアーサーは妙に感心した。

同時に目で見分ける程に参っているのかと苛立った。この陰気臭い街にいる、何か、のせいで己が振り回されているのは酷く癩に障る。

善は急げ、とも言う。バットマンをさっさと仲間に取り入れ、正体不明の気配を消滅させてしまえば万事解決だ。

アーサーは己がバットマンを、臆病な蝙蝠、と揶揄する程に嫌っていた事実を棚に上げ、休ませようとするバリーを押しつけてズンズンと進んだ。

「待つて！というより何処行くの」

「集会所だ。こつちだろ」

「違うよこつちだよ！本当に休まなくて大丈夫？」

「ああ」

バリー曰く、クラークは夕方に取材した分を纏める作業があるらしく、先ずダイアナとビクターと合流するそうだ。クラークはどうも、謎の殺人事件についていつもより使命感に燃えている様で、原稿を書くのに夢中になっているとのことだ。

その状態でよくクラークと会えたな、と場違いな感想を抱きなが

ら、アーサーはバリーの話を半分だけ聞いていた。

「あ、何で僕が缶詰め状態のクラークさんに会えたかというとね、」

「ベランダにでもいたんだろ」

「わ、正解。それと良い雰囲気であく美味い美味しいカフェ見つけたから皆で行こうだった」

「そういやダイアナとビクターには会わなかったのか」

「うーん、残念ながら。でももしかしたら向こうは僕を見たかも。携帯で連絡はとったよ、軽食を買っておいでくれるって！」

「こんな真夜中でもやってる店はあるんだな」

「ねー。流石大都会。犯罪率が異常だけど」

会話はそのまま、謎の殺人事件へと移行する。

約1ヶ月前前からゴツサムシティで起こっている、毛むくじやらの人間の殺人事件。殺害方法はバラバラ、被害者の身元の共通点もなし。

殺害される時間は恐らく真夜中。監視カメラも人気も無い場所でのいつの間にか殺され、朝方以降に発見される。驚くべきことに、あくまでビクターが入手した少し古い情報ではあるが、あのバットマンでさえ犯人の足取りを未だに掴めていないという。

「世界一の探偵でも分からないことってあるんだね。そういえば被害者って皆毛むくじやらで動物みたいになってるって話だけど、どうして生きている間に保護しないんだらうね。分かりやすい特徴だと思っただけ。それに毛むくじやらになったら、その人も、殺されるかも!!」ってならないのかな。僕だったらなるよ。ってあれ、どうしたの」「毛むくじやらの人間っていやあ、」

「いやアーサーさんじゃないよ?アーサーさんも立派な髭と素敵な髪をお持ちだけど、もっとこう、」

「あれか?」

「え?」

無人の港。人の気配は遥か遠く、忘れ去られた様に街灯がいくつもあるだけ。

雑多に放られたコンテナが潮風を浴びて錆びており、本来の用途で

は見えそうにもない。散らばったガラス片、棄てられた古い車。

いつの間にか2人の歩みは止まっていた。会話も止まり、風の音だけが耳に入り込む。

ひた、ひた。

裸足の様な足音が、風に紛れて聞こえた。1人分、歩幅からしてそれなりに背の高い、二足歩行のもの。

点滅する頼りない街灯と、満月の光に照らされ、遂に。

「あ、あ、あ」

どろりと蕩けた瞳孔が、2人をぼんやりと映していた。



「あの様子じゃ保護してもらって考えも浮かばなそうだね！うん!!
だってずっと唸ってるし明らかにこっちに敵意持ってるしなにあれ
ラリってる!?!」

「知るかよ。危害を加えるなら1発ぶん殴る」

「わお頼もしい!!」

よたよたと覚束ない足取りで此方を見つめる相手は、鋭くなった爪を此方に向けていた。まるで威嚇をする獣の仕草だ。アーサーは更に注意深く観察する。

獣、という表現は存外的を射る表現かもしれない。

ボロボロになってはいるが服を纏い、体毛に隠れているが腕時計もしていることから、かろうじて人間であることが判断できる。しかし体毛が異常に伸び、四肢が歪み、蕩けた瞳孔を持つあれを、果たして人間と形容しても良いのだろうか。

今は二足歩行であるが、前傾気味だ。これなら四足歩行の方が動きやすいだろう。

そして何より、鼻をつんと刺激するこの匂い。

「あの人、もしかして怪我してる?」

「誰か殺した後かもな」

「縁起でもない!」

鉄の匂い。血だ。

アーサーは冗談を言ったが、間違いなく怪我を負っている。「ど、どうしよう。保護？保護でいい？私服なんだけど僕。スーツ着てないけど超高速で動いて良いかな」

「様子見だな。間違いなく人間だが、おかしすぎる。殴って終わりならそれで良いんだが、それだけじゃ終わらないだろ、これ」

獣の様な人は、これ以上近付く気がないのか、爪を向けて威嚇するだけに留まっている。恐らく圧倒的強者たるアトランティス人のアーサーがいるためだろう。本能で動くところもまた、獣らしい。

「本当に獣みたいだな。そういう病気か？まあたダークサイドが何かやらかしたか」

「獣みたいになる病気を振り撒いた…ってコト!？」

「あくまで予想だったの。こういうのはダイアナの方が詳し…:あ？」

暫く睨み合っていると、アーサーの超人的な聴力が軽い足音を捉えた。

と、と、と。重さを感じさせない、カスタネットの様な跳ねる音。それもまた1人分のもので、アーサーの知る人物のどれにも当てはまらなかった。

何か来る。確信し、少し後ろにいるバリーに注意を促した。

「おい、誰か来る。追加の獣っぽい奴かもしれないねえ、気を付けろ」

「あ、」

だが、アーサーが目を少し逸らした瞬間、獣の様な人は一瞬で細切れになった。

「あ、あ、」

普段から超高速移動をしているバリーの動体視力では、全てがスローモーションに見えていた。

刃が月の光で煌めき、一閃。鞘に納め、続けて4連。肉が裂け、血飛沫が上がり、両断。いくつもの肉片になって、人であった獣もどきは簡単に崩れ落ちた。

彼はこみ上げる吐き気を何とか抑えようと口を両手で押さえた。

背を丸め、涙の滲む目をきつく閉じる。そうでない、飛び出す内臓の形までも思い出してしまいそうだから。

アーサーは目を逸らしてしまっただけの失態を恥じ、バリーの背をさすりながら前方を強く睨みつけた。

「う、スプラッターは駄目、ホント。夢に出そう。ふとした時に思い出しそう。そして僕は1歩下がる。これがホントのフラッシュバックってね、あいてっ」

流石に緊張感がなさ過ぎたので頭を軽く叩いた。

「冗談言う元気があんならシャキツとしろ。目の前いるぞ」

「うえ、全力で文句言いたい」

得物——アメリカでは珍しい刀を血払いし鞘に納めるその者は、散らばった肉片に一瞥もくれず、目元を手で覆いながら独り言ちていた。

低めの、若輩の男の声である。

「うっわ有り得ねえ。獣を逃がすとか、現役ならマジで有り得ねえ大失態。最悪。調子悪い。あの糞サイコ聖歌隊女の仕様だろ絶対気持ち悪いなおい。いんのかよこの街に。処刑だ処刑、狩って血の穢れを女王に捧げなきや」

黒を基調とした、豪華な装束だ。ふんだんにあしらわれたレースと金糸は高貴さを漂わせ、身分の高い者しか身に付けることの出来ない事実を知らしめていた。だがそれらは全て鮮血に塗れており、滴っている。どれだけの血を浴びればそうなるのだろうか。

刀の扱いは達人級。世界で無二と評してもいい。それだけ惚れ惚れするような太刀筋だった。視認することは可能だが、避け切れるかは怪しい。

腰からぶら下げている銃はやけに古い様式のものだ。ヴィクトリア朝時代のものに見える。2人に詳しい知識はないため、その程度の判断に留まった。だが飾りではなく、きつと実用出来るものだろう。弾丸を避けることは容易であるが、油断は出来ない。

「ところで貴公ら、誰だ？」

漸く関心が此方に向いたのか、刀の柄に手を掛けながら男が問いか

けた。

「それはこつちの台詞だ。急に現れやがって」

「俺は狩人だ。獣を狩るのは当然だろうが」

「け、獣？だからって殺すのは、」

「放っておいたら蔓延するんだよ、‘獣の病’ってのは」

獣の病。聞き覚えのないその単語を聞いて、目の前の男が謎の殺人事件にかなり詳しい事に気が付いた。当事者であるのだからある程度詳しいとは予想していたが、もしかすると、事件の真相まで解明できるかもしれない。

「瞳孔が蕩けていただろう。血に酔っている証拠だ。まったく、何なんだよマジで。せつかく朝に目覚めて現世をエンジヨイ中だったのに台無しだ糞が」

「血に酔っているってことは、ええと、酒に酔っている感じ？」

「もつと酷いぜ。血に酔うあまり血を欲しがる。それしか考えられない程にな。そしてその狂気は伝染していき、やがて全てを貪り尽くす。俺に感謝しろよマジで。獣が齎す被害を未然に防いでやっているんだからな」

大きな溜息。狩人と名乗った男は、よく手入れされた己の銀髪を手慰みに摘まんでいた。

1を聞けば2, 3応えてくれる。バリーのようなお喋り気質に感謝しつつ、アーサーは情報を引き出すために質問を重ねた。

「獣の病ってのは初めて聞いたな。人が獣の様になる病気はいくつか知っちゃいるが、獣そのものになるなんてな」

「かー。無知め。海の香りを漂わせておきながら何も知らねえのか。いや別にどうでもいいな、うん。貴公が知ってようがそうでなかろうが、俺が獣を狩って、貴公らが大人しく震えて朝を待つ。それでいいだろ、うん」

「あ？海と獣の病が関係あるかっての」

「大いにあるとも。はあ、思考の次元ひつく。うんざり。話合わねえ。これから俺夜明けまで獣を探さなきゃならねえから行くわ。他の狩人も見つけ次第殺しときたいし」

「他の：狩人？ 獣になった人間を殺してるのはお前だけじゃねえのか」

「当たり前だろ、明らかに刀傷じゃないやつもあつただろ！ っつて、何だよさつきから。もしかして俺から情報引き出そうとしてる？」

男は一瞬にして剣呑な空気を纏った。刃の切っ先の様に、異常な程研ぎ澄まされたそれは、気迫だけで人を圧倒してしまう。

「あー、うーん。俺も無益な殺生、というより無駄な殺生はしたくないんだよな。普通の人間狩っても血の穢れなんて手に入らんし。でもなあ、俺にもゴツサムでの昼の生活があつて、ごく平穩に暮らしたい訳で」

指の腹で柄を撫でる。空いた手で頭を搔き、再び大きな溜息。

どうやら男はゴツサムシテイに住んでいるようだった。昼は一般市民としてごく普通に暮らし、夜は獣を狩る狩人として暗躍する。だがあれほど盛大に血を浴びた装束と物騒な武器を持ちながら、今の今まで証拠の一片すら掴ませない。恐るべき立ち回りと周到さだ。

最早、アーサーとバリーは一言も発することが出来ない。男の一挙手一投足に全神経を注ぎ、僅かな動作さえ見逃すまいと目を凝らしていた。ほんの少しの綻びが己の死に繋がるかと嫌でも理解した。

「そして貴公らは目撃者。しかもそつちの大男は人間じゃないときた。ふーん、へー」

柄を撫でる指に力が籠り。

「考えるの面倒だな。殺すか」

アーサーの首元に刃が突き刺さろうとしていた。

「!!？」

咄嗟にバリーが刃を弾く。キン、と甲高い金属音を立てて、メスがコンクリートに叩きつけられた。

これ見よがしに撫でていた刀は囷。2人が刀にばかり注視する瞬間を見計らつて、男は隠し持っていたメスを素早く投げたのだ。その動作さえ、常人にはきつと視認する事さえ叶わないだろう。

「反応は上々。上々過ぎるな？ 軌道をしつかり見切りやがった」

バリーだからこそ、見切ることが出来た。暗闇に紛れ投擲されたメ

すが、月光を反射して煌めいた瞬間に超高速を発動。彼が何もしなくともアーサーならば避けたであろうが。避け切ることは出来なかった。バリーだからこそ、メスにたっぷり塗られた毒を確認し、アーサーの皮膚に届く前に叩き落としたのである。

束の間、抜刀。投擲したメスを対処されることも想定内だったらしく、体勢を崩したバリー目掛けて刃を滑らせる。

「っさせるかよ!!」

アーサーがバリーの腕を掴み、3歩分の距離だけ退く。丁度すれすれ、誰もいない空中を風ぐだけに終わった。

間髪入れずに男が二閃。だがそれを読んでいたアーサーがバリーの身体を担ぎ、大きく後退した。

「ちよこまか逃げんなこのっ!」

「丸腰相手に物騒だなおい!」

「アーサーさん相手煽らないでってば!」

単純に考えれば、2対1で、ジャスティス・リーグとして多くの脅威を退けたアーサーとバリーが圧倒的に有利である。

しかしその差でさえ、男は簡単に埋めてしまう。にたりと、凶悪な笑みを浮かべた。

丸腰と自らを揶揄しながらもその肉体は凶器そのもの。アーサーは拳を握りしめ、コンクリートを割る勢いで踏みしめ、駆ける。そして、振り抜く。

至近距離から感じる気迫は大砲そのもの。だが男は、それを、あるうことか薄皮一枚だけ犠牲にして避け切る。

「なっ!」

驚くアーサーを嘲笑う様に、納刀。隙を晒す獲物を狩るべく――
神速、一閃。

速く、重く、鋭い。第六感を発揮させたアーサーはかろうじて身を捻るも、胴体を逆袈裟に斬られた。

と、と。

舞う鮮血。苦悶の表情。

「固つつつつつた!!全っ然斬れねえ!」

男の驚愕の声。

アーサーの纏う鱗鎧が、何とか刀を防いだようだった。お蔭で彼は少量の出血程度の傷で済んだ。だが鎧は真つ二つになり、2撃目を防ぐことは出来ないだろう損傷を負った。

叫ぶ男に隙を見出し、バリーが超高速で接近。全てがスローモーションの中、相手が破裂しない程度の力加減で体当たりを仕掛ける。だが紫電が迸る様を見切ったのか、バリーが接触する直前——男の姿が掻き消える。煙の様に実体を失い、その直ぐ後ろに一瞬で現れたのだ。だが超高速に伴う衝撃波までは回避出来なかった様で、遙か後方へと吹き飛ばされていった。

ドゴン、と派手な音と共に土煙が上がる。錆だらけで脆いコンテナは容易に崩れ、ガラガラと壊れていった。

「ちよつと待って、あの人僕の動きについてきたんだけど?!」
「気を抜くんじゃねえ来るぞ!!」

とうとうバリーが声を上げる。ジャステイス・リーグですら、スーパーマン以外は視認することすら容易ではない超高速が、謎の回避方法で簡単に対処されてしまったからだ。

混乱するのも理解できるが、と心中で思うアーサーの怒号もやむなし。未だ土煙が立ち上る箇所に細心の注意を払いながら、男を完全に無力化するべくじりじりと詰め寄っていく。

やがて男が咳き込みながら瓦礫の下から這い出て、2人を憎々し気に睨みつけた。

「うえ、ゲホツ、糞が。絶対に殺す。殺してやる。血族の誇りに賭けて必ずその首を斬り落としてやる」

「は、やれるものならやってみろ」と、と。

出来ることなら、アーサーは男を早く無力化、ないし拘束しておきたいと思っている。そのためには、対処されるといっても男より早く動けるバリーの存在が必須であった。

男の武器は、刀と銃と投擲用のメス。銃は今のところ使う気配がないため、最低限の注意で問題ない筈だ。

と、と、と。

睨み合いが続く。男にとって、吹き飛ばされた際のダメージが大きかったのだろう、この時間を利用して自然回復に努めている様に見える。

だが、時間がない。

と、と、と、とととと。

遠くから聞こえるカスタネットの様な軽い足音と、合流されては堪らないのに！

アーサーの聴覚が捉えた、第三者の足音。それは男の足音と完全に一致している。

ああ、最悪だ。きつと男の仲間だろう。

「くそ、遅かったか…!!」

「わっ、何何何?!」

アーサーは悪態をつき、バリーの腕を引いて撤退を選んだ。

「逃がすかっ!」

怒りに染まる男が、幾度目かの抜刀。隙だらけの2人を切り捨てるべく、一息の間に目の鼻の先まで近付き。

「くそがっ!バリー、お前だけでも、」

ととと。

足音の主がとうとう姿を現し。

「は?貴公、っとうおおおおお!!」

何の躊躇いもなく男に斬りかかった。

「…………え?」

この展開には流石についていけず、アーサーとバリーは2人揃って口を開けて呆けてしまった。

乱入者は何の飾り気のない、どころか柄もない、大きく湾曲した片刃の曲剣を振り回し、男の首を狩ろうと躍起になっていた。全ての攻撃が首だけを狙っているためか、男にとっては避けやすいものなのだろう、髪の毛一本すら掠らせないでいる。

「おいおいおいおい、濡羽の!?貴公もこの街にいたのか、というか止めろ馬鹿!今俺は!別の獲物を!!狩ってるんだ!!!」

「他の狩人の邪魔をすることしか能がないカインハーストが、よくそんな大層なことを言えたものだな。忌まわしい、呪血、の狩人め」

「は？今血族を愚弄したな？侮蔑を込めたな？殺してやる」

「濡羽」と呼ばれた乱入者は、良く通るアルトの女声を発した。頭の殆どを帽子と布で覆ってしまっているため、呪血、と呼ばれた男と違い顔を窺い知ることが出来ない。

「私は、全ての狩人を狩り尽くす」

乱入者は鴉の羽の様な装束を翻しながら、背負っていた折り畳みの機構と曲剣を連結。得物は持ち主の身長を超える巨大な鎌へと変貌を遂げた。

「忌々しい、狩人狩り、が!!」

「狩人など全て滅べ!!」

壮絶な斬り合い。神速という言葉すら烏滸がましい程の速度での技の応酬。風を裂く音と、足音と、呪詛の言葉が空気を満たす。

「アーサー、バリー!!」

流石に異変に気付いたのか、ダイアナの声が遠くから聞こえる。同じくらいの距離からエンジンの駆動音も聞こえるので、ビクターもいるのだろう。

「は!?!おいまだ増えんのかよ!!やってらんねえ。5体は無理ゲー。もう帰る!ついてくんなく濡羽の!!」

「逃がすか!」

「だー!!!ついてくんなくっつてんだらうが!!」

男が離脱を選んだ。バリーの体当たりを回避した様に姿を掻き消し、暗闇へ逃走。舌打ちを零した乱入者は、男以外には目もくれず暗闇へ駆け出した。

ダイアナとビクターが到着する頃には、すっかり静寂が訪れていたのだった。

「罵詈雑言の嵐だったわね。一体何が…って、アーサー、貴方!」
「かすり傷だ、大した事ねえ。だがこの鎧はもう使えんな」

ふとバリーが携帯の時計を見ると、約束の時間を僅かばかり過ぎただけであった。きつとそれだけならダイアナとビクターは駆け付け

てくれなかっただろう、と己の判断が間違っていないなかったことに安堵の溜息を吐いた。

「バリーのメッセージがなければ気付かなかった、ありがとう。怪我はないか？」

「僕はないよ、アーサーさんだけ。まあ、五分五分の賭けだったけどね。大した事してないし。こっちこそ気付いてくれてありがとう」

隙を見て、ビクターにSNSアプリを用いてメッセージを送っただけ。視線を男から離すことが出来なかったため内容は何の意味もない文字の羅列で、また送信できているかも判別がつかなかったため、バリーの「賭け」という表現はかなりの確だ。そして、賭けに勝った。負けていた時の未来など、想像もしたくない。

「本当に何があったの？誰かいたみたいだけど、貴方達でも対処し切れなかったのかしら？」

「それについて……出来れば、全員に共有したい。クラークも交えてな」

「…分かったわ。急ぎましょう」

ジャステイス・リーグ、緊急会議である。

神妙な顔つきのまま、4人はクラークと合流するべく駆け出す。身体能力の突出したメタヒューマンだからか、その場からいなくなるのは一瞬だった。

それを見送った後、影からのそりと蝙蝠が這い出る。

踏み荒らされた肉片を注意深く観察しながら、やがて再び影に融けていった。

暗闇を飲み込む狂気

「狩人、かあ……」

クラークの眩きがその場の雰囲気重くさせる。日付が変わった深夜、クラークの泊まっているホテルの一室。少々手狭だが、ジャスティス・リーグ全員がこの場集っていた。

アーサーとバリーが邂逅した、狩人という存在。人間と評するにはあまりに人からかけ離れている彼等が、謎の殺人事件の犯人で間違いないのだろう。

「アーサー、傷の調子はどう？」

「全く問題ねえな。薬だけで十分だ」

逆袈裟の刀傷に薬を塗り終えたアーサーは、着替えのTシャツを身に纏っている。役に立たなくなった鱗鎧は、着替えの入っていたバッグに無造作に詰められていた。その様子を見つめる表情は忌々し気に歪んでおり、受けた屈辱を物語っていた。

「ふん、相手がお喋りで良かったぜ。お陰で色々と情報が手に入った」
「そうね。でも更に謎が増えたわ、驚く程に」

男が残した情報を整理すると、こうだ。

ゴツサムシテイで起こっている謎の殺人事件は、狩人によって引き起こされた。更に突き詰めると、狩人が危険視する‘獣の病’がゴツサムシテイに蔓延しつつあるのだ。

‘獣の病’と称されたそれに罹患すると、見た目だけでなく思考回路すら獣に近づく。更に瞳孔がどろりと蕩け、血に酔った状態となり、他者の血を求め様になる。

獣の病の罹患者は血を求めあまり他者を襲い続け、蔓延し、やがて全ての人間が獣になる。そうなる前に罹患者を殺すのが、狩人という訳だ。

今まで獣の病の罹患者に襲われた者がいなかった理由は、狩人が素早く狩っていった為だろう。

「被害者、もとい、罹患者が多種多様な殺され方をしているのは、狩人が複数人いたためか」

「うーん、それなら納得。そういえばビクターって、聖歌隊って単語に覚えがあるんだよね？」

「……ああ、まあ」

男が誰かの罵倒を口にした際、‘聖歌隊’という単語があった。聞き覚えがあり過ぎる言葉にビクターは驚きと落胆を隠せないでいる。彼が日のあるうちに訪れた聖堂を拠点とする合唱団が、聖歌隊という名であった。

聖歌隊、という言葉自体は何の変哲もないありふれたものだが、ゴッサムシティにおいて現在、‘聖歌隊’を名乗る合唱団は片手の指の数程であり、その中で出処の怪しい人間が運用しているとなれば1つしか当てはまらなかった。

「…リーダーを務めている女性は最近ゴッサムに引越したと聞いていたが、ゴッサムに来る前の足取りが全く掴めない。黒と見ていいだろう」

「じゃあその人も狩人ってやつなのかな。気を付けないと」

「その子に話を聞いた方が良さそうね。ちよつと手荒になったとしても、許してもらいましょう」

男が同じ街にいることを嘆く程であるため、かなりの重要人物と仮定。未知の手段で抵抗する事を想定し、全員で聖堂を訪問するとした。

正体不明、という事もあり、少女が獣の病の蔓延を引き起こしたとも仮定しつつ警戒心を強める。

——うっわ有り得ねえ。獣を逃がすとか、現役ならマジで有り得ねえ大失態。最悪。調子悪い。あの糞サイコ聖歌隊女の仕業だろ絶対気持ち悪いいなおい。いんのかよこの街に。処刑だ処刑——

……

この言葉を信じるなら、男が本調子でないのは、‘聖歌隊女’の仕業であり、それに対して男は殺意を向けている様だ。仮に、万が一、聖歌隊の少女が全くの無関係だったとしても、聖堂で張り込めば少なくとも男ともう一度会うことが出来る。

「出来るならバットマンにも情報を渡しておきたいと僕は思ってるけ

ど、どう、ビクター？」

「君のスピードなら十分間に合うだろう。きつと港にまだいるさ」

「あー、でもものすごく警戒されそう。犯人は現場に舞い戻る、ついでうし、犯人と疑われるかも。もう少し情報揃えてからの方がいいかなあ」

しかし、問題は狩人への対処だけではない。

獣の病の原因。どうしてゴツサムシティで蔓延するに至ったか。

酷似する病気は記者のクラークや永きを生きているダイアナですら記憶にない。だが男はさも昔から存在する様に語った。アーサーに対して、海に関連することを匂わせる発言もした。考えれば考える程、謎が深まる。

狩人同士が敵対していることも、奇妙ではある。獣の病の蔓延を押し留めるために罹患者を殺す者同士、協力関係にありそうなものだが男は他の狩人を殺すと明言し、乱入者の女は全ての狩人を狩り尽くすと豪語した。目的が見えてこそ、一同は首を傾げるばかり。

「そういえばクラーク、貴方最初つきり話してないけど、大丈夫？」

「ん？ああ、いや。狩人、狩人：何か記憶に引つかかる気がして……」

腕を組み静止していたクラークは、ダイアナの声で漸く我に返った。

「狩人自体ありふれた単語だろうよ。聞き覚えねえ訳がねえ」

「そうじゃなくて、うーん、何だっけ。こう、喉まで出かかっている感じ……」

「あ、分かるその気持ち。でもそういうときって大抵出てこないよクラークさん」

「うーん……、うん。よし。諦めよう。明日……いやもう今日か。とにかく、昼に件の聖堂に訪れよう」

パン、と手を打ち、クラークは結論づけた。

戦闘になることを考慮し、全員がスーツを着こむ事に。最初是对話を試み、戦闘となった場合はバリーとアーサー、ビクターが一般人の避難、クラークとダイアナが戦う事とした。アーサーが采配に不満を漏らしたが、護りの要である鱗鎧が使えないため、渋々と了承した。

実際に狩人と戦った2人から戦闘スタイルを聞き出しつつ、クラークは再び思考の海へと沈んだ。やはり、どうも気になるのだ。

狩人、という単語だけではない。

異常な程の移動速度。

銃と近接武器で相手を翻弄。

獲物に対しての苛烈な殺気と執着。

闇に融けそうな程に黒く統一された装束。

獣と称し、人を狩る。

殆どの特徴が、今回遭遇した狩人と一致するのだ。だがやはり情報の出処が不明だ。確か誰かから聞いた様な、気が。

一般人に見つからない様に全員がベランダからこっそり出ていった後もクラークは悩み続け、結局朝日を迎えるまで眠らずにいたのだった。



「もの凄く気分が悪いわ…」

「同じく…」

「タチの悪りい安酒を飲んだ翌日の気分だ」

「つまり酷い2日酔い。皆大丈夫？ビクターは問題なし？」

「恐らく」

ダイアナ、クラーク、アーサーが揃って不調を訴えた。ただの体調不良の可能性を考えたが、ダイアナは半神のアマゾン族、クラークはクリプトン星人、アーサーは半人のアトランティス人であり、人間ではない者が共通しているととなると、やはり何か異常なものがこの先にあるのだろう。

「主戦力が皆体調不良なら、作戦を変更した方が良いと思う。俺もバリーも戦えない訳じゃない」

「…いや、問題ない。行こうか。僕とダイアナが先頭、ビクターとバリーが真ん中で、アーサーは殿を」

「任せろ」

陣形を組み、聖堂を見上げてから歩き出した。やはり、見た目は廃れた何の変哲もない聖堂だ。

微かに聞こえる歌声と楽器の音。惑わす様なそれに聞き入らないようにしながら、僅かな段差を踏みしめ大きな扉の前に立った。

聖堂の外景と同じく古びた扉に力を入れると、見た目に反して音もなく開いた。途端に響き渡る混声合唱と、支える演奏。宇宙を望み、静かに祈りを捧げる星の娘。美しい彼女を讃える歌。聞いてはならない遥かなる神秘の讃美歌。

聖堂の中はどうやら平気らしく、外で待機していた頃よりも3人の顔色がマシになっていた。

煌びやかなステンドグラスの前で一心不乱に歌い続ける合唱団を横目に、ビクターから聞いた特徴と一致する少女を探す。

だが、いない。ざつと見渡したただけではあるが、白い装束の少女の姿は見つからなかった。

「一体何処に――」

埒が明かないと、クラークが合唱を無理矢理止めて聞き出そうとした時。

「あら、そろそろ来ると思っておりましてよ?」

音もなく閉まる扉と、その前に立ちはだかる可憐な少女。

同時に、合唱が鳴り止む。

「ふふ、意外にも役に立ったと言いましたよ。それとも事件への取り掛かりが遅いと嘆きましたよ。ともかく、本当に世界を代表するヒーロー達ですか?愚かしさにも程があるというものです」

コツコツと尖ったヒールを響かせながら、石造りの床を優雅に歩く。口元には笑み、手元には白い杖を携えて、驚きに固まるジャステイス・リーグの間を堂々と通っていった。

否、ただ固まっている訳では無い。

少女から漏れ出ている、異常な気配。聖堂の外で感じたものとは段違いの濃密な重み。恐ろしいまでのそれは、少女が人間でないことを

明確に物語っていた。

その気配を、ダイアナは知っていた。

遙か昔。ダイアナがまだ出身島のセミツシラしか世界を知らなかった頃。遙か宇宙より飛来したその残骸が、美しいその島を冒瀆し尽くしたことを。

或いは、アーサーのアトランティス人としての遺伝子に深く刻まれていた。

アトランティス人でさえ到底辿り付けぬ深海にて眠り続ける、未知なる神秘を所有する異形の冒瀆神を。

そしてクラークの、優れたクリプトン星人としての本能が警鐘を鳴らしていた。

生命を須く冒瀆せしめんと胎動する、歪な程に無垢な夜の星の遺志を。

ただの人間である筈のバリーでさえ、吐き気にも似た胃のムカつきが治まらない。少女を直視さえ出来ず、口元を押さえ立て立ち尽くすばかりであった。

「さて皆様方。改めて自己紹介を」

ある程度歩いたところできると振り向き、合唱団を背にした少女は軽く指を鳴らす。

すると、合唱団は隠し持っていたナイフを素早く構えて自らの首に当てた。音を立てて床に落ちる楽器など目もくれず、虚ろな目をしたままに。

「!!!」

驚きに息を呑む。

これ程までの異常な気配に、一般人が耐えられる筈も無く。合唱団は既に少女の支配下にあり、ジャステイス・リーグへの人質に仕立て上げられていたと瞬時に察した。

「医療教会の一派 聖歌隊、の、最期の一員にございます。最早、聖歌隊、はわたくしのみを指す言葉。美しき星の娘の涙を拭うのは、このわたくしだけ」

カン、と杖の先を床に叩きつけ、笑みを一層深くした。

「——故にわたくし、‘星謳い’の狩人、と呼ばれております」

異様な雰囲気の間を支配しているのは、間違いなく少女——の形をした、ナニカ。

「さあ皆様方。気を確かにお持ちになつて？折角詠えたこの場を台無しにしたくありません。交渉といきましょう。拒否権はありません。協力をしましょう。わたくしの言葉は絶対です。ただ、はいと頷きなさいな」

「交渉に、協力…？」

クラークの絞り出すような声をきちんと聞き取れたのか、星謳いの狩人は微笑みを返した。

「はい、その通り。内容は極々単純ですから、そう身構えなくてもよろしいです」

ジャステイス・リーグはメタヒューマンの集いだ。主戦力であるクラークやダイアナ、アーサーはもと、サポートのビクターとバリーまで、たった1人で国を滅ぼしうる程の戦闘力を有している。

生命の冒涇者、あらゆるものの天敵、少女の形をしたナニカは、彼等を使って何をさせようかを考えている。その内容は、明白だ。

「…まさか、僕達を操って世界を滅ぼそうと——」

「はあ？そんな下らないことしませんけど」

「へ？」

星謳いの狩人の心底呆れた声に、クラークは素っ頓狂な声を上げた。

「な、なら君は何をしようとしているんだ。ゴッサムシティに獣の病をばら撒いて、」

「前提から間違っておりますわ、ミスター・ストーン。お察しの通りわたくしは人間ではありませんが、それ以前に狩人です。わたくし自身が上位者となった以上、獣なんて増やす訳ないでしょうに」

「上位者？」

「その辺りの説明は追々、ということ」

当たり前の様にビクターの本名を言い当て、カンカンと何度も杖を床に叩きつける。

途端、ふっと身体が軽くなった。押し掛かっていた重圧が一気に霧散したのだ。同時に身体の不調も良くなり、ジャスティス・リーグは一斉に臨戦態勢をとった。

星謳いの狩人はそれを一切意に介さず、再び指を鳴らして後ろに振り向いた。

「先程からの態度を見る限り、皆様方には誠実な対応をした方が協力を得られると判断しました。ので、どうぞご帰宅下さいな。まだお昼過ぎですが、本日はもう終了です」

合唱団は指の音を合図にナイフをしまい、やはり虚ろな目をしたままに荷物を手早くまとめ、裏口からぞろぞろと出ていった。

「これで合唱団はきちんと自宅に帰ります、ええ。何の被害も及びません」

「は、はあ」

「こうした方が、言う事を聞いていただけのしょう？少おし遠回りしましたが、本題に入りましょう」

合唱団が全員退出した頃を見計らって、咳払いを一つ。星謳いの狩人は真剣に言葉を発した。

「ゴッサムシティに蔓延する獣の病の撲滅、及び宇宙より飛来する上位者の撃退を、手伝ってほしいのです」



最初に獣の病の罹患者が発見、殺害されたのは1ヶ月半前。だとすれば異変はその付近から起こったと推測できる。

だが、彼女が宇宙より飛来した2カ月前には既にゴッサムシティを上位者の神秘が覆っていたという。

「上位者、というのは…まあ、そういう地球外の種族だと思って下さい。得意技は生命の冒読です」

「うわ、ええ…？生命の冒読って、具体的に何するの？」

「ミスター・アレン、その話は後に。詳細を話せば発狂死しかねないの
で」

「発狂して死ぬって何!？」

星謳いの狩人はそれを異常事態と捉え、直ぐにゴツサムシティを自身の領域で塗り替えるべく神秘で覆い始めた。完全に覆い尽くした時点で協力者たる狩人と共に獣の病の罹患者を狩り尽くし、後に飛来する上位者を狩り殺す、という計画であった。

彼女曰く、神秘で覆い尽くす間は他の狩人が一時的に弱体化してしまうのが難点だが、それ以外は完璧な作戦であったという。

しかし結局、作戦は失敗に終わった。彼女の想定以上に事態は進行していたという。最早小手先では通用しない程に、深く根付いてしまっているのだ。

「獣の病の蔓延は、上位者が飛来…いえ、完全体で降臨するための苗床作りのようなもの。これ以上進行させてしまつては、わたくしや協力者の狩人では太刀打ち出来なくなつてしまうのです」

そこで目をつけたのが、ジャスティス・リーグだ。

人間の限界を超えた身体能力を優に超えた超常的な力を持つ彼等を兵力として数え、飛来する上位者を迎え撃つ。

「上位者は先程のわたくしの様に、心身に異常をきたす程の強烈な神秘を放っています。わたくしはカーナリー手加減しましたが、本来は気配を捉えただけで発狂死しかねないのですよ」

「発狂死はこの際置いというて、じゃあ僕達にはどうしようも出来かない? さっきのだって、まともに動けなくなるくらいだったのに」

「わたくしからはそれに抗う術を授けましょう」

「そんな簡単に出来んのか? いったいどうやって、何を俺等に授けんだよ」

「ミスター・ストーン、他の方は動けない程参っていたにも拘わらず、何故貴公だけは平気だったのでしょうか」

「俺、か?」

ビクターに視線が集まる。

確かに、彼女の発する神秘とやらにビクターだけは平気そうであった。全員の視線を受けながら彼は一瞬思索し、呟くように答えを口にした。

「…マザーボックスか」

「ご明察。ミスター・ストーン自身はただの人間でしかありませんが、融合しているマザーボックスがわたくしの神秘を防いだのです」

マザーボックスとは生きたコンピュータであり、宇宙の果てにあるソースウォールにアクセスすることが出来る、夢の様な機械である。3つあるそれを揃えればどんな超常現象も思うまま、宇宙の支配者にも簡単になれてしまう代物。その内の1つが、過去のダークサイド軍勢との戦闘の果てにビクターと融合を果たしたのだ。

ソースウォールとは並行世界を隔てる壁であり、同時に接続者に様々な恩恵を齎す源である。ビクターの中に息づくマザーボックスが、宿主を守ろうと働きかけたことで、ビクターのみ無事でいられたのである。

因みに、1度目の訪問ではマザーボックスを刺激しない様にビクターのみを対象とした洗脳攻撃を仕掛けたため、ビクターは軽く洗脳されてしまい、星謳いの狩人を怪しむという思考を奪われたのだという。

「マザーボックスは、‘啓蒙’をミスター・ストーンに付与したみたいですね」

「けいもう…?」

「はい、‘啓蒙’です。夢にだけ存在する人形すら正しく認識できない程微々たるものですがね」

啓蒙とは、正しい知識を人々に与え導くこと。転じて、新たな知識を授け、未知を既知へと切り拓く業である。

彼女の言う啓蒙とは、即ち神秘への探求の術であり、物事の隠された本質を正確に捉えるための知識である。

「啓蒙は触れてはならない知識であり、上位者より大きく劣る低次元生命体が理解できる筈も無く。つまり、啓蒙を与えすぎると発狂して死にます」

「また発狂死!?!」

「発狂死とは啓蒙の過剰供給によって引き起こされます。要は脳が膨大な高次元知識に耐えられなくてパンクするのです。物理的に」

「怖っ!？」

星謳いの狩人から大方の事情を聴き終え、大きな溜息を吐いたダイアナが訝し気に問いかけた。

「話がとっ散らかってしまったから、纏めましょう。ええと：何て呼べば良いかしら？」

「お好きにどうぞ」

「なら星謳いと呼ぶわ。今ゴツサムシテイでは獣の病が蔓延してて、それをしでかした上位者が今後現れるのね？」

「その通りです。本来はわたくしと協力者で狩り殺すつもりでしたが、わたくし達だけでは対抗出来ない可能性があります」

「だから私達を此処に呼び寄せて、上位者に抗うために啓蒙というものを私達に与え、戦えということね」

「その認識で構いません。共に頑張りましょう！」

「そこ、引つかかっているわ」

星謳いを睨みつける様に、ダイアナは吐き捨てた。

「貴方も上位者なのでしょう？態々同族を殺すって訳ね」

嘗てセミツシラを襲った上位者の残骸。たったそれだけでも、アマゾン族は3分の2の同族を失った。ダイアナは当時の怒りを一瞬たりとて忘れることはなく、故に目の前の上位者に最大限の警戒を露わにしていた。

そんな事情を知ってか知らずか、星謳いは無邪気に笑みを浮かべて答えた。

「人間やアマゾン族、アトランティス人でさえ同族で殺し合っているのに、何故おかしいと思うのでしょうか？」

絶句。

「ミズ・プリンス。貴公の過去に何があったかは大方の予想が付きますが、わたくしには一切関係のない事。そして今回の件でこの星の生命体がどうなるうとも、どうでもいい事。協力者の頼みで一般人を巻き込まないようにはしておりますが、別にゴツサムシテイが壊滅したって構いません」

笑みを更に深くし、星謳いは高らかに告げた。

「同族が頑張っているところって、踏み潰したくなるものでしょう？」
思考回路が別物だ。星謳いにとって地球の生命体は何処まで行っても下らないものでしかなく、自身が楽しむ為だけに行動しているのだ。

だが——彼女のそれは、古代より知性体が持ちうる傲慢である。他人の不幸は蜜の味。

他者を蹴落とすことで愉悦を見出す人間などごまんという。理解できてしまったからこそ、ジャスティス・リーグは誰一人として反論することが出来なかった。

星謳いに一般人を巻き込まないことを約束させた協力者に、心の中で感謝をした。

「さて、答えを聞きましょう。協力するか、否か。断れば無理矢理洗脳して使い捨ての駒に致しますが、いかがでしょう」

「…拒否権なんてないじゃないか」
「ふふ」

消え入るようなクラークの言葉を肯定と捉え、星謳いは再び口角を釣り上げた。

そう、拒否権などない。最初から、全て、彼女の掌で転がされていたのだ。

「とはいえ、協力していただけるのなら最大限の譲歩は致します。わたくしが持つ知識は…啓蒙を与えない程度になら全てお教え致しますし、協力者にも口添えしておきます」

「あの狩人が言った通りのクソ女だぜ、アンタ」

散々虚仮にされたせい、アーサーは星謳いに暴言を吐く。協力関係とは名ばかりの束縛に不満を通り越して殺意を抱いているのだ。

やはりというべきか、そんな暴言でさえ彼女はどこ吹く風で、弾む声のまま再び問いかけた。

「ああ、皆様方が遭遇した狩人についてお伺いしたく」

「あら、てっきり彼等が協力者かと思っていたのだけど」

「残念ながら彼等はわたくしが把握出来ていなかった狩人です。ゴツサムシテイにいることは分かっていたのですが、どのような者かまで

は。なんせ腐つても夢に生きた狩人、私の‘内なる脳の瞳’に中々映らなくて」

「脳の瞳？また新しい言葉ね」

「千里眼の一種と思つて下さい。それで、どのような狩人でしたか？」
この質問には、実際に遭遇したバリーが答えた。

「ええと、貴族みたいな煌びやかな服装の男の人と、羽みたいなヒラヒラの服の女の人？だったよ。‘呪血’と、‘濡羽’って呼び合ってた」
「ああ、やはり、カインハーストのイカレ血狂いマラソン廃人」と、同族殺し獣殺しなんでもござれ糞女、でしたか。道理で獣の死体がぐちやぐちやの筈です」

「口悪っ」

先程までの様子とは一変、忌々しい様子で悪口の芸術的な羅列を披露する星謳い。如何やら、狩人同士の仲は想像以上に険悪らしい。

今の今まで、星謳いは呪血と濡羽を把握出来なかった。その事実が悔しいのか、周囲に聞こえる程に歯ぎしりをしていた。

「確実にわたくしの邪魔をするでしょうから排除しておきたかったのですが」

「物騒だな。彼等とこそ協力関係を結ぶべきと俺は思うが」

「百害あって一利なし。特に濡羽は悪名高い狩人狩りの狩人ですから、上位者より先に此方が狩られてしまいます。…ですが、背に腹は代えられませんね」

溜息を吐きながら星謳いはジャステイス・リーグを見渡す。隠された瞳に全て見透かされている様で、怖気が全身を軽く蝕んだ。

「皆様方に最初のお願いです。呪血と濡羽を仲間に引き入れて頂けませんか。今は戦力を揃えられるだけ揃えたいのです」

星謳いやその協力者が交渉に向かえば、確実に敵対し戦闘になるという。だからこそ、敵対する可能性が僅かながら低いジャステイス・リーグに任せるといふのだ。

一度交戦してしまったが、大して問題にならないそうだ。呪血は複数人で困めば直ぐに戦闘を放棄し、濡羽は狩人と獣、上位者以外なら基本的に襲わないとのことだった。

上位者なるものとの戦いは、ダイアナ以外は未知の領域。戦闘にありたり経験者は多いに限る。

星謳い曰く、上位者が完全に根付いてしまえば、その時点で地球生命体は滅びを確約されるそうだ。人類を守るべく結成したジャステイス・リーグにとつて、見過ごせる問題ではない。

「分かった。呪血と濡羽、2名の狩人を此方で仲間に引き入れるよう尽力する」

「有難う御座います、ミスター・ケント。上位者の具体的な撃退方法はその後には共有いたします。わたくしは皆様方が尽力している間、原因究明に勤しみます」

星謳いが飛来するより以前、ゴツサムシティを覆っていた神秘。それは間違いなく上位者のものではあるが、何故ゴツサムシティに定着するに至ったか、星謳いは調べるといふ。

「では、ご武運を。皆様方に暗き血の加護があります様に」

「呪われている様にしか聞こえねえな」

「あら、ふふふ。呪いと海に底はなく、故に全てを受け入れる、ですよ？呪いと貴方の親和性は抜群、一瞬で死にますが、本当に呪いましょうか」

「…おい、その言葉…」

何か言いたげだったアーサーだったが、結局は言葉を切つてそっぽを向いてしまった。

暫定リーダーのクラークは彼のその様子を心配しながらも、声をかけずに外へ繋がる扉を開いた。後に続く仲間は皆沈んだ表情をしており、今回の件が如何に物騒であるかを物語っていた。

歪な協力関係。ジャステイス・リーグは星謳いに翻弄されながらも、迫る危機に備えるために重い足を踏みしめた。

暗闇を深める神秘

大都市メトロポリス。その自宅で、クラークは選別した資料を読み漁っていた。

星謳いと別れたジャスティス・リーグは、二手に分かれて呪血と濡羽の捜索をする事となった。本来であればクラークも捜索に参加する筈が、しかし彼のみ、一時離脱しメトロポリスへと帰還していた。やはり、どうしようもなく脳裏に引つかかる言葉があり、こうして関連するであろう資料を掻き集めたのである。

「狩人、狩人、狩人…」

だが合致する情報は見つからない。過去10年の新聞記事まで遡ってみても、あの異常性の塊である狩人についてなど微塵も書かれていない。

「え〜……でも、きつと何処かで聞いた筈だ」

狩人。狩猟を生業とする人の総称である。単純に（決められた場所で定められた許可を取り）狩猟を楽しむ他、人に害を成す動物から人を守る為に存在する職業である。

狩猟を生業とする、という点では、呪血や濡羽、星謳いにその協力者は言葉通りに狩人だ。しかし実態は、おぞましい過程の果てに生まれた業で以て、恐ろしい獣を狩り殺す異常者である。クラークは実際に戦った事がないが、バリーもアーサーも、一撃一撃が超効率化された確殺のものであると嫌な太鼓判を押した。

「…駄目だ、やっぱり見つからない」

臃げな記憶は不鮮明のまま、これ以上の情報収集は無駄の様に感じてしまった。仮に全て思い出したとしても、それが今回役に立つかは不明だ。もしかすると全く関係ないのかもしれない。となれば、この行為は唯の時間の浪費に過ぎない。

「悔しいが諦めるしかないかな…」

とうとうクラークは観念して、すっぱりと諦めることを選択した。これ以上はきつと何も得ることが出来ないと確信し、散らばった資料を雑多に纏めた。この資料は、明日デイリー・プラネット内のシユ

レツダー行きである。南無三。

重い心情のまま、冷めきったコーヒーを飲み込む。結局成果は無し、という事実がクラークに押し掛かった。

太陽はとうに沈みかけており、時間の経過を残酷に物語っている。今頃狩人探しに奔走している仲間、無事だろうか。

これから再びゴツサムシティに戻り、呪血と濡羽を仲間に取り入れた後、上位者を迎え撃つ。明確なタイムリミットは星謳いから提示されなかったが、早いに越したことはないだろう。

つい、溜息を零す。ゴツサムシティを訪れてたった2日の筈であるが、激動とも言える情報の嵐であった。恋人のロイスの様な頭の回転の速さを持っていないクラークの脳は、パンク寸前の状態だ。

本来の目的であったバットマンの勧誘すら、ままならない。

「そういえばバットマン、今は何をしているんだろう」

聡明な彼が携わっていないながら事件について何も進展がなかったのは、星謳いがきつと関係しているのだろう。殺人犯として狩人が逮捕されてしまえば、獣の病の罹患者を狩り殺すことが出来なくなるからだ。：狩人であれば、何度刑務所に入れられても簡単に脱獄してしまいうそであるが。

ただ、バットマンが如何に優れているようにも、彼自身は何の能力も持たない人間である。星謳いの思惑が何であれ、結果として彼は今回の件に関わることが出来ないだろう。上位者という全く未知の、恐ろしい宇宙の神秘に関わらない方が良いとさえクラークは考えていた。

玄関の扉を開けると、強烈な西日が目を焼いた。クラークにとつてこの程度の光では目を閉じなくとも問題ないが、念の為手で光を遮る。長年培った人間への擬態の為の動作は、意識せずとも自然と出来てしまう。

「あらくらくさん、こんにちは。出張、もう終わりましたんですか？」

「いいえ、まだ。一時的に帰ってきただけで、もう出発します」

「あらあら、大変ですねえ」

どうやら、丁度隣の家の者が仕事から帰ってきたらしい。クラークより少し年上の彼女は、そばかすのある顔を笑みに変えて駆け足で近

付いてきた。

「もう直ぐ夜なのに行くんですか？記者って、やっぱり大変なんですね」

「実はちよつと厄介な事になってまして、急遽終わらせなければならぬことがいっぱい舞い込んでしまつて……。ところでアリアさん、随分物を買ひ込んでますね。今日はパーティですか」

「お仕事、大変でしょうが頑張つて下さいね。そして今日は両親の結婚記念日なので、お察しの通りパーティです！お仕事がなければ、クラークさんやロイスさんもご招待したかったのですが」

彼女とロイスはクラークを通して知り合い、今は本を交換して感想を言い合う程親密な仲だ。また、偶に食事に招待をしたり、されたりと、かなり良好な関係を築けているのだ。

「あはは、残念です。アリアさんやお母さんの料理、本当に美味しいですから」

「クラークさんの料理も凄く美味しいですよ。ロイスさんも出張？」

「はい、僕も彼女も急に出張が決まつてしまつて。ロイスはイギリスに行つてますし、僕はゴツサムシティに、」

「え、ゴツサムシティですか？」

途端、彼女の目がきらりと輝いた。ゴツサムシティという単語が彼女の琴線に触れたらしく、彼女は嬉しそうに笑みを深めた。

「懐かしいです、ゴツサムシティ。湾を挟んでいるとはいえ隣の街なのに、全然行けてなかったです」

「あれ、アリアさんってゴツサムシティに行ったことあるんですっけ」

「もう、前に話したじゃないですか。18年前まで、私と両親はゴツサムシティに住んでたんですよ」

「おや、とクラークは首を傾げる。記憶に引つかかる様な、無い様な。……あ！そうだ、確かにお話しされてましたね。……そうだそうだ、僕、お酒が入っていたので詳しいところまでは覚えていなくて、申し訳ないです」

「そういえばそうでしたねえ。最後はロイスさんに引き摺られてまし

た」

「…いやあ、お恥ずかしい」

カチリ、とパズルのピースがぴったり嵌る。少し思い出せば、芋づる式ですると全容が脳内に浮かんだ。

いつの日だったか、彼女の家族の食事に招待された日。ロイスがゴッサムシティの犯罪率の高さを嘆き、クラークがそれに同調した。言葉の応酬を続ける内にバットマンの話題に移行し、彼女とその両親が思い出話を語ったのだ。

「なんせ18年前ですから、その頃からすっかり変わってしまったんでしょね、あの街は」

酒の席で楽しくなる様な話ではなかった。

ゴッサムシティを覆い尽くしてしまう大洪水がヴィランによって引き起こされ、街は壊滅状態に陥った。住む場所を失った彼女達は、漸く連絡の取れた親戚を頼りに引越す最中に崩落する瓦礫に巻き込まれてしまったそうだ。当時少女であった彼女だけは無事であったが、何も出来ずに立ち尽くすばかりで。

「犯罪率が異常って、今でもニュースでやってますよね。そこは全然変わらないなあ。きつとあの人も、ずっと頑張っているんだろうな」
「……ん？」

生存が絶望的であった両親は、しかし今なお元気に五体満足で生きている。それは当時、両親の救助に尽力した者達がいたからである。

「…あ、」

その者こそ、バットマン。
と。

「クラークさん？」

「あああ!!？」

「わっ!？」

狩人、と呼ばれた人物。

「あ、アリアさん!？」

「は、はい何でしょう!？」

突然大声を発したクラークを、周囲の通行人は訝し気に見る。だが

彼は気にも留めず、驚いて1歩退いたままの彼女に詰め寄った。
「この後お時間、よろしければ！その、狩人という人物について、お伺いしたく！」



目の前に湯気を薫らす紅茶が置かれ、クラークは恐縮のあまり身体をぎゅつと縮こめる。

「落ち着きましたか？」

「はい…あの、本当にすみません…」

「構いませんよ、お父さんで慣れてますから」

「おーい？今俺を遠回しに揶揄ったなー？」

「知りませーん」

急に叫んでしまったことを改めて謝罪し、紅茶に口付けた。紅茶にはてんで無知の為種類は分からないが、香りと色がとても良い。微かに桃の味がした。

「あらクラークさん、いらっしやい。なあに、私だけ仲間外れにして楽しくお喋り？」

「お母さん、丁度良かった。あのね、クラークさんが狩人さんについて話を聞きたいって」

「あらあらまあまあ！そういう事なら是非」

奥から現れた母親は、狩人という単語を聞くなり目に見えて上機嫌になり、いそいそと着席した。好意的な態度が奇妙に映ってしまい、クラークはそつと視線を落とす。

「もう18年経つのねえ。懐かしいわ」

「私なんて凄く小さかったわ。でもあの時の事は今でも鮮明に思い出せるの。お父さんもそうでしょ？」

「そうだな。ああ、懐かしい。出来ればバットマンにもう1度抱き付いて、狩人の人に直接有難うと伝えたいなあ。そういえばクラークさん、どうして急にこの話を？」

暫く紅茶を見つめていたクラークは、意を決して顔を上げた。狩人

に好印象を抱く彼等にとって、今から話す内容は残酷に思えてしまった。

「今僕が仕事で追っている事件なのですが、狩人が関わっているのです」

「ええっ」

彼女、アリアが驚愕の声を上げた。

「皆さんを助けた狩人とは別人だとは思いますが、少なからず関係していると思いました。以前窺った話の中で聞いた特徴と、大部分が一致します」

「…そう、なんですね」

「僕は記者でしかありませんが、この事件について早急に対処しなければならぬと強く思っています。…皆さんにも、皆さんの命の恩人に対してあまりに無礼ですが、どうか教えて頂けないでしょうか」
座ったまま、バツと頭を下げる。クラークが見せることの出来る誠意はこれが精一杯だ。少しでも狩人について情報を得るため、彼はこうするしかない判断したのだ。

暫く、時計の秒針の動く音だけが場を満たした。彼等にしてみれば、恩人を売ってくれと言っていると同義なのだ。答えられずにいて当然だ。

呆れられてしまっただろうかと思いつつ、聴覚が小さな溜息を捉えた。

「頭を上げて下さい、クラークさん。そもそも下げる必要もないですよ」

「ですがアリアさん、」

「確かに狩人さんは恩人ですが…、それはそれとして、あの人はとても罪深い人だと思っっていますよ。ねえ？」

「えっ」

アリアの問いかけに、両親は苦笑いを浮かべながら頷いていた。呆気にとられたクラークが暫く口を開けていると、彼女は紅茶を一口飲んでから言葉を紡いだ。

「ゴツサムシテイで今何が起きているのかは把握出来ていませんが

…、きつと、見るに堪えない惨たらしい殺人事件が起きているのでしよう」

「ええ、そうです」

「私達を助けてくれた狩人さんも、同じです。沢山の人を殺していました。多くの命を奪ってしまいました」

彼女が語る狩人は、想像を絶するほどに恐ろしい存在だった。

超常的な身体能力にものを言わせ、数多くの死体を作り上げて逆さ吊りにしていった。被害者の大半は裁かれるべき犯罪者であったが、軽微の罪を背負う程度の者、そんな彼等を庇う者まで対象だったという。

18年前というと、クラークはまだ世間を知らない子供だ。それに加えて、その少し前の街を覆った大洪水の影響が深刻であったため、ゴッサムシティの外にはあまり情報が出回らなかったのだ。詳細を知らないのも、無理はないことである。

話を聞く限り、アリアとその両親が出会った狩人は獣に対する執着が一等強い様に思えた。他人の内に獣性を見出し、その淀みを狩り殺す。その異常性は、きつとクラークが会った星謳い、まだ見ぬ呪血や濡羽より恐ろしいものであると思えてならない。

「…でも、やっぱり、私達の恩人なの」

母親が優しい気に語る。

「私と夫は瓦礫の下敷きになったけど…、身体の内臓が潰れたし、内臓や骨だって飛び出て、自分が何なのか分からなくなるくらい、酷かったわ」

クラークが目を剥いた。有り得ないときえ言いかけてしまった。

身体の一部が潰れ、内臓や骨が飛び出る程の大怪我を負って、何の後遺症もなく五体満足で生きているなど、有り得ないと思ったのだ。

「助かった後に聞いたが、その状態で2日ぐらい経ってたらしいな」
「2日もっ!?!」

父親の言葉にとうとう声を上げてしまった。そのような大怪我を負っていたのなら、まず間違いない出血多量で、2日と言わず30分以内には死んでしまう筈だ。出血多量でなくとも、敗血症性ショック

ク、窒息などで、殆ど即死したっておかしくない状況だ。

「いやあ俺も死んだと思ってたんだけどな、なんかこう、声が聞こえたんだ」

「こ、声ですか」

「感情が籠ってないっていうか：でも優しい気な声で、もうすぐ助けが来るから頑張れって」

「そうそう、聞こえたわ。『狩人様が助けに来るまで、どうか生きていてください』って。そうしたら何故か、生きる気力が湧いてきたの」「ま、正直意識も朦朧としてたから正確じゃないかもしれないけどな」

その後、狩人とバットマンに瓦礫から引き上げられ、狩人の不思議な力によって傷が跡形もなく消え去ったのだという。

「ほら最近話題の、ジャスティス・リーグだったかしら？彼等みたいなメタヒューマンっていうのかもしれないわね」

瀕死の重傷から一瞬で健康体となり、警察の手によって親戚の家に送り届けられて暫く。警官がバットマンを引き連れて家を訪ね、狩人はもう現れないと告げていったそう。狩人宛の感謝の手紙をバットマンに託したが、届けられたかは今でも分からない。彼と会ったのも、それきりだからだ。

「もう、お父さんとお母さんばかり話すんだから」

「あらごめんねアリア」

バットマンは、18年前にゴッサムシティに現れた狩人とは面識がある。つまり狩人の手口はその時に知識として得た筈で、狩人が当時事件を引き起こしているのならその対策も考えついている可能性が高い。

であれば、彼は今回の件に狩人と呼ばれる存在が関わっていることを直ぐに見抜いた筈だ。だが敢えて1ヶ月半も解決への進展が無い様に見せていた。その理由は恐らく、関係のない無辜の者を巻き込まない為。その対象に彼の信頼している警官すら含まれているのなら、彼は人間の手に負えない事件であるのとつぐに見抜いていたと考えられる。

ジャスティス・リーグは上位者である星謳いの力によりゴッサムシ

テイに収集された。だがバットマンもまた、ゴッサムシティに人外の存在たるメタヒューマンの集い、ジャスティス・リーグが来る事を望んでいたのかもしれない。

となれば、クラークの目的は定まった。

現在のジャスティス・リーグの最終目標は、獣の病の根絶と飛来する上位者の撃退だ。

加えて、その後を見据える。

全てが終わったとして、狩人という存在が友好的になるとはどうしても思えない。特に星謳いもまた上位者。生命を冒瀆する存在であり、今後人類に対して何の危害も加えない未来が想像できない。

仮に狩人達が、18年前の狩人と同じような狂行を始めようと画策しているのなら、それを止めなければならぬ。

呪血と濡羽の搜索は仲間に任せ、クラークは先ずバットマンと接触する事とした。

狩人という存在に対して、現状最も詳しい人類だ。ゴッサムシティを守るためならば、あの闇の騎士はきつと協力してくれる。

ピンポーン。

「あら、私出ます」

どうやら来客らしい。チャイムの音で我に返ったクラークは窓の外を見遣り、夕日が既に沈み切った事に気付いた。

「こんな時間まですみません！来客もあるようですし、僕はこの辺りで」

「気を付けてねクラークさん。狩人さんの仲間が関わってるなら、きつと恐ろしい結果になるわ」

「バットマンを頼ると良い。彼はきつと狩人について誰よりも知ってる」

脇に置いていたバッグを慌てて担ぎ、アリアの両親に何度も頭を下げてから玄関へ向かう。

リビングのドアを開けると、丁度アリアがチェーンキーを外しているところだった。

「僕はここでお暇します。本当にありがとうございました」

「大丈夫ですよお。それにしても、こんな時間に誰かしらね。ロイスさんかしら」

「いやロイスはあと一週間もしなきや帰ってこな…、」

ふと、気付く。

この気配。

「待ってアリアさん、」

ああ、直ぐに気付くべきだった。

「開けては駄目だ!!!」

無常にも、玄関の扉は開かれた。

外にいる者は見覚えがあった。あり過ぎた。特徴的な形の目隠し帽、白で統一された服は聖職者の様な出で立ち、少女の様な小柄な体軀。

「こんにちはあ。或いはこんばんわ、かしら?」

花卉の様な唇が可愛らしく弧を描いた。

「少おしだけ、お話よろしくて?」



ゴツサムの街は眠らない。眠らないまま夢を見る。

だがそれは中心部や、マフィアが巢食う裏世界の話だ。郊外の外れも外れにある廃れた港は、何もなさ過ぎてホームレスすら近寄らない。極稀に麻薬等の取引場選ばれるが、本当に稀であるし、万が一バットマンに襲撃された場合障害物が無い為逃げ切ることが困難だ。人気がない、広い場所。

ならばここは、一般人を巻き込む心配をしなくとも良い格好のリングである。

「おおおっ!!!」

「くっ!!!」

呪血が神速の一閃を放つも、ダイアナは腕を交差させて腕輪で難なく防いだ。奴隷からの脱却を象徴するそれは、不屈の精神に基づき決して壊れず、どんな攻撃も弾き飛ばす。

「ダイアナさん、向こうも誘導OK！」

「ありがとうバリー！」

「ああ!? 濡羽の、あんだだけ大口叩いておいてあっさり罠に嵌ってやがる！」

呪血と濡羽、両名を廃港に誘導して少しの時間が経つ。その頃には、ダイアナは呪血の太刀捌きを完全に見切っており、僅かな傷を負う事さえ無くなっていた。

しかしそれは相手も同じ事。呪血もダイアナの攻撃を見切り全て避けている。互いに決定打を与えられずに、もどかしい思いが心中を満たしていった。

「どうしても協力する気はならないのかしら!?」

「けっ、阿呆め! 星謳いのに騙されていとも知らずに! どうせあの女が獣の病の原因だろ!」

「これからゴツサムに現れる上位者って存在については無視するのね!」

「俺と濡羽のがいれば十分だろ! 上位者なんて地底で飽きる程狩ってたっての!」

運良く、人気のない路地裏で殺し合ってる両名を見つけられたが、協力の交渉はあえなく失敗。星謳いの名前を出した途端、態度が豹変し結託して襲い掛かってきたのだ。

現在はこの廃港におびき寄せ、少し乱暴をして無力化しようとする互いに争っている。

「彼女、酷い嫌われ様だ。正直僕も得意じゃない」

「イカれた聖歌隊だぞ、聖歌隊! 人間だった頃から平気で麻酔無しの人体実験だつてしてたんだぞあの糞女!」

刀を収め、再び抜刀、2連。右手で上手くいなしつつ左拳を振り上げるが、頬の皮を僅かに裂くだけに留まる。

その隙にバリーが突進を仕掛けようとするが、それを察知した呪血がターゲットを変え、瞬間移動。バリーが超高速を発動する前に、左拳で彼の顔を殴り飛ばした。

バリーの超高速は、スピードフォースと呼ばれる次元にアクセスす

る事で引き出すことが出来る仕組みだ。その行為は現在に至るまでに最適化されているとはいえ、アクセスしようと思っただからスピードフォースにアクセスして力を引き出し、超高速を発動させるまでに僅かなタイムラグが生じる。そしてそのタイムラグより、呪血は速く動かせてしまうのだ。

バリーは吹き飛ばされながら速度で負けてしまった事に驚いていると、呪血は凶悪な笑みを浮かべて高らかに告げた。

「それでも俺は狩人の中じゃ遅い方だぜ。因みに濡羽のは最速の異名を持つ狩人だから、今頃お仲間刻まれてるんじゃないかねえか？」

「無理だった。無念」

「うおおい後ろに立つな馬鹿が!!」

「呪血の、貴公は本当にお喋りだ。口を閉じることを推奨する」

嘲笑うかのように見下す呪血の後ろに、濡羽がぬつと現れる。彼女の方にも外傷はなく、成程最速の異名を持つだけある、とダイアナは感心した。アーサーとビクターを相手取り無傷でいるなど、ダイアナでも難しい事であった。

「バリー、無事かしら？」

「問題ないよ。いてて、あんまり力籠ってなかったから歯も取れてない」

「うるせえ筋力に振ってねえんだよ…」

「非力だな呪血の」

「うるせえ!!!」

ダイアナが横目でバリーの無事を確認している間、アーサーとビクターの足音が聞こえてきた。そちらも大きな怪我を負っている様子は無く、しっかりとした足取りだった。

「悪い、逃がしてた」

「構わないわ。4人で一気に叩きましょう」

「範囲攻撃が有効だ。俺が前に出よう」

「捕縛準備は問題ないよ」

狩人は対人戦に異常に特化しているが、複数戦や広範囲の攻撃にめっぽう弱い。星謳いからの情報であったため信憑性は低かったが、

どうやら正しかった様だ。

狩人は確かに強く、恐ろしく、脅威である。だが戦闘を重ねて、対処出来ない相手ではない事が理解出来た。

降参すれば良し、抵抗するならば無理矢理にでも無力化し、後顧の憂いを絶つ。緊張感が最大限まで高まった時、ふと呪血が言葉を零した。

「なあ濡羽の。星謳いの協力するのと、死ぬかもしれないが奴等を殺して星謳いも殺して、獣も上位者も殺し尽くすのと、どっちが良い？」

あまりに気安い皆殺し宣言に、濡羽は一切動揺せず静かに答えた。「狩人も獣も上位者も、庇い立てをする者も殺す。…星謳いのは、嫌いだ。彼女は不幸しか呼び込まない」

「だよなあ。獣の病の解決に一番近いかもしれないが、星謳いのは無いよな、うん」

呪血は刀を鞘に納めて抜刀の構えを取り、濡羽は曲剣を連結させて大鎌に変形させた。

「一時協定だ、濡羽の狩人。此処からは全力で塵殺だ」

「承知した、呪血の狩人よ。我が血に賭けて成し遂げよう」

瞬間、狩人から尋常で無い程の殺気が発せられた。来る、と認識する間もなく、大鎌の刃がダイアナの首に迫る。

「あっ——!?!」

戦士としての勘が、腕を持ち上げた。轟音とも言える甲高い金属音が響き、ギリギリのところで押し留めることが出来た。

だが、獲物は大鎌。その湾曲した刃を完全に防ぐことは叶わず、切っ先が肩に食い込み激痛を齎した。

「ダイアナっ!!」

ビクターが腕を変形させながら駆け寄り、ダイアナに当たらないギリギリを狙って電磁砲を放つ。濡羽はその時点で既にダイアナから離れており、電磁砲を危なげなく回避した後、再びダイアナに斬りかかる。

狩人は、対人戦に超特化している。ジャスティス・リーグの想定を

遙かに超える程に。

「くそ、全然本気じゃなかったのかよ！」

悪態をつくアーサーに、呪血が一閃。見切れる速さであったため紙一重で避けようと身体を逸らした瞬間、刃の違和感に気付く。

途端に全身を駆け巡った嫌悪感に従い、想定していたよりも大きく身体を逸らし、やや大げさに避ける。

その刀は——呪血自身の血であった。

刀に纏わりつくように夥しい量の血が凝固し、刃を形作っていた。結果としてリーチを長くさせ、少し前と同じ感覚で避けていたら致命傷は避けられなかった程に凶悪さを増していた。

そして、頭の中で鳴り続ける警鐘。——あの血に 触れるだけでも、マズい。

濡羽は、狩人の中で最も早い。ならば呪血は、狩人の中で最も呪われた血を持っているのだ。

「アーサーさん!？」

「バリー、離れてろ。隙を見て突進してくれ」

「わ、分かった！」

速さも増し、リーチも変わった。そして殺気に満ち溢れている。

ならば此方も、相応の覚悟をもって挑まねばならない。腕の1、2本を切り落とされることを想定しながら、アーサーは感覚を研ぎ澄ませた。

「1人で2人相手はやはりキツイ。私と貴公で1人3秒、どうだ」

「乗った」

濡羽は呪血の隣に行つてそう囁き、大鎌を構え直す。キツイと称したが、ダイアナは肩に怪我を負い、ビクターはパーツを数か所切り落とされた。戦果としては十分すぎる程だ。

呪血も早めに片を付けようとしているのか、濡羽の提案に賛同する。

来るか。

4人はかつてない程の集中力を発揮し、相手の出方を伺う。僅かでも見逃すまいと、瞬きすら忘れて食い入るように見つめた。

そのまま僅かばかり睨み合い——、「……シィ!!」

呪血と濡羽、両名が同時に後ろの暗闇へと投げナイフとメスを投擲した。

「えっ!?!」

突飛な行動に、思わず驚愕の声を上げる。意味の無い行為に思えたが、その後直ぐに金属が弾かれる音を聞き、第三者の存在を察知した。

「……やっぱり居やがったか、‘月光’の」

「居たとも。僕は狩人なのだから」

現れたのは、白い装束を纏った見た事の無い狩人だった。呼ばれた

‘月光’という名前、月明かりに照らされる顔立ちから、ダイアナは彼が気に入っているカフェの店員であることを瞬時に察した。

「騙したのね」

「済まないダイアナ、隠し事をしていた。君達と接触したのも星謳いの彼女の命令だ」

「あの女が言っていた‘協力者’はアンタだつてののか」

古ぼけた、しかし手入れの行き届いた大剣を肩に担ぎ、月光は2名の狩人を睨みつけた。月光が星謳いの協力者であれば、ジャスティス・リーグの味方ではある。丁度挟み撃ちの様な状態となり、呪血が濡羽の背後に回り背中合わせの状態となった。

「月光の、久しく」

「相変わらずマイペースだな濡羽の。どうか降伏してくれ。襲来する上位者を撃退するには貴公らの力が必要なんだ」

「嫌だと言ったら」

「そうだろうと思った。だから連れて来た」

「は？誰を——」

ピンの様な金属製の何かを抜き取る音。暗闇から何か、呪血と濡羽の頭上に放り投げられた。

月明かりがあるとはいえ、時間帯は夜。狩人は投げられた物が何なのかを把握できなかった。

ただ、偶々それをはつきり視認したバリーが直ぐ様超高速を発動。

それが起動する前にダイアナとアーサー、ビクターを無理矢理振り向かせ、更にしやがませる。3人が突如体制を変えられたことに驚いた瞬間——ピピツ、と独特の電子音と共に、閃光が周囲を包んだ。

「ぎょう!？」

「がつ!？」

閃光手榴弾が炸裂し、呪血と濡羽のみが苦悶の声を上げる。常人であれば半日も視力を失う程の威力を持つそれは、暗闇に慣れた狩人の目に深刻なダメージを与えた。

突然の襲来と想定外の攻撃に思わず武器を手放し、目を覆う。その隙をつき、月光が武器を遠くまで蹴り飛ばした。

合わせる様に、再び暗闇から何かが放り投げられた。漁業で使われる様な大きい網である。2人を余裕で包み込み、瞬間青白い電流が迸った。

「がああああああ!!！」

悲鳴。

激痛に耐えられずに藻掻き、しかし網が深く絡みつき身動きが取れない。呪血と濡羽は、こうしてあっさりと捕縛されたのだ。

「くそ、クソ、糞!!陰湿な蝙蝠め、貴公は絶対に吊るし上げて見世物にしてやる!」

「…象すら一瞬で気絶させられる出力なんだがな」

コツコツと踵を鳴らしながら、暗闇が形を成して現れた。全てが黒で統一された装束を纏う闇の騎士は、微塵も慌てる様子を見せずに、転がる呪血と濡羽を静かに見下ろした。

「協力ありがとう、バットマン。貴公がいなかったら彼等の中で死人が出ていただろう」

「狩人の対処法は嫌という程研究した。もう日の目を見ることは無いと思っていたが」

月光が連れて来た人物は、バットマンであつたらしい。いつコンタクトを取ったかは不明であるが、誰よりも早く協力関係を結んでいたらしい。

「貴方が、バットマン…否、ブルース・ウェイン」

「…君はサイボーグだったな、ジャスティス・リーグの」

思わず、といった様子でビクターが声をかける。ゴッサムシティで生まれ育ってきたが1度も出会う事の無かった街の守護者が今、目の前にいるのだ。

バットマンは本名を知られている事実を敢えて言及せず、ビクターを数秒見つめるだけで直ぐに目を逸らした。馴れ合いは不要と考えているのだろうか。

「ダイアナ、怪我の手当てを」

「…あら、ありがとう」

「ぼ、僕も手伝うよ!」

月光が包帯を片手にダイアナに近付く。騙されていたとはいえ親切心を無下には出来ず、彼女は少し悩んだ後にお礼の言葉を述べた。

「きやあああああ…」

アーサーは散らばったビクターの部品を集めて手渡す。暫くバットマンを見つめたままだったビクターは漸く我に返り、マザーボックスの力で自己修復を始めた。

「…月光の、貴公は何を考えてやがる」

「無辜の民を守る。我が導きが示す先はそれ以外に無い」

「あーはいはい。貴公はそんな狩人だったな」

「目が痛いいい。どうしよう、呪血の」

「俺はもう痛くないんで知らん」

どうやら呪血と濡羽は完全に戦意を失くしてしまっただけらしい。網に絡まりながら不貞腐れる様は滑稽ではあるが、強烈な光を放つ閃光手榴弾と象を一瞬で気絶させられる電流を受けておきながら既に回復している様子に、やはり油断は出来ないと全員が思い知った。

「…ああああ…」

月光とバリーがダイアナの肩に包帯を巻き終えたタイミングで、月光が口を開いた。

「これから星謳いのに交信して結果を伝える。協力は約束できなかったが、無力化は出来たと」

「ならクラークにも連絡しましょう。こっちは無事終えたわって」

「…それは良いんだけどよ、」

「あら、何か？」

少し不満げに、アーサーが切り出した。

「さつきから聞こえる悲鳴、何なんだよ」

「きやあああああ!!」

瞬間、轟音。

コンクリートの地面がガラスの様に割れ、大きなクレーターが出来上がった。立ち上る土煙に映る黒い人影。月光とバットマンは同時に得物を構えたが、ジャステイス・リーグの4人は苦笑いを浮かべるだけで特に動こうとしなかった。

こんなことが出来る人は、たった1人しかないのだから。

やがて足音と共に土煙から現れたのは、予想通りワイシャツ姿のクラーク…と、何故か肩に担がれている星謳いの狩人。

「…信つじられません!!確かに急いで欲しいとは申しました、でも高く飛べとは申していませんが!!」

「急ぐならあれが精一杯なんだってば!低すぎると直ぐ一般人に見つかるんだよ!!」

「知ーりーまーせーんー!貴公の都合なんてどうでも良いですう!高いところから落ちたら死ぬに決まってるじゃないですか!」

「だからしっかりと担いだらうー!」

「荷物じゃないんですから、肩に担ぐなんて横暴な真似止めて下さ、おえ、吐きそう」

「え、肩で吐かないでね。えいっ」

「だからって投げ捨てるのはぎやんっ!!」

言い合いの末地面に投げ捨てられた星謳いは、隠された瞳を恨めし気に歪めてクラークを見つめた。クラークは態と気付かない振りをして、にこやかに笑いながら片手を上げて挨拶をした。

「皆、遅れてごめんね。ちよつと情報収集に手間取っバババババットマン!!?何、え、ダイアナ怪我してる!?狩人の引き揚げ!?港だから漁で

もしたのかい!？」

そして驚愕。

怪我をしている仲間と、網に絡まって不貞腐れている狩人2名。それを見下ろす別の狩人と、ジャステイス・リーグが探して止まないバットマン。情報の過剰供給に、クラークの脳は一時的にフリーズした。

「う、おえ、ふう、落ち着きました。あらあらあら呪血の、濡羽の。無様に転がっていますねえ。後世に残したい程に滑稽です」

「おい蝙蝠男これを解け。今直ぐだ。あの糞女が1番害悪だぜ殺す!!!」

「月光の、首尾良くミスター・バットマンも引き入れましたね。お見事ですつて違ーう!!ちよつとかなりマズい事態になってましてですね!？」

優雅に取り繕おうとした直後、星謳いは叫び声を上げて慌てた様に捲し立てた。

「ええ、ええ。わたくしの想定よりかなり深刻、その更に酷く深刻です、言い争っている暇はないのです」

「貴公の想定がぴったり当たった事なんてないだろうに」

「黙らっしゃい濡羽の!!良いですか?耳の穴かっぽじって聞いて下さい!」

大きく息を吸い、星謳いは残酷に告げた。

「ゴッサムシティのヤーナム化が進んでいます」

「になっ!?!」

ジャステイス・リーグは首を捻ったが、狩人達と…バットマンが、有り得ないと言いたげに目を見開いた。

「事の発端は——18年前。我々が『獣哭』と呼ぶ狩人がこの街に現れた日に、全ての終わりが始まりました」